FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO
精霊界の
お騒がせ娘
ミークにおまかせ!
安童あづ美
画 鴨川たぬき
フランス書院
ナポレオン文庫

Seireikai no Osawagase Musume
Miiku ni Omakase!

精霊界のお騒がせ娘

ミークにおまかせ！

安童あづ美

画 鴨川たぬき

精霊界のお騒がせ娘
ミークにおまかせ!
●もくじ

挿画=鴨川たぬき

みかみ・きょうこ
▲三上杏子
19歳の短大生。おっとりしているわりに芯が一本通っている。
▲ミーク
拓也の新人守護精。どこか抜けていて、失敗ばかりしてしまい……。
おかざき・たくや
◀岡崎拓也
19歳の予備校生。恋人の杏子との初体験を夢見ているが……。
登場人物
さいじょういん・あやか
▼西條院彩香
怪しげな『心霊相談所』を開いているボディコンお姉様。
えんどう・ゆきえ
▼遠藤雪江
彩香と同じ大学の2年生。巨乳を目当てに、近づく男は絶えない。
みさと
▼美里
淫魔にとり憑かれた女子高生。

精霊界のお騒がせ娘

ミークにおまかせ！

第1章　ラブホテルのハプニング

思いのほか柔らかな唇の感触が、拓也の全身を貫いた。
(マシュマロのようだって……？　ウソだよ。もっとこう、とろけるみたいな感じだ！)
拓也は薄目を開けて、自分の唇に、ピンク色のルージュを引いた唇を押しつけている杏子を見つめた。杏子はしっかりと目をつむり、どこか、震えているようだった。
透き通るように白いふっくらとした頰は、ほんのりと紅く染まり、彼の背にまわされた手には、かなり力が入っている。
短大に入学してから長い髪にかけた、ゆるいウエーブパーマのツインテールが、夜風に踊っている。
(俺は、世界一幸せな男だぁぁっ!!)

拓也は胸をときめかせ、音をたてて喉を鳴らした。
岡崎拓也（おかざきたくや）は、高校2年の頃から同じクラスだった**三上杏子**（みかみきょうこ）に恋心を抱いていた。良家のお嬢様っぽく（実際、杏子の家は裕福だった）おっとりしていて、それでも芯が一本通った杏子は、男子生徒の間で決して表だちはしないが、密かな人気を博していた。
高校3年の時、拓也は何度、杏子の白い裸体を想像しながら自らを慰めたかわからない。まじめで純情な拓也は、そのたびになにか、杏子を欲望の対象にしてしまったことに罪悪感を感じ、自分を責めた。
勉強に集中しようと思っても、杏子のことが頭に浮かび、ずっと集中できなかった。
そんな拓也が勇気を振り絞って杏子に自分の胸の内を告げたのは、彼が受験したすべての大学に振られ、唯一予備校の生徒手帳を手にした日のことだった。
——私も、拓也君のこと、ちょっぴり気になってたんだ——
女子短期大学の家政科に入学の決まっていた杏子が、うつむいて真っ赤になりながらそう答えてくれた夜、まさに彼は人生の喜びにあふれていた。
それから半年。
お弁当を持って公園に出かけたり、ディズニーランドにいったりと、ふたりはふたりだけの楽しい、そしてまどろっこしいほど清らかな時をすごしてきた。

そして今夜だ。
――きょ、杏子ちゃん……――
杏子が短大の授業で使う資料さがしにつき合った帰り道の公園で、拓也は勇気を奮って、彼女の肩に手をまわした。
――拓也君……――
そんな拓也に応えるように、杏子も彼の背中に手をまわして、そっと目を閉じた。
(俺は一生、杏子ちゃんを離さないぞ！　離すもんかぁっ！)
拓也は、唇を押しつけ合うだけの幼い口づけで、杏子の唇の感触を味わいながら、心に誓った。
(どんなことがあったって、杏子ちゃんを守るんだ。杏子ちゃんは、俺のすべてだぁ！)
「んん……」
苦しそうに杏子が顔をゆがめ、そっと唇を拓也から離した。
甘い吐息が、拓也の唇をかすめる。
「杏子ちゃん……」
「ごめんなさい、拓也君。キスがこんなに息苦しいなんて、私知らなかったの」
はにかみ、恥ずかしそうに言う杏子の様子が可愛らしくて、拓也は腰が砕けそうだった。

「杏子ちゃん……キス、初めてだった？」
　小さく、杏子がうなずく。
　それから、少し怒ったように口を尖らせて、言った。
「なによ？　じゃあ、拓也君はベテランさんなの？」
「まさか。僕だって、初めてだよ！　だからあんまり……うまくできなかったかも……」
「あら！」
　杏子と拓也は、しばらくお互いの顔を見つめ合っていたが、やがてどちらからともなく、くすくすと忍び笑いをもらしていた。
「ヤだわ、拓也君たらっ」
「杏子ちゃんこそ」
　お互い、なにがおかしいのか、なにが「ヤ」なのかよくわかっていなかった。
　ただ、ふたりとも照れ臭くて、笑ってごまかさずにはいられなかったのかもしれない。
「あっ！」
　しまいにはコロコロと声をあげて笑っていた杏子が、素っ頓狂（すっとんきょう）な声をあげると真っ赤になってうつむいた。
「どうしたの？　杏子ちゃん」

不思議そうに杏子の顔を覗きこんでいた拓也は、彼女の視線の先を確認し、慌てズボンを二度三度叩いた。
「ち、ちがうんだよ、杏子ちゃん！　これは、その、変なコトじゃなくって、だからあの、そのぉ……」
杏子はもう一度顔をあげ、拓也のジーパンの、はっきりとふくれてしまった股間に目を向けた。
拓也は自らのオトコを呪った。せっかくいい雰囲気だったのに、これではぶち壊しだ。
顔から蒸気が出てもおかしくないくらいになっている杏子を、拓也は申しわけなさそうにうなだれて眺めた。
レースやフリルのいっぱいついた少女趣味の洋服に身を包んだ杏子は、制服を着ていた高校時代よりも、なぜか若く見える。だぼっとした上着と長いスカートの中に、体育の授業で盗み見た、思いのほか大きなバストと、すらっとしていて適当に肉のついた柔らかそうな太腿が隠れているのだと思うと……。
（バカ！　こんな時になに考えてんだよ、俺！）
おさまるどころか、股間のふくらみはますます熱を帯び、勃起の角度を増してゆく。
（やだ、拓也君ったら……）

杏子にとっても、普段は気にしたこともない拓也の男性自身が、今は気になって仕方なかった。

(拓也君も男の人だもん。これって、正常な反応なのよね……)

男性が興奮すると勃起する——そんなことは、杏子だって知らなかったわけではない。

(だけど……こんなに大きくふくれあがるなんて、ズボンのジッパーがはずれちゃいそうだわ)

バージンの杏子が想像していたよりも、下半身のテントは圧倒的に大きく感じられた。

(拓也君……アレ、したいのかな?)

拓也のしどろもどろの告白に返事をし、恋人同士になって半年。とっくにロストバージンしている友人のあけすけな話に耳を傾け、いつか自分が拓也に抱かれる日を、杏子は何度か想像したことがあった。でも、想像はいつだって、キスどまりだ。

想像したくても、杏子はセックスをあまりよく知らない。

けれど、ふくらみ張りつめたズボンはそんな他愛もない空想とちがって、目の前の現実だ。

「今夜……」

「え?」

拓也が声を震わせて、杏子の目を見ずに言った。さっきまでの笑顔は消え、かなり真剣な表情だ。
「今夜……どこかに泊まれないかな？」
（ドキッ！）
ついにきたのかもしれない——杏子は小さくうなずいた。
「うん、いいよ」
そしてぎゅっと、拓也の腕にしがみつく。
（ああ！　ついに言っちゃった）
拓也は、思いがけず口から飛びだした自分の言葉に、今さらながらがたがたと震える思いだった。
自分の腕を強くつかみ、たぶん意識はしていないだろうが、ぐいぐいと柔らかな胸のふくらみを押しつけてくる杏子を連れて公園を出ながら、拓也はさて、これからどうしたものかと考えていた。
予備校に通い受験勉強に集中するためという名目で、親元を離れて借りたアパートの6畳間は、杏子を連れて堂々と入れるほど、きれいではない。それに、壁がダンボールででできているんじゃないかと思うほど薄く、隣人の咳まで聞こえるようなその部屋で、一生の

思い出になる（はず）の、杏子との瞬間を迎えるのは気が引けた。
かといって、シティーホテルに宿泊するほどのものは、拓也の財布には入っていない。
自分に身を任せきり、正面を見ずに下を向いて歩いている杏子にまさか、
『ラブホでもいィ？』
なんて脳天気に聞けない。
ふたりは当てもなく、ふらふらと歩きつづけた。
足は自然に、人通りの多い道をはずれ、入り組んだ路地へと向かっていった。繁華街からはずれたその道には、色とりどりのネオンで飾った、パチンコ店かと見まがうような、いかがわしいホテルが立ち並んでいる。
拓也の腕をつかむ杏子の手の力が、いっそう強くなった。手のひらが汗ばんでいるのだろう、彼女につかまれたワイシャツのその部分だけ、なんとなく湿っているようだ。
杏子の息づかいが聞こえるようで、拓也のいったんは落ち着いた下半身が、また、むくむくと持ちあがった。
（ラブホテルでも……いいよな、もう！）
拓也は決心し、どこでもイイからとにかく入るぞと、あたりを見渡した。
（あそこは宿泊6千円、こっちは6千5百円より。～よりってことは、それ以上する部屋

もあるってことだよな……)
いったん入ると決めたものの、入るは入るで、なかなか決まらない。
(どこにしよう、だいたいこんなにいっぱいホテルがあるのが悪いんだ!)
優柔不断にうろうろするだけの拓也の腕をつかみながら、杏子はもう『どこでもいいから早く入ってよ!』という気分になっていた。ラブホテル街をうろつくのは、思いのほか恥ずかしい行為だ。
ちょうど、宿泊タイムがはじまるのか、まわりは皆カップルばかり。カップルたちそれぞれが発散している『私たちこれから、ヤリまーす』といった空気を、自分たちも周囲にまき散らしつつ歩いているのかと思うと、恥ずかしくて恥ずかしくて、杏子には耐えられなかった。
(ほら拓也、そこのホテルでいいじゃない! あ、そっちだっていいじゃない、もう充分よ!)
心の中で、杏子は泣きながら叫ぶ。
口に出しては言えないから、態度で示そうと、そっと拓也の腕を引っぱってみたりもする。
けれど、焦っている拓也には、なにも通じないようだ。

ご休憩　¥4800
ご宿泊　¥7800〜
サービスタイム　¥4800均一

ふたりは歩きまわり、ついにホテルの影が見えない、ホテル街の一番はしっこまできてしまった。
(やばいよー。ここから先は、ホテルないじゃーんっ)
もう一度、いま通ったばかりの道を引きかえす勇気は、拓也にはない。
「入るよ?」
拓也は、ホテル街の一番はしっこにぽつんと建った『シティー』と店名の書かれたホテルに、足を踏み入れた。
(宿泊7千5百円……絶対俺たちみたいなカップルを狙った、ぼったくり値段だ)
どこにも入る勇気がなくて、ここまできてしまったんじゃなく、元々ここに入るつもりだったんだよ——拓也はそんなふうを気取り、いかにも慣れているという感じで、すっとカウンターに近づいた。
「あのね、泊まりたいんだけど」
なんでもないよというふうに、拓也はカウンターの小さな窓に向かって話しかけた。緊張のあまり声が裏返らないよう、充分気をつけながら……。
「お泊まりですかぁ?」
カウンターの内側から、間延びした中年女性の声が聞こえた。

「ああ。泊まりだ」
「でしたらまずぅ、そこのパネルから部屋を選んでボタン押してくださいなぁ。あっ、パネルのライトの消えてる部屋はぁ、もうお泊まりですからねぇ、まちがえて押さないでくださいねぇ」
「……あ、はい」
拓也はとぼとぼとパネルの前に立った。5かける5で並んだ25の部屋のうち、半分以上はライトが消えていた。
えっと、どの部屋にしようか——またしても優柔不断に悩んでいる拓也の横から、すっと手がのび、301と表示された部屋のボタンを押した。
「壁の色が白くてきれいだからっ。ここにしましょっ、ねっ」
（もうっ、恥ずかしいんだから、早く部屋にいきましょ！）
杏子は唇を嚙みしめて、拓也の腕をぐいっと力強く引っぱった。

☆

「杏子ちゃん……どう、最近？」
「どうって、なにが？」
「いや、色々……その、学校とかさ」

「ああ、うん。まあ、色々あるよ」

ふたりの入った301号室は、拓也が『ラブホテル』に抱いていた印象とは、かなりかけ離れたものだった。

といっても彼が考えていたラブホテルは、天井一面が鏡、いかがわしい回転ベッドにどぎつい色のシーツといった、どう考えてもひと昔前の場末の連れこみ宿だったから、現代の感覚から考えると、その部屋はまず、普通の部屋だろう。

10畳ほどある青いカーペットの洋室に白いシーツのダブルベッドが置かれ、シーツと同じ色の小づくりな応接セットのテーブルの上には、『ホテルシティーにようこそ』と書かれたパンフレットと、大人のおもちゃの販売案内が置かれていた。

部屋の隅(すみ)には、3百円で缶ジュースやビールが買える自販機内蔵の冷蔵庫が置かれていて、脇にはホテルの名がプリントされたコーヒーカップや割り箸がおさまった、細長い食器棚がある。その上には、20インチテレビとビデオデッキが装備されていた。

白い壁に申しわけ程度にある窓は、壁と同色のドアで閉められていて、外を見ることも、外から見られることもできないようになっている。

タオルやガウンがきちんとたたんで置いてある洗面所には、女性用の化粧水や乳液だけでなく、男性用の整髪料も並んでいる。

『消毒済み』と書かれた紙がふたに挟まれた洋式トイレがちゃんと分離しているバスルームは、洗い場も浴槽も広く、ふたりで入っても余裕があるように設計されていた。

ふたりは並んでソファに座り、部屋に入ってからずっと、意味のない会話をつづけていた。

(ああっ!! 俺だってこんな無意味な会話をつづけていたいわけじゃないんだっ! ホテルに入ったはいいものの、いったいどうやって杏子ちゃんをベッドに誘ったらいいんだよぉ)

拓也はふたりして、ベッドから離れたソファに座ってしまったことを、後悔していた。これがもしベッドだったら、別の展開になっていたかもしれないと思うと、ひどく悔やまれた。

「そうか……俺も色々あるんだ、ははは」

「そう」

シーン。

緊張しきっているふたりにとっては耐えがたいほどの静寂が、部屋を支配していた。

(ああっ! 話がつづかないよ。こういう時はいったいなにを言ったらいいんだ)

ダブルベッドを見た時には元気に勃ちあがった拓也の下半身も、今は萎縮してすっかり

萎んでしまっている。
　お互いの心臓のドクドクという響きと、時折どこの部屋から聞こえる、バタンという なにかを倒したような音だけが、部屋に響く物音のすべてだった。
（拓也君たら……もぅ、どうして黙ってるのよぉ。お願い、なにかしゃべってよぉ！）
　杏子は祈るような気持ちで、長い綿のスカートを両手で握りしめた。
（ああ、杏子ちゃん。どうやって誘えばいいんだろう。くそぉ、こんなコトならなんでも いいから、なんかマニュアル本読んどくんだった）
（拓也君たら！　私、心臓が破裂しそうだよう。なんだか気まずいよう）
　意を決したのは、杏子のほうだ。
「拓也君っ」
　拓也の目を見て、杏子は言った。
「な、なに？　杏子ちゃんっ」
　助けを求めるように、自分を見つめかえす拓也を、杏子はちょっと情けないな、と感じ た。
　けれども拓也の、そんな不器用なところにこそ、杏子はいくばくかの好意を感じ、つき 合いはじめたのだ。

「拓也君……あのぅ……」
「うんっ」
しまった、その先を考えてなかった！
決意の末とはいえ、杏子は不用意に声をかけたことを早くも後悔していた。でもここまで言いかけたら、最後までなにか言うしかない。
（そうよ、拓也君に任せてたら、私たちきっと、ひと晩中このソファに座ってることになるんだわ）
つばを飲みこむ音が響いた。どっちの発した音だったか。
「シャワー、浴びようか？」
杏子の声は、からからに乾いていた。
「シャワー……あ、そうだね。じゃ、じゃあ杏子ちゃんから」
（女の子からこんなこと言わせるなんてぇ、拓也君のバカァ！）
杏子はすっくと立ちあがり、逃げるようにバスルームに駆けこんでいった。
（あーあ）
沈黙から解放されたことに、拓也は安堵（あんど）のため息をもらした。
（まいったなぁ。杏子ちゃん泣きそうだった。俺がしっかりしなくちゃいけないのに）

シャワーの音を聞きながら、情けない男とはまさに自分のような男を言うんだろうなと、拓也はがっくりきてしまった。
冷蔵庫を開け、財布の中から百円玉を3枚取りだして缶コーヒーとトマトジュースを買うと、拓也はたてつづけに2本とも飲み干した。
（よし！　その時になったらバッチリ決めてやるぜ）

☆

「お……お待たせ……」
シャワーの音が消えて間もなく、バスルームのすっかり曇ったガラス戸が開いて、湯気とともに、バスタオルに身を包んだ杏子が姿を現わした。
「じゃあ、あの……拓也君、次どうぞ」
胸もとに巻かれたバスタオルからのぞいた杏子の白い肌が、湯気をたてて紅く上気していた。
濡れた髪は降ろされ、パーマのウエーブにそって、天使の輪が現われている。ぽっちゃりとした素脚はふっくらとふくらみを帯びたように火照り、バスタオルからのぞく胸のふくらみの間は、部屋の照明に反射して、水滴がきらきらと輝いていた。
「杏子ちゃん……」

拓也のオトコが、そんな彼女に敏感に、そしてだいたんに反応した。今にもペニスがズボンを突き破って頭を出しそうだ。
バスタオルの下は、下着すらつけていない杏子の裸体がある——そう思うと、いても立ってもいられなかった。
「ねえ、拓也君も、シャワー浴びてきてってばぁ」
照れのためか、それとも湯に当たったためか、杏子の頰はきれいなピンク色に染まっている。ほつれた髪のかかる細い肩は、小さく震えていた。大きく黒い瞳が、心なしか潤んでいるようだ。
もう一度、ピンクのルージュが引き直された小さな唇は、つやつやと光っている。杏子の裸体からはうっすらと石鹸の香りが漂っていた。
「今、入ってきます。入ってきますから」
拓也はあたふたと杏子の脇をすり抜け、バスルームへと飛びこんだ。
それから拓也は、人生の内でも、これほど短時間で体を流したことがあっただろうかというような猛スピードでシャワーを浴び終え、ろくに体を拭きもしないで、腰にタオルを巻いて、バスルームを飛びだした。
「きょ、杏子ちゃんっ！」

ダブルベッドの白いカバーをかぶって、杏子はベッドの上に横たわっていた。
ベッドの脇には、今まで杏子が身体を隠していたバスタオルが無造作に置かれている。
つまり今、杏子は素っ裸でベッドに寝ていることになる。
(私がリードしてあげなくっちゃ、拓也君、ぜんっぜんダメなんだからぁ)
杏子は、高鳴る心音を必死に押さえようと、深呼吸をして拓也のほうに目を向けた。
「拓也君……ね、きて……」
潤んだ瞳が、拓也の股間を貫いた。
「杏子ちゃんっっ!!」
拓也は小走りに、ベッドへと近づく。
その時、腰に巻いただけの拓也のバスタオルが、はらりと床に落ちた。
「えっ」
彼の股間で勃起した生々しいまでに脈打つ肉棒を見て、杏子は一瞬たじろいだ。
(あ、あれが、勃起したペニスなの!? お腹にぺったんと張りついているみたい。真っ赤で……なんだか、そこだけ別の生き物みたいだわ……やだ、先っぽだけてらてら光って、つるんとしてる。それに、大きい……)
その大きさに、杏子は圧倒されていた。とはいっても、拓也のペニスはごく標準の大き

さで、とりたてて大きいというほどのものではない。それでも、裏ビデオはおろか、アダルトビデオすらまともに見たことのない杏子にとって、それは初めて間近に見た男根だ。
(あんな大きいのが、私の中に入るの?)
いきり立った拓也が、いきなりベッドカバーを剝ぎ取った。
「あん!」
ペニスの先端がぴくぴくと震え、激しく脈打った。
(ああ、俺、いま幸せの絶頂!)
はち切れんばかりに張り詰めた股間の痛みが、快感となって拓也の脳天をがーんと殴りつける。
ベッドの中には、杏子の白い裸体が、今すぐ食べてくれと言わんばかりにさらされていた。
手で隠しきれない胸のふくらみ、なだらかな腹から腰にかけての柔らかなライン。どこもかしこも真っ白な身体の中で唯一、むっちりとした太腿のつけ根、両脚の間のわずかな部分にだけ、黒いものが混じっていた。
「杏子ちゃんっ! 俺、杏子ちゃんのこと、愛してるよっ」
いても立ってもいられない。

もはや理性など吹き飛び、性欲の塊になりつつある拓也は、杏子の身体にむしゃぶりついていった。
「あんっ」
「杏子ちゃん、大好きだよぉ」
想像しつくした杏子の乳房に、拓也は顔を埋めた。Dカップはあると思われる杏子の真っ白な乳房の真ん中には、男の手を知らない小さなピンクのぽっちんが、硬く尖って存在感をアピールしている。
「ああ……杏子ちゃぁぁん……」
拓也は両手でしっかりと、乳房を握りしめた。
(や……柔らかすぎる……)
強く握りしめたら、そのまま指が沈みこんでしまうのではないかと思えるほど、杏子の乳房は柔らかく、拓也を驚喜させた。
(いつまでも、モミモミしてたい)
拓也の乱暴な愛撫に、杏子は固く目をつむって耐えていた。
(そんなにモミモミされたら……痛いよぉ、つぶれちゃう)
もちろん、そんなことを口に出して言えるほど、杏子はスレてはいない。

それに、自分の下腹部にグイグイ押しつけられる拓也のペニスの熱さと硬さに、すっかり萎縮(いしゅく)してしまっている。
拓也は、長い時間乳房を触っていたが、
(そうだ! こういう場合は確か……)
いつか見たアダルトビデオのワンシーンを思いだして、拓也はピンクに色づいたほんのちょっぴり突起した乳首に、軽く歯を立てた。
「あんっ!」
痛みに、杏子は思わず声をあげる。
(え? 痛いの? 気持ちいいんじゃなかったのか? 確かビデオの女優さんは、気持ちいいって喘いでたぞ)
エッチなビデオや雑誌でしか女体を知らない拓也は、身体が開発されていないうえ、オナニーすらしたことのない処女の肉体が、どれほどデリケートであるか、わかっていない。
仕方なく拓也は、今度は舌を使って、乳首を舐めまわしはじめた。
「あん……んん……」
(今度のは、ちょっと気持ちいい……)
興奮で硬くなった乳首をペロペロ舐めまわされているうちに、杏子は自分の下半身が、

熱く、ほんの少し熱く、濡れてきたのを感じた。
（やん、なんか変な感じ……。これが、カイカンなの？）
太腿の間が疼いて、頭がぼぉっとする。押しつけられたままぴくぴくと脈打つ熱く太いペニスの存在が、杏子にはとても大きく思われた。
（杏子ちゃん、感じてくれてる……）
拓也は調子に乗って、舌をゆっくり乳首からはずし、そのまま下へ下へと滑らせていった。
（杏子ちゃんのアンダーバスト、杏子ちゃんのお腹……、杏子ちゃんの……）
拓也の舌が、杏子の薄い恥毛へと差しかかった。
（ああん……恥ずかしいよぉ）
杏子は手で、顔を覆った。
興奮しすぎたため、今にも爆発しそうになっているペニスが入る予定の杏子の秘密の場所を、拓也はそっと指で開いた。
「やんっ！」
自分でさえ開いたことのない女体の奥深くを、今さぐられようとしているのだと思うと、杏子は身をくねらせてしまう。でも、これも通過儀礼のひとつなんだと、恥ずかしさを耐

え、手で顔を覆った。
　普段拓也が目にしていた顔は隠され、その代わりにスカートや下着でいつもはしっかりガードされている恥毛に隠された神秘の場所は、パックリと口を開けていた。
　開いた花弁の中では、白い肌の杏子には不釣り合いなほど真っ赤な肉襞が、濡れてぬらぬらと光っている。じっと目を凝らすと、奥のほうで、小さな小さなモノが勃起している。
（これが、クリトリス！　なんか、湿ってるみたいだ……。そしてこのワレメの中には、杏子ちゃんの、杏子ちゃんの、オマ、オマン、オマン……）
　憧れの杏子自身を前に、拓也は半分パニックを起こしていた。
　舌を引っこめ、彼は腰をそこに近づけると、しなやかな杏子の両脚をぐいっと持ちあげる。
「やん！　拓也君！」
「ゴメン、杏子ちゃん！　俺もう、我慢できないよぉ！」
（そんないきなり……だいいち拓也君、コンドームもつけてなぁい！　でも今さら、『ゴムつけて』なんて、恥ずかしくって言えないよぉ）
　いざという時でも、避妊を心配するくらいの余裕が、杏子のほうには残っていた。
　そんな余裕は拓也には、露ほどもない。目は血走り、頭の中は、初めての女体探索でい

っぱいになってしまっている。
張り裂けんばかりにふくれあがった男根の先っぽからは、今にも欲望の液体が溢れそうだ。
(ああ、ああ、杏子ちゃんと、杏子ちゃんと合体するんだ!)
張りのある白い太腿に手を置き、肉の花弁をかきわけ、今まさに拓也は、杏子の未知の部分——自分の痛いほどにふくれあがった肉棒を迎え入れてくれる、使われたことのない女の穴——に、先走り液で濡れた亀頭を差し入れようとした。
(ああ……杏子ちゃん! 俺は一生、君を離さないよっ!)
その時である。
ジリリリリリリリ〜ジリリリリ〜〜!
鼓膜を破るほどの大きな音が、ホテル中に響き渡った。
「な、なに?」
杏子は身体を起こし、拓也から離れると、あたりを見まわした。
「え? ええっ?」
さあ、これからという時に、大音響で行為を遮(さえぎ)られた拓也は、興奮のあまり、すっかりパニックを起こしている。杏子の身体を捕らえようとして、手を宙で泳がせる。

ジリリリリリリ〜〜……
鳴りつづける激しい電子音の合間を縫って、叫ぶような男性と女性の声が響いた。
『火事だぁ!!』
『キャー』
『早く逃げろぉっっっ!!』
「火、火事ぃ？」
拓也は飛びあがって、ベッドから転げ落ちた。
「火火火火、火事ぃぃ!?」
小さい頃、マッチで遊んでいるうちにカーテンを焼き、火の恐怖でわんわんと泣き叫んだ経験のある拓也は、なにが恐いって、火事が一番恐くてきらいだった。
「ひぇぇぇぇ〜〜助けてくれぇぇぇぇぇっ！」
ウ〜ウ〜と、遠くでサイレンの音が聞こえた。
「ひょぇぇぇぇ!!」
完全に気を動転させている拓也は、床を這いまわり、部屋のドアを開けて、廊下に飛びだした。
室内にいた時よりも、ジリリリと鳴り響く非常ベルの音は大きく聞こえ、拓也を心底震

えあがらせた。
「火事だぁ、うわあぁぁ！　火事だアァッッ」
廊下をいったりきたりしながら、ついに非常階段を見つけた拓也は、転がり落ちるように階段を降り、まさに命からがら、ホテルを飛びだした。
「ウワアァァァハァア！……ん？」
ホテルの外で、水の出ていないホースを抱えた消防署員と話していた女性が、息を弾ませている拓也を見つけるとつかつか近づき、言った。
「202号室のお客さんがねぇ、ボヤ出したんですよぉ」
カウンターで、拓也の相手をした女性だった。
「すぐに私が駆けつけてぇ、消化器使ってねぇ、火は消しましたからねえ。そんなに慌てて飛びだしてこなくってもぉ……。あ〜あ、そんなにチンポおっ勃てちゃってぇ……」
「へ？　ボヤ？」
拓也は一瞬、相手の女性がなにを言っているのか、理解できなかった――理解できるほどの理性は、今の拓也からは吹き飛んでいたのだから、当然だ。
「え？　なに？　ええ？」
きょとんとして、あたりを見まわした。ボヤを出したと思われる若いカップルが、横で

警官と話をしていた。女も男もガウン姿で、女のほうは泣いていた。
消防車は次々と帰ってゆき、カウンターの女性も、早々にホテルに引きあげていった。
「つまり……助かったってこと？　ああ……」
安堵（あんど）のため息とともに、拓也はがっくりと腰を落として、その場にしゃがみこんだ。
通行人がくすくすと笑いながら、拓也を見つめている。
「ん……あぁっ！」
拓也は改めて、自分が素っ裸であり、さらに興奮とパニックのため、男性自身を勢いよく起立させていることに気づいた。
「うわぁ！」
出てきた時と同じくらいの素早さで拓也はホテルに逃げこみ、前を隠しながら部屋へと階段を駆け登った。
けれども、この時拓也はまだ、もっと重要なことを忘れているのに気づいていない。
「うわあぁ」
３０１と札の出た部屋に駆けこんだ瞬間、拓也は、
「そうだったぁ！」
と、声をあげた。

すっかり洋服に着替え終わり、髪をツインテールに結い直した杏子が、ドアのようになった窓を開け、外を見ながら、

「おかえり」

と、冷たく突き放した口調で、拓也を見ずに言った。

（やっべー！　杏子ちゃんのこと、すっかり忘れてたあぁ）

しどろもどろになりながら、拓也は薄笑いを浮かべ、杏子の側へと近づいた。

「ははは……もう、恥ずかしいなぁ、俺ったら。ははは……パニクっちゃってさぁ……へへへ……」

自分でも、なにを言っているのかわかっていない。相変わらず杏子は、窓の外をじっと見つめたままで、拓也のほうに、目をやろうともしない。心なしか肩が、震えていた。

「ごめんよぉ、ははは。いやあ……ね、まず俺が様子をさあ、うん、そうだよ、様子を見にいってからぁ……改めてね、杏子ちゃんをね、助けにこよーかとね……ははは」

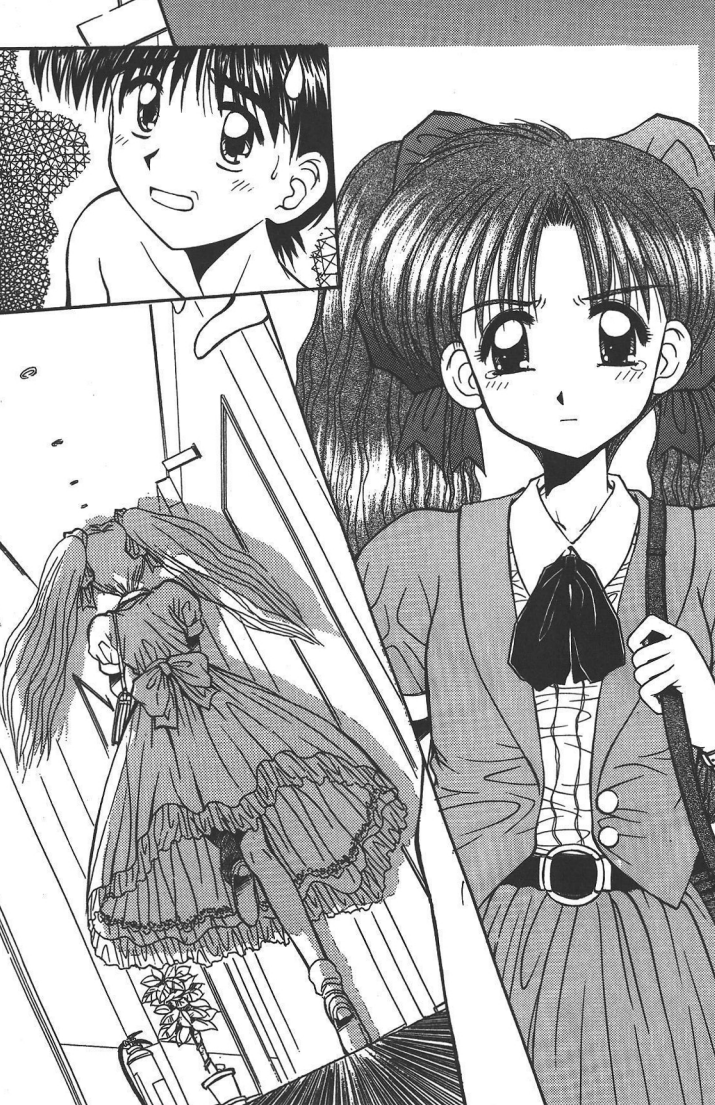
「だからさ、ね、杏子ちゃん……」

杏子は、まったく拓也のほうを見ない。

冷たい空気が、ふたりの間を流れた。

「もうだいじょうぶみたいだし……そ、そうだ、つづきやろ、つづき！」

もうなにがなんだか。拓也は完全に舞いあがってしまっている。
杏子はくるっと振りかえって拓也のほうを向いた。
「え⁉」
杏子の瞳は大きく見開かれていて、そこからは涙が流れていた。涙は頰を伝わり、顎から服の胸もとを濡らしていた。
「た、拓也君の、バカァ！」
杏子は拓也の脇を突き飛ばすように抜けると、ソファの上に置いてあった自分の荷物を手に、部屋の外へと飛びだしていった。
「杏子ちゃん！」
慌てて追いかけようとした拓也は、自分が相変わらず裸のままだということに気づき、急いでパンツをさがしたが、焦っているためか、どこで脱いだものやらとんと思いだせない。
「あっ！」
開かれた窓から外を見ると、ホテルから走って外へ飛びだしていく杏子の姿が、はっきり見えた。
拓也はベッドに腰を降ろし、ため息をついた。

☆

思えばこのところ、拓也はツイていない。
予備校の仲間との徹夜麻雀では、子の倍マンから親の3倍マンまで、たてつづけに振りこむし、先日などついに、久々のトップ目でマンガンを張っていた時に、仲間内では一番弱いとされている友人のダブル役満に振りこんでしまった。
パチンコ店の新装開店に駆けつけてみれば、おそらく回収台じゃないかと思われるような、全然まわらない台に座らされ、周囲がどんどんドル箱を積みあげていく中、ひとり台に金を吸い取られていった。
やっと手に入れたパソコンは不良品、パソコン通信したらウイルスにやられてハードディスクはブッ飛び、コンビニエンスストアで買った弁当には当たって、2日間下痢に苦しんだ。
「俺の人生、ボロボロだあぁぁ！」
拓也はもともと、極端に運がいいわけではないが、こんなにも運の悪い人間ではない。どう考えても、近頃の運の悪さ、ツキのなさは、尋常でないように思われた。
今日も拓也は、予備校の大事なテストの日だというのに、目覚ましが壊れて遅刻したのだ。そのうえ、アパートの駐輪場に置いてあった自転車の車輪だけが跡形もなく盗まれて

いた。そのため、途中で転びながらも駅まで走っていったら、人身事故で電車が遅れていた。どう考えてもテストの時間には間に合わず、とぼとぼと帰路についているところだ。
（なんかに、呪われてんのかな……あれ以来、杏子ちゃんとも連絡がつかないし……）
アパートまでの道を、頼りない足どりでふらふら歩いていた拓也の目の前で、なにかきらりと光る円形のものが、道路に落ちていた。
（ラッキー！　お金が落ちてる！）
ツキが戻ったのかと喜びいさんで、拓也はそれに駆け寄り、腰を降ろした。
「……なんだ、瓶のふたじゃないか。ばかばかしい」
己の不運を呪うように、ふっとため息をつき、ふらふらと立ちあがった拓也は、その瞬間足場を取られて、近くの電信柱に激突した。
「くぅぅぅぅ！　いてえよぉ」
誰もいない往来で、痛みを思わず口に出すほど、むなしいものはない。
仕方ないので、電信柱にでも当たってやろうかと、柱を見据えた拓也は、そこに張られた1枚の紙を見つけた。
「なになに？　ラブリー心霊相談所？」
『ラブリー心霊相談所

最近あなた、なにかお困りごとはありませんか？　理由もなく、不幸があなたに襲いかかってはいませんか？
それは、悪霊の仕業（しわざ）です。
当心霊相談所では、そんなあなたの悩みを、すっぱりきっちりラブリーに解決してさしあげます。　ラブリー心霊相談所、香坂第8マンション404号室』
拓也は、電信柱の隣に建つ煉瓦造りの高級マンションを見あげた。
「ここが、香坂第8マンションか……」
普段の拓也なら、そんなインチキ臭いものには決して手を出さない。『ラブリー』なんて名称からして、怪しすぎる。
けれど、心底自分の不運を呪っていた拓也は、吸い寄せられるように、そのマンションへと向かっていった。

第2章　ボディコンお姉様の心霊相談

静まりかえったマンションの長い廊下に、拓也の足音だけが響いていた。
「ここだよな……」
電信柱から引き剝がしてきたチラシと、目の前のドアに書かれた表札を見くらべ、確認するように声に出して言った。
鍵がふたつついている白いドアの真ん中には、ファンシーショップなどで目にするクマさん形のウッドボードがかけられていて、そこにはピンクの蛍光インキで『ラブリー心霊相談所』と、丸文字で書かれていた。
心霊相談というイメージとはだいぶかけ離れたその看板に、拓也は今さらながら、もしかしてインチキ？　と、思わずにはいられなかった。それでも、せっかくここまで足を運

んだのだし、他にこれといって不運を打開する方法も思いつきそうにないので、腹を決めて、インターホンに手をかけた。
　ピンポーン……。
〝はぁぁい、アヤカでぇす！〟
　インターホンのスピーカーから、若い女の声が流れた。
「あ、あの、チラシ見て……」
　拓也はキンキン響く女の声に焦りながらも、そう答えた。
〝ヤッダーお客さんなの！　いま開けまーす〟
　明るい声とともに、ドアがバーンと勢いよく開けられた。
「あっらー、可愛い青年じゃないの！」
　拓也はつい、（たとえラブリーであろうと）心霊相談所というイメージから、白い巫女の衣装かなにかをまとった、（たとえ声がキンキンであろうと）神秘的でちょっと年老いた女性が現われるものだとばかり思いこんでいた。
　ところがである。
「あっらヤダ！　青年たら、なに固まってるのよ。ハハハ、カタマッテルって言っても、下半身のほうじゃないのよ。キャハハハハッ！」

拓也の目の前に颯爽と現われた女性は、どう見ても『心霊』とはかけ離れた風貌だ。
大きく胸の開いたノースリーブの真っ黒なボディーコンシャスワンピースは、べったりと肌に張りつき、豊かな女体の隆起を悩ましいばかりに見せつけている。ノーブラらしく、目を凝らすと乳房の大きなふくらみのてっぺんで、乳首の突起が薄地の服に浮きだしている。
大きなお尻をようやく隠しているくらいの短いスカートの下からは、むっちりとした太腿に、意外と細いふくらはぎがのびている。パンストもなにもはいていない、素脚だ。
誰でも耳にしたことのあるブランドのデザインサングラスをゆっくりはずし、ストレートの腰まで長い黒髪をかきあげる仕草は、どこかのモデルのようだ。
「さあさ、突っ立ってないで入んなよ。私、**西條院彩香**っていうのよ、24歳、ムレムレのオネーサンよ」
バチンと切れ長の片目をつむってみせる彩香のアダルトな魅力に圧倒され、拓也は呆然となりながら、室内へと足を踏み入れた。

☆

「あ、あの、岡崎拓也といいます。その、チラシ見てですね……最近なんだか異常にツイてないんで……あの……」

高そうな黒い本皮のソファに座らされた拓也は、しどろもどろになりながら、懸命に話をつづけようとした。
彩香は、にやっと笑って拓也の前に立つと、挑発するかのように腰を振って見せた。
「あの……聞いてくれてます？」
彩香はゆっくりと拓也の前に膝をつき、じゃらじゃらと金のブレスレットをぶらさげた手をあげて、それを彼の首にまわした。
「あの……西條院……さん？」
「うふふふ、彩香って呼んで！」
つやつやの口紅が塗られた、ふっくらとした朱唇が拓也の目の前に近づく。
甘く動物的な香りが、拓也の鼻を衝いた。
(なんなんだ、いったい！……ここ、心霊相談所じゃなかったのか？)
「あ、あ、あの……ここ、心霊相談所ですよ……ね？　あの、俺、まちがえて……」
ここはなにか新しい風俗ですか？　と、聞こうとして、拓也はそれ以上なにも言えなくなってしまった。
「むんんん……」
彩香が唇で、拓也の口をふさいでしまったのだ。

（な、な、なんなんだ……）

拓也の唇を割り、彩香の舌が彼の口の中に入ってきた。歯茎を舐め、舌を絡ませるそのねっとりとしたキスに甘い快感を感じ、拓也はしだいになにも考えられなくなっていった。

「んんん……」

（これが……本当のキスってやつか？）

体中の力が抜けていくようだ。

彩香は目を閉じ、片手で拓也の頭を自分に押しつけるようにしながら、もう片方の手を、そっと彼の股間に置いた。

「！……」

口内の粘膜を刺激され、さらにズボン越しにペニスをゆっくりと撫でられ、拓也はおかしくなりそうだった。

リズミカルに股間を撫であげる彩香の手の動きに触発され、拓也は一物が熱く突っぱっていくのを感じていた。

「うふん」

唾液の糸を引きながら、彩香がゆっくりと唇を離した。

「大きくしちゃって……慌てないで、ゆっくり楽しみましょうよ」

彩香は乱れた髪を手で撫でつけると、拓也のベルトをシュルッと抜き取り、ボタンをはずして、ジッパーを降ろした。
「まあステキ。そんなに大きいってことはないけど、とっても硬いわ。カッチンカッチンね。ふふふ、仮性ホーケイ気味だけど、亀ちゃんが張りだしてて、ナメコみたーい」
「あ、あの……」
彩香がズボンを脱がせやすいように腰を浮かせ、膝まで降ろされたパンツからすっかり準備OKになった肉棒を飛びださせながらも、拓也は一応、聞かなければならないことは聞いておかないとと、うわずった声をあげた。
「ここ、心霊相談所ですよね。あの、その、あんまりお金持ってないんで、つまり、風俗だと……」
「くだらない心配するんじゃないの、青年！」
中指をぺろりと舐め、唾液で湿らせてから亀頭をツンとつついて、彩香は言う。
「私はちゃあんとした霊能力者よ。うちはね、三代つづいた巫女の家系なの！」
「ななら、いいんですけど……ででも……」
「OK、OK、万事オ・マ・カ・セッ！」
ツンツンツン……亀頭を何度も指でつつかれ、拓也は言われたとおり、なんでもOKな

気分になっていた。
据え膳食わぬは男の恥、と言うではないか。それに、すっかり熱を帯び、隆々とそそり勃った男根は、樹液を出しきらなければ具合が悪くなってしまうんじゃないかと思われた。
「あ、彩香さんがそう言うんだったら……」
「うふふ、そういうことヨ！」
彩香はサオを軽く握りしめ、口を大きく開けると、パクッと亀頭を口に咥え、勃起を喉の奥へ深く呑みこんだ。
「んぐ……んぐぅ」
「あああぁぁ……」
今まで自分の手でしかこすったことのない肉棒を、ちょっと変わってるけれども超のつくほどの美人が咥えこんでいるのだと思うと、拓也の腰のあたりから、快感が全身にひろがっていった。
「うくうぅぅ」
「どほ、ひもちひひ？」
どう、気持ちいい？——ペニスをしっかりと咥え、口の中で舌を動かしてサオをレロレロ舐めまわしている彼女にそう聞かれ、拓也は首がちぎれてしまうんじゃないかというく

らい、何度も激しくうなずいて見せた。
「き、気持ちいいです。はい……」
拓也の反応に気をよくしたのか、彩香はさらにすごいテクニックで彼を責めたてはじめた。
「う、うぉぉぉぉぉぉぉ！」
ジュルジュバと激しい音をたて、一気にペニスを吸いこみはじめたのだ。いわゆる『バキュームフェラ』で、彩香の頬が吸いこみに合わせてペコペコとへこんではふくらむ。
「あ゛あ゛あ゛あ゛……」
さらに、ペニスを口で愛撫しながら、口端から流れ落ちる唾液で濡れた陰嚢にも手をのばした。
「あ゛はあぁぁぁっ」
彩香は陰嚢を手のひらに包んでモミモミする。手の中でピンポン玉を弄ぶように優しく揉んだかと思うと、時折強く握ったり、強弱をうまく使い分けて刺激を与える。
(気持ちよすぎるよぉ……これが、これがフェラチオってやつなのかぁ)
痺れるような快感が、腰から背筋を通って頭の後ろにまで達している。今の拓也にとってはすべてだ。

温かな女の口中は、彼がオナニーの時に想像していたよりも、はるかに素晴らしい官能だった。
「すっげぇ、俺もう、我慢できないよぉ」
拓也はすっかり、ここへきた当初の目的を忘れていた。
「あらダメよ、まだ出しちゃぁ」
大慌てで拓也のペニスから口を離した彩香が、根元を痛いほどに握りしめて言った。
「あ、イテッ」
「もう、せっかちさんなんだから！　私ね、口内射精されるのは、あんまり好きじゃないのよ」
「こ、こ、口内射精！」
アダルトビデオでしか知らなかった単語が、一気に現実のものとなり、甘い響きを持って拓也の下半身を直撃した。
「こ、こ、こ、こ、口内射精！」
「そうよぉ。どっちかっていうと私、中出しのほうが感じるのよねぇ」
「な、な、な、中、中、中出し！」
もう、我慢できない。

「さ、誘ったのは、彩香さんのほうだからね！」
目を血走らせた拓也は、彩香をソファに押し倒すと、ワンピースのスカート部分をまくりあげて、むっちりとした弾力のある太腿に手を置いた。
「あん！」
彩香は巧みに身を引き、
「自分で脱ぐから、いいのよ」
と、手を交差してスカートを持ちあげると、一気にワンピースを脱ぎ捨ててしまった。
「!!」
拓也は息を呑み、目を見開いて、黒いレースのパンティー1枚になった彩香を見つめた。
Eカップはあるだろう大きな乳房に、広めの乳輪。そのてっぺんには、小指の先ほどの乳首が硬く尖っていた。くびれたウエストから張りだしたヒップへのラインはまるで彫刻のように美しく、熟した女の魅力を醸しだしていた。
高くあがったヒップからほどよく脂肪のついた太腿への線も、申しぶんない。
なによりも拓也が感じ入ったのは、肌の白さだ。杏子も色白だが、杏子の場合は一点の曇りもない、なにをも寄せつけないバージンホワイトだ。それに対して彩香の白は、男を誘い、どんな男の色に染まろうかとうずうずしているような、淫らな白だった。

「もっと、ピンコ勃ちさせてあげる!」
彩香は細くて長い指を、そっと自分のパンティーにかけ、片脚ずつゆっくりと脱ぐと、拓也のほうへポーンと放り投げた。
「脱ぎたて、パンティー……」
高級そうなレースをふんだんに使った黒いシルクのパンティーは、まだ彼女の体温を残し、生温かいようだった。彩香の大事な部分を包んでいた薄い布に目を凝らした拓也は、その中心がほんのり湿っているのを発見し、胸を躍らせた。よれてしわになった部分は、きっと彩香の股間に食いこんでいたんじゃないかと、そこまで想像して、拓也は大慌てで彩香の身体に目を向けた。
パンティーが手もとにあるということは、つまり彩香のへその下があらわになっているということではないか!
「彩香さん……」
濃いめの恥毛に覆われたビーナスの丘は高く張りだし、強く自己主張しているようだ。
「ね、どお? 私の裸体。むしゃぶりつきたくなっちゃうって感じでしょ?」
今にも射精してしまいそうなペニスの疼きに耐えながら、拓也は何度もうなずいた。
情けないことに、拓也は今、腹を空かせた純情な飼い犬が餌を前にしてご主人様に『待

て』を命令されたように、ハアハアと息を荒げてひたすら彩香のOKを待ちこがれていた。
「ふふふ、可愛い坊やね。じゃあ、もーっとイイもの見せちゃおうかなー」
彩香は彼の前にお尻をつくと、
「パンパカパーン！」
と、ぱかっと太腿を割って脚を開いた。
（オ、オマンコだぁ！……）
拓也の目は、彩香の女肉に釘づけだ。
「君、ドーテーでしょ？　お姉さんが教えてあげるわ……ふふ、私、ドーテー喰いって大好きなの」
彩香はさらに、自ら指で濡れそぼった秘裂を割った。ねちゃぁと、透明で粘り気のある液体が、左右に糸を引いた。
「上のほうで、すっかり勃起しちゃってるお豆ちゃんがクリトリス。女はね、ずーっと包皮をかぶったまんまなのよ」
「なんか……大きい……」
「うーんとね、私の場合、オナニーのヤリすぎかな？　オナニーいっぱいするとね、クリトリスってだんだん大きくなっちゃうのよ。それからこのビラビラちゃんが、小陰唇。そ

れから一番奥がね……」
「オ、オマンコ！」
声をうわずらせて、拓也が言った。もう興奮が限界だ。
「そう！　よくできましたー。じゃあご褒美に、中に指入れていいわよ」
「え!?」
「早くぅ、私のココ、欲しがってよだれたらしてるのよ」
拓也は、右手の中指を、ワレメの中心に突き立てた。ねちゃぁとした液体が指に絡みつく。
「そうよ、ああん、いいわぁ。ぐぐぐっと奥まで、突き立てて！」
拓也はエイヤっと、指を膣内に挿入した。ちゅぷぷうといやらしい音をたてて、指は奥まで呑みこまれていく。
「あはぁん、いいわ……」
彩香は、優美な裸身をよじらせた。
(すごい……女の穴の中って、なんか熱いや。でろでろに柔らかいゼリーの中に、指突っこんでるみたいだ。それに、なんだかぎゅうって、締めつけてくるよ)
「ねえ、指動かして、かきまわしてよ」

「え？　あの……指マンてやつ……？」
「早くぅ!!」
おそるおそる、拓也は女の膣内で指を動かした。最初はゆっくり……しだいに早く激しくくねらせる。
「ああん、いいわあぁ！」
指と秘肉の間からはじゅぷじゅぷと愛液が溢れ、拓也の手や、彩香の太腿を濡らしてゆく。クリトリスは今まで以上に勃起し、ひくひくと痙攣（けいれん）している。
「あははぁぁぁぁあん、もっとかきまわしてぇ」
彩香は脚をピンとのばし、不器用ながらも初々しい拓也の愛撫に酔っていた。自分の乳房をぎゅっとつかみ、時折指で乳首をこねまわす。
(俺もう、おかしくなりそうだよ！)
拓也は右手で彩香のヴァギナをかきまわしながら、左手で爆発しそうなほど硬く反りかえったペニスを握りしめた。
「ああ……」
放（ほ）ったらかしにされていた熱い欲望の塊はすぐさま手に反応し、ぴくんぴくんと震えた。
「あん、ダメよ。あとで入れさせてあげるからぁ。まあ、若いんだから、何発でもイケる

だろうけどぉ……」
「そうは言っても、オネーサンのエッチな姿見てたら、我慢できなくって……」
「じゃあ、もっとエッチになってあげるから、それでしごいて……私の顔に、たっぷり出していいのよ」
彩香はうっとりとした表情を見せながらクリトリスに指をのばし、激しくこすりはじめた。
（あ、彩香さんも、オナニーしてる！　俺が指入れてるのに、さらにオナニーしてるんだ。なんて淫乱なんだろう。それに、顔、顔、顔に出していいって……）
「うおぉぉぉぉっっ！」
顔面発射——たっぷり顔に射精させてもらいたぁいと、拓也は膣孔に突き入れた右手の指を激しく上下させた。
「ああん……イイわぁ、もっと、もっとよぉ！　指、2本突っこんじゃってぇ」
激しくサオをこすりながら、拓也は彩香の中に、もう1本足し入れた。人差し指はまるで吸いこまれるように蜜壺の中に入ってゆき、さらに大きな音をたてた。
「ううう……彩香さん、締めつけてくるよぉ」
「ああん、だって私、イッちゃいそうなんだもーん」

「お、俺も……」
オナニーで射精してしまうのはもったいないように思えた。けれども、どうやら彩香の様子だと、そのあとにも一戦交えてくれるつもりらしい。だったらお言葉に甘えて、憧れの『顔面発射』をさせてもらおうと、拓也は懸命にペニスをしごいた。
彩香の快感にゆがんだ顔に、もうすぐ自分の白濁液をまき散らせるんだと思うと、わくわくした。
「あああん、イ、イッちゃうよぉおっ！」
「お、俺も！」
拓也は指を差し入れたまま、体の位置をずらし、彩香の顔面にペニスを持っていった。
「あああ、イ、イクゥウゥ！」
「俺も、出るぅぅ！」
ふたりは同時に、絶頂に達した……はずであった。
「ああん、どうしたのぉ？　ぶっかけていいって言ったのにぃ」
アクメの余韻でまどろんだ身体をもてあまし気味に動かしながら、呆然として萎んだペニスに目を落としている拓也の肩に、彩香は手を置いた。
「キンチョーしちゃったの？」

「ち……ちがうんだ……」
陰嚢からサオを通り亀頭の先端へと突きあげるものを、拓也は確かに感じた。けれども、出ないのだ。
「ちがうって、なにが？」
「だから、射精したはずなんだよ。なのに、なのに……」
「ええ？　射精したのに、ザーメンが出ないわけないじゃなーい。それは、射精してないって言うのよ」
「いや、確かに、出たはずなんだ！」
うなだれる拓也の背後から、
「ちゃんと、出てきたじゃない」
と、少女の声がした。
「え？」
「ええ？」
彩香と拓也は、同時に後ろを振り向いた。
「あなた……誰？」
彩香の部屋のドアには、しっかり鍵がかけられていたはずだ。拓也がくるまでは彩香ひ

とりしか、室内にはいなかった。
「どこから、入ってきたの？」
「入ってきたんじゃなくって、出てきたんですぅ」
鮮やかな赤い髪を持った少女が、にっこり笑って言った。
「こんにちわ、私、**ミーク**です。なんて言うか、拓也さんの守護精でーす」

☆

その後、ミークと名乗った少女は、彩香が差しだしたオレンジジュースを、ソファに座ってごくごくと飲み干して言った。彩香はもう、服を着ている。
「だからぁ、何度も言うよーに、私は拓也さんの守護精でぇ、怪しい者じゃないんですってばぁ」
充分怪しいや！……
ズボンのジッパーをあげながら、拓也はうさん臭そうに少女を見つめた。
ミークは、14歳から16歳くらいに見える。真っ白でふわふわした布を身体に巻きつけ、服のように着こなしている。すらっとのびた脚は素足で、傷ひとつない。
なにより少女が目だつのは、大きくカールした真っ赤な髪の毛と緑の瞳だ。
「まあまあ、いいじゃない。おもしろい話よ、青年も座って、座って」

彩香が目を輝かせながら、拓也の空いたコップに、ジュースをつぎ足した。
「えっと、ミークちゃん、だったわよね？」
「はい」
「守護精……だっけ？」
「はーい！」
んなバカなことあるかと、あきれたように拓也は大きくため息をついた。けれども彩香は、真剣な表情だ。
「守護精って、なに？」
「んーと、んーと、簡単に言っちゃえばぁ、いろんな人を、守る精霊でぇ、私は精霊でぇ、それでもう仕事に就く年になったからぁ、なにになろーかなぁと思ってたらぁ、守護精の仕事口が見つかってぇ……」
「ちょっと待って。な〜に、精霊っていうのはある一定の年齢になったら、仕事に就くわけ？」
「うん。あのね、2百歳になったら、仕事に就くの。いろんな仕事があるのね、花の精とか水の精とか。それで、人間の守護精って、エリートじゃなきゃあ、普通なれないんだよー。だけどもね、ミーク、補欠で会社に入れたの」

「補欠で？　じゃあおまえ、ダメな奴なんだな」
拓也が茶々を入れた。
「そう、ミーク、ダメなの……」
今までにこにこしていたミークはやおらに顔をゆがめ、やがて大粒の涙を瞳に浮かべた。
「ちょちょっと、ミークちゃん」
彩香が拓也をにらみつけ、それからミークにハンカチを差しだした。
「あんな奴の言うこと、放っときなさい」
「でも、でも私ぃ、拓也さんに悪いことしたから、全部私のせいだからぁ……」
ミークは、わんわんと泣きはじめた。
「なにぃぃ？　おまえのせいで俺がどうしたってぇ⁉」
拓也が血相を変えて、ミークに詰め寄った。
「やめなさい！」
彩香が、拓也を制した。
「女の子いじめるなんて、サイテーよ！　だいたいあんた、なにしにここへきたのよ！」
「なにしにって……だから、最初から言ってるだろ、チラシ見て、それで相談しようと」
「相談て、なんの？」

「だから、俺、なんか最近すっごくツイてなくて、なんだか運に見放された感じでさ。大好きな杏子ちゃんともケンカしたっきりだし……あ〜あ！」
拓也の脳裏に、杏子の笑顔が浮かんで消えた。
（まずいよ、まずいよ俺。さっきまではとにかく夢中で忘れてたけど、俺が彩香さんとやったことって、浮気じゃないか！　ああ、なんてことだ。俺は早くも杏子ちゃんを裏切ってしまったのか……）
「なによ、大好きな杏子ちゃんて？」
彩香が、きょとんとした表情で聞いた。
「いや、だからつまり、悪運が重なってるって話……」
「ウワアァァァァアンッッ」
ミークが、彩香に抱きついて泣きわめいた。
「アーン、アーン、ゴメンなさぁい、拓也さぁぁん！　ぜんぶ、ぜぇんぶ、ミークのせいなの！」
「なんだとぉ!?」
「やめなさいってばぁ！」
なかなか泣きやまないミークを、彩香が必死でなだめて聞きだした話をまとめると、こ

うだ――。
彼女の住む精霊界は、人間界のすぐ近くの次元に存在しているという。
精霊界では、通常2百歳になるまでは、非常にのんびりゆったりすごすことができるが、2百歳をすぎると、色々な仕事に就かなければならない。
精霊界で仕事に就く者もいれば、精霊界が人間界に隣接していることを利用して、人間界に関わる仕事に就く者もいる。
花の精や水の精など、人間たちが通常『妖精』と言っているのは、人間界でそれぞれの仕事に就いた、精霊たちなのだ。
さて、そんな精霊たちの様々な職種の中で、一番人気はやはり、人間の守護精なのだという。
守護精に憧れていたミークは、2百歳になると色々な守護精の会社（精霊界でもどうやら、会社組織があるらしい）をまわったが、適性がないのか、どこでも採用されず、途方に暮れていた。
そんな時、ミークが親しくしていた先輩の紹介で、ようやく補欠で滑りこんだのが、『精霊セーフティーサービス・東京支部』だ。
念願の守護精になれたものの、担当の人間がいなければ、守護精になった意味はない。

ミークは仕事を得るべく、一生懸命営業を重ねた――彼女たちの営業は、人間にもともと憑いている守護霊に対して行なわれ、守護霊に信頼され、その人間を任されてこそ、一人前なのだ。
けれども、補欠で入社したミークのような若造に、大事な人間の守護を任せる守護霊などいない。
入社後何十年も営業しまくるミークを見かねた先輩守護精のひとりに紹介されたのが、拓也だった。
もちろん拓也の守護霊ははじめ、断った。しかし、何年も通い詰めたあげく、ようやくOKを取ったのが、つい1週間前だという。
「だけどぉ、失敗ばかりでぇ……拓也さんを悪運から守ろう守ろうと思ってがんばってるのにぃ、なぜか裏目に出ちゃって……」
ミークはひっくひっくと鼻をすすりながら、上目づかいに拓也を見つめた。
(じゃあ、杏子ちゃんとの仲がこじれたのも、こいつのせいなんだな？　それまではうまくいってたのに、こいつが俺の担当になってからぼろぼろになったってことか……)
「ああーん、拓也さーん、ゴメンなさぁぁい！」
「つざけんなよ！　謝ってすむ問題か！」

拓也が拳を振りあげたので、いったんおさまりかけていたミークの涙が再び溢れはじめた。
「ああーーん！　ゴメンなさぁい！　全部私が悪いんですぅ！　それに、それに、拓也さんの足をこんなどうしよーもない相談所に運ばせちゃうしぃ、こんなインチキ霊能力者に触発されて、私出てきちゃうしぃ、もう私なんか、いないほーがましですぅ」
「ちょっと。なによ、インチキ霊能力者って！」
今まで拓也のなだめ役にまわっていた彩香だったが、今回はキレた。
「私のどこがインチキなのよ。言っとくけどね、私は巫女の血を引くきわめて優秀な霊能力者なのよ！」
「インチキじゃないですかぁ。だって、女が相談所にきたらすぐ帰しちゃうでしょ？　だけども男の人がきたらすぐ引っぱりこんで、相手がわけわかんないうちにエッチなコトして、相談料だって言って、高いお金取るじゃないですかぁ」
「ど、どこでそんな話を……」
図星を指され、彩香はのけぞった。
「さっきぃ、彩香さんの守護精さんとお話ししたんですよぉ。守護精さん言ってましたよ、彼女のことはもうあきらめた、彼女は守護精なんかいらないほど、悪運が強いって」

「し、失礼な！」

「彩香さん、お金取るつもりだったんですか？」

おそるおそる、拓也が聞いた。

「あんたは安くしといてあげるわよ‼」

彩香は真っ赤になりながら、にらみつけた。

「まあ、いいわ。それで、これからどうするの？」

少しして落ち着いてから、彩香はミークに尋ねた。

「精霊界に帰るの？」

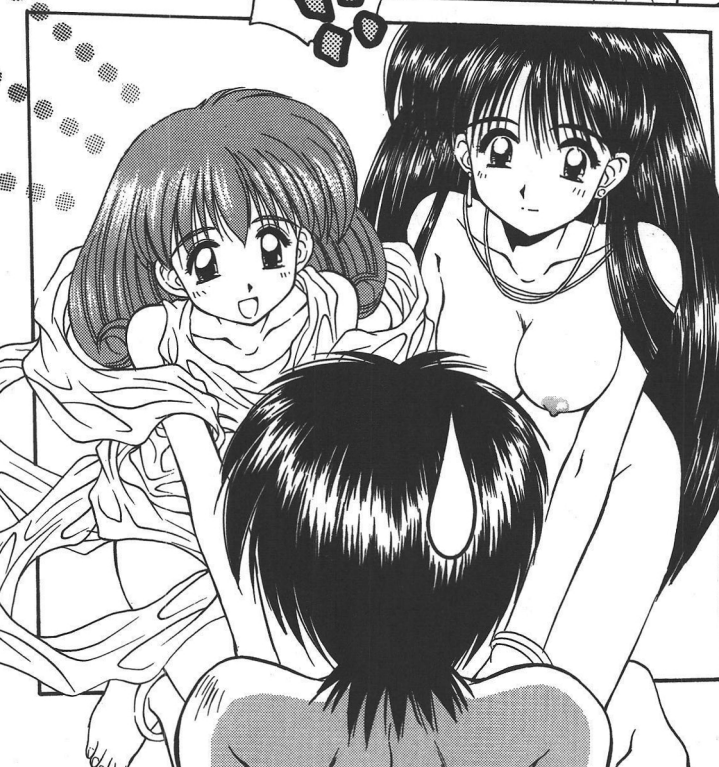
「それが……ミーク、人間の力で出てきちゃったから、通常の方法では、帰れないんです。もちろんその間、拓也さんを守ることもできないんです。でも、まあ、方法はあるんですけどぉ……」

最初は怒りのため動転していた拓也だが、あまりにもドジで情けないミークを見ているうちに、なにやら同情感のようなものを覚えはじめていた。

(俺が受験で大変だったように、こいつも色々苦労したんだよな。いつまでも怒ってるなんて、男らしくないよな)

拓也は立ちあがってミークの前に立ち、シュンとしている彼女に優しく声をかけた。

「方法って、なんだい？　俺がなにかしてやれるかな？」
「はい！」
ミークは、希望に満ちあふれた瞳をあげて、拓也を見つめた。
「なんだい？」
「はい！　こういうことです」
ミークは拓也のズボンに手をかけ、一気に下にずり降ろした。
「うわぁ！」
簡単にズボンを膝まで降ろされてしまった拓也は後ろにさがり、そのままけつまずいて、あお向けに倒れた。
「ちょっとぉ、エロエロコミックじゃないんだからさ、エッチすれば帰れるなんて、ウソでしょ」
あきれたように、彩香がミークを見つめた。
「ちがうんです。これ、勃(た)たせてください」
転んだ拍子に腰を打ち立ちあがれないでいる拓也の股間を、ミークが指差した。
「どれどれ？　うわぉ！」
ふにゃふにゃになったペニスを、彩香はそっと指でつまんだ。

「あ、ちょ、ちょっと彩香さん！　僕もう、勃起しませんよ」
彩香はうれしそうに、拓也のふにゃチンを手に包んで揉みあげた。
「ふふふ、どうかな？」
「ダメだって言ってるのにぃ。僕、お金ないんですからぁ」
「これはサービスよ」
悲しいかな。男の性で心の中では必死に抵抗していても、下半身には通じない。あっと言う間に拓也自身は、再び服を脱いだ彩香の手の中でむくむくとふくれあがった。
「この先っぽ、見てください」
「うん？　ああっ！」
まず、彩香が大声をあげた。その声に驚いた拓也が、次に声をあげた。
「な、なんだよこれ！　俺こんなの知らないぞ！」
「さっきフェラチオしてあげた時は、なかったわよ」
拓也の亀頭の先端に、大きく隆起した真っ黒なほくろが4つ、尿道口のまわりに並んでいた。4つのほくろは等間隔に並び、それぞれを線で結ぶと、きれいな四角形ができるようだった。
「この4つのほくろ、4人の女の子の不幸なんです」

ミークが、それぞれのほくろを指でつつきながら言った。
「ああっ！」
こんな状態とはいえ、少女の指に反応して、拓也はつい感じてしまう。
そんな拓也のオトコにあきれながら、彩香は心の中でほくそ笑んでいた。
(なんかこれって、おもしろいことになってきたって感じね)
彩香は最近、退屈をもてあましていた。そんな時飛びこんできた拓也相手に、暇つぶしをしてやろうと思っていただけだったのだが、意外な展開になってきたことを、心の底から喜んでいた。
「それで？　4人の女の子がどうしたって？」
真剣な顔をしようと思っても、ついにやにやしてしまう。彩香は半分笑いながら、ミークに尋ねた。
「ああ、つまりぃ、拓也さんは1週間以内に4人の不幸な女の子を、幸せにしてあげなきゃダメなんです。そうしないと、私は精霊界に帰れないしぃ、私が帰って引き継ぎしない限り、拓也さんには今後一生守護精が就かないしぃ、それに……」
ごにょごにょと、ミークが言葉を濁した。
「なに？　なんだよ。俺に関係のあることなんだろ、はっきり言えよ」

ミークはしばらく考えていたが、顔を真っ赤にして、つぶやいた。
「拓也さん一生……射精できないんです」
拓也の表情は凍りついて固まり、逆に元気だった一物はへにゃへにゃと萎んだ。
「はあ〜、なんてことだぁ……」
真っ青な顔でうなだれる拓也を後目に、人を思いやる心のちょっと欠けた彩香は、おおっぴらに大はしゃぎだ。
（くうぅぅ！　なんておもしろいことになってきたの！）
「拓也君、ミークちゃん！　この天才霊能力師西條院彩香サマがついてるからには百人力よ。もう、全面的に、応援しちゃうわ！」
「彩香さんありがとう！　あなたってなんて優しい人なの」
ミークは彩香に抱きつき、さっきは悪口言ってごめんなさいねと、何度も謝った。
「ミークちゃん、がんばりましょうね。だいじょうぶ、きっと精霊界に帰れるわ！　わははは、わははははは」
彩香はもう、笑いがとまらない。
「ああ、俺はいったい……」
杏子ちゃんを裏切った罰だと、拓也はひとり暗くなり、心境をダイレクトに現わしてい

るかのような、しょぼくれたチンチンに目を落とした。

第3章　巨乳女子大生と野外プレイ

トゥルルルルル……。
トゥルルルルル……。
奥にはエッチな雑誌やマンガ本、手前にはきれいなままの参考書が置かれた本棚。夏も出しっぱなしのこたつ台。年中敷きっぱなしの布団。ゲームをするためのパソコンが載っかった机。そして14インチテレビとビデオ。押入にはなにが入っているかわからない段ボールと、タンス代わりのカラーボックス。テレビの横にちょこんと置かれた、鳴らない目覚まし時計のデジタル表示は、13時30分を示している。
拓也の、そんなにモノがないわりにはなぜか乱雑でうっとうしいタタミ6畳の部屋に、電話のベルが鳴り響いた。

「はい？」
まだ寝ぼけている拓也は、布団の中から手さぐりで、床にただ転がした子機を取った。
「岡崎ですけど……もしもし？」
相手はなかなか話しださない。
女目当てのいたずら電話か、そうでなければいやがらせだろう。人が昨日眠れなくって、やっと明け方寝ついたというのにふざけるなと、少々腹をたてながら電話を切ろうとした拓也の耳に、澄んだきれいな声が響いた。
〝あのぅ拓也君？　あ、あの、私だけど……〟
いっぺんに目を覚ました拓也は、布団から出て正座をした。
ホテルで別れたあの日以来、拓也は何度も杏子に謝ろうと、電話をかけつづけていた。けれどいつだって杏子は外出中。もしくは電話に出た母親の後ろから、『いないって言って！』という声が響いていた。
半分、あきらめていたところだった。それなのに、なんと杏子のほうから連絡をくれたのだ！　布団の中で寝転がりながら話すなんて、拓也にはできなかった。
〝あの、ゴメンね。寝てたの？〟
「いや、起きてたよ、うん」

ウソをついた。
耳を澄ますと、杏子のとまどったような声に混じって雑踏の音が耳に入る。
「公衆電話？」
〝うん。短大から電話してるの。あの、私どうしても、拓也君と話し合わなくっちゃと思って……〟
「話し合うだなんて！　あれは俺が、全面的に悪いわけだから、その……」
ふたりとも、黙ってしまった。
ホテルでの出来事は、拓也の不始末だけではない。その前に、ふたりは身体を絡め合っているのだ――たとえ未遂だったとしても。
言葉の間に、お互いそのシーンを思いだしているのを、ふたりは認め合っていた。
「あの時は本当に、ゴメンね」
〝ううん、私も、大人げなかった……〟
恥ずかしげな杏子の声。おそらく受話器をしっかり握りしめて、少し肩を震わせているんじゃないかと、拓也は想像した。
「会いたいよ、杏子ちゃん。何度もそう言おうと思ったんだけど、電話しても、いつもいなくって……」

〝ごめんなさい。私、なんだか拓也君に会いづらくて〟

「今日、会えないかな？」

拓也は、頭の中で素早く今日の予定を思い浮かべた。3時からの予備校の授業に出席を予定していたが、場合によっては欠席してもいい。

〝今日は5限まで授業が入ってるのよ。夕方すぎのほうが都合がいいんだけれど〟

「じゃあ、夜の8時頃でどう？　夕食、どこかで一緒に取ろうよ」

なけなしの貯金をはたいて、今日は杏子においしいものでもおごるんだと、拓也は心に決めていた。

「どうかな？　8時に……いつもの喫茶店で」

〝いいわ。8時に、いつものところね〟

拓也の耳に、ピーと音が入った。

〝あ、カードじゃなくて、10円でかけてるの、もう切れちゃうから……〟

「あ、そうか」

じゃあ、と電話を切ろうとした拓也に、杏子が小さな声で『待って』と言った。

〝私、今夜泊まってもいいから……ガチャッ〟

今夜泊まってもいいから……――杏子の最後の言葉で、拓也の下半身はダイレクトに反

応した。
（今夜泊まってもいいってことは当然、この間のつづきＯＫってことだよな……）
そそり立った分身を突っこみそこねた、杏子のみずみずしい花弁の記憶がよみがえる。柔らかげでたおやかで……股間が突っぱって痛い。
きっと顔を真っ赤にして、勇気を出して今の言葉を口にしたのだろう杏子の、はにかむような笑顔が、頭に浮かんだ。
「やったーっ!!」
拓也は冷蔵庫から牛乳のパックを取りだし、コップに空けず、そのまま飲んだ。
それからうろうろと部屋の中を歩きまわり、頭の中で、杏子の言葉を何度も復唱した。
――泊まってもいい、泊まってもいい、今夜泊まってもいい――
落ち着こうと必死になっていた。顔はにやけ、手は自然にパンツの中へと潜ってしまう。
（ダメだ、ダメだ。今夜杏子ちゃんとこの間のつづきをするんだから。今ひとりでやるなんて、絶対ダメだ！　もったいない）
そうは考えても、まぶたの裏側に焼きついた白い杏子の裸体は、拓也の官能を激しく揺さぶる。それが遠い欲望であった時には、あきらめで我慢ができた。けれど確実に今夜、手に入ると思ったとたん、たまらないほどの渇きが、拓也を襲った。

（杏子ちゃん、杏子ちゃん、杏子ちゃん、ああ、今夜こそ）
ピクピクと震え、おなかの肉にぴたぴたとくっついてくる肉棒に、下着の上から軽く指で触れた。
「う……」
ほんの少し触れただけなのに、体中の血液がそこに集中してくるかのようで、体全体がカアッと熱くなった。
（ああ、今夜、杏子ちゃんにコレを……）
俺はちっとも、ツイてなくなんかない。
（ええい！　こうなりゃあ今夜の練習だ）
布団の上に膝をつくと、彼はバッと下着を降ろした。ブリーフのゴムが勃起した亀頭に引っかかり、ペニスを大きく刺激した。
「ああ。杏子ちゃん……」
拓也は目を閉じ、ぎゅっとサオを握りしめた。
その時、再び電話の音が鳴り響いた。
「杏子ちゃん!!」
拓也は空いた片手で急いで子機を取りあげた。

「もしもし！」
〃おお、青年か！　私だよ、あなたの彩香よ～っ！〃
拓也の熱くなった体が、頭の先から冷たくなっていった。
〃よろこべ！　不幸がネギ背負ってやってきたぞ。いい、今すぐこっちいらっしゃい、いいわね？〃
拓也はこわごわ、ペニスの先に目をやる。
亀頭の4つの黒いほくろが、目玉のように彼をにらみかえしていた。
「そうだった……」
拓也は、先ほどまでの勢いがウソのように、へにゃぁとしおれてゆくペニスを握りしめたままペタンとお尻をつき、そのままうなだれた。
〃いい？　今からこっちへくるのよ。30分できなさいよ〃
「30分……」
拓也は時計を見た。2時だ。
(彩香さんのマンションから杏子ちゃんとの待ち合わせの喫茶店まで、1時間はかかるよな。そうすると、7時には出なくちゃダメだな……)
「あの……彩香さん。その不幸って4時間か、5時間くらいで解決できます？」

〝はぁ？　なに言ってんの！　あんたねぇ、私が優しく言ってやってるうちにこないと、どうなるかわかってんの？〟

「いや、でも俺、8時から約束が……」

〝いいからきなさい！　いい？　マスなんかかいてる場合じゃないのよ〟

「え！　ど、どうしてわかったんですか⁉」

〝ばーか、適当に言ったのよ。ガッチャンッ！〟

まいったなぁ――拓也はため息をつき、パンツをずりあげた。いかないわけには、いきそうもない。

さっさと不幸を片づけて杏子ちゃんとの一夜に備えようと、拓也は大急ぎで出かけた。

「拓也さーん！　待ってましたぁぁっ」

彩香のマンションのドアを開けると、彩香から借りたらしい白いトレーナーにジーンズのミニスカートをはいたミークが、拓也に飛びついてきた。

「よかったね、よかったね、拓也さん！　不幸がきたね、よかったね！」

昨日、ミークは出てきてさんざん泣いたあげく彩香と意気投合し、ちゃっかり彼女のマンションに居候を決めこんだのだった。

拓也は、たとえなにもできなくても、一応自分の守護精なんだから、自分が引き取ると

彩香に言ったが、彩香は、
――チンポ勃ち盛りの青年にこんな可愛い女の子与えたら、なにするかわかったもんじゃない――
と、断固拒否したのだ。
もちろん彩香はそんなことを心配しているのではなく、単純にミークに興味があるから、一緒にいたかっただけなのだが。
「おお、青年きたか。早くあがって」
奥から彩香が出てきて、拓也をあの、応接間に通した。
今日の彩香は、Tシャツにジーパンという、いたってシンプルな出たちだ。
「彩香さんね、今日は女のお客さんだから、楽な格好でいるんだよ。さっきね、彩香さんの守護精が教えてくれたの」
拓也の耳もとで、ミークがささやいた。

☆

「初めまして。私、**雪江**と言います」
拓也が応接間に入ると、ソファに腰かけていた女性がすっと立ちあがり、ペコンと頭をさげた。

雪江と名乗ったその女性は、白いブラウスに膝丈の紺のスカートというベーシックな組み合わせがよく似合っていて、なかなか可愛らしい。くりくりと大きな目は人なつっこくよく動き、小さな唇は、いつも半開きになっている。大きなウエーブパーマをかけた髪の毛は栗色で、長さはちょうど肩くらい。肌に近い色のパンティーストッキングをはいた脚は、すらりとのびていて長い。

なによりも彼女についてまず、拓也の目についたのが、やせた身体に不釣り合いなほど大きくふくらんだバストだった。

(でかい……)

彩香も豊かだったが、雪江はさらに大きく、まるでゴム鞠をふたつ、胸にぶらさげているようだ。ブラウスの生地はそこだけパンパンに張っていて、ボタンが今にもはち切れそうだ。

「こら、どこ見てんのよ。まったく、いやらしいんだから」

彩香が軽く拓也の背を叩いた。

雪江と対峙するように、コの字形のソファの片方に腰かけた拓也に、ミークがお茶を運んできて、その隣に深く座りこんだ。

「えーと、改めて紹介するわね。雪江、こちらが拓也君。私のアシスタントなの」

た。

「アシスタント～！」

驚いて声をあげた拓也の耳もとでミークが、そういうことになってるのよと、ささやいた。

「それから拓也君、こちら遠藤雪江さん。私が通ってる大学の2年生なのよ」

「彩香さんが通ってる大学？　彩香さん、大学生なのぉ！」

拓也は、彩香から聞かされた年齢を思いだしていた。確か彩香は24歳。いま4年生だとしても、2浪している計算になる。

「彩香さんね、大学6年生なんですってぇ。ミークよくわかんないけど、なんかぁ、モラトリアムとかでぇ、単位は全部取ってるのに、卒論ていうやつ、出してないんだってぇ。大学もね、困ってるんだってぇ」

ミークが、拓也に説明した。

「そうよ。言っとくけど私は現役合格よ。青年みたいな浪人生活はしてないのよ」

留年生に言われたくないやと、拓也は口の中でぶつぶつぶやいた。

「ねえ、彩香さぁん、そろそろさ、雪江さんの不幸を拓也さんに説明してあげないとぉ」

険悪なムードになりつつある拓也と彩香の間に、ミークが割って入った。

「ああ、そうね」

彩香は最後にきつい目で拓也をにらみつけてから、雪江の肩に手を乗せ、話しはじめた。
雪江の不幸は、男と長つづきしないことだという。18歳の時初めて男性とステディーな関係を持ってからここ2年の間に、つき合った男性の数は実に20人におよぶのだが、ひとりひとりとつき合った期間が、やたら短いのだ。
「短かった人で5日間。一番長くつき合った人でも、確か2カ月くらいなんです」
雪江はうつむいて、言いにくそうに話した。
「なぜだかわからないんですけど、男の人はみんな、私から離れてしまうんです。おまえとはつき合いきれないって言って……なんか、悪い霊でもついてるのかなーと」
「雪江さぁ、美人だし巨乳じゃない。だから次から次へといくらでも男は寄ってくんのよね。それなのに、すぐ離れていっちゃうってわけ。それでね、この天才霊能力者である私のところに相談にきたのよ」
彩香が、すっかり落ちこんでいる雪江を見ながら言った。
「それって、アレじゃないですかぁ？　霊とかなんとかじゃなくって、単に男に遊ばれてるだけじゃぁ。つまり……胸がデカイ娘ってすぐヤラせてくれるように見られるんじゃないんですか？」
拓也が何気なく言った言葉で、雪江はたががはずれたかのように、わぁっと泣きはじめ

た。
「ちょっと拓也！　あんた雪江の不幸増やしにきたの!?」
「ちがいますよ。ただ、そう考えるのが、普通でしょ？」
「あーん、あーん」
雪江はテーブルにうつ伏せて、ぼろぼろと大粒の涙をこぼしている。
「どうせ私なんか、男のおもちゃなんだわぁ！　好きで巨乳になったわけじゃないのにぃ、みんなすぐに私の身体に飽きて、別の女のところにいっちゃうのねぇ！　あーん」
そんだけデカイ胸なら、すぐに飽きるってことはないだろう。拓也はそう思ったが、今度は口に出さなかった。彩香どころかミークまでが、拓也をにらみつけている。
「雪江、落ち着いてよ。ちょっとこっちにいらっしゃい」
彩香はそっと雪江の肩を抱いて、隣の寝室へ連れてゆくと、
「バカ拓也！　ミーク、アダルトビデオ見すぎてバカになってる男にもわかるように、かみ砕いて話しといてね」
とだけ言い残して、ばたんとドアを閉めた。ドアの向こう側から、雪江の嗚咽(おえつ)となにやら慰めているらしい彩香の声がぼそぼそと聞こえた。
「俺、まずいこと言っちゃったみたいだなぁ」

拓也はミークに、小さな声で話した。
「でもさ、そういうことなんじゃないの？　はっきり言ってやるのがあの娘のためだと思うよ。つまり、幸せに導いてやるさぁ」
「ところがねぇ、事態はそう簡単でもないみたいなんですぅ」
重大な秘密ごとでも話すかのように、ミークは拓也に顔を近づけた。
「なんだよ、事態って」
「あのねぇ、拓也さんがくる前にぃ、彩香さん、彼女に催眠術かけたんですよ」
「催眠術ぅ？　なんでまた」
「私が、彼女の守護精さんと、お話しできるようにです。普通守護精は、就いてる人間が意識をはっきり持っている場合は、他の守護精と会話できないんですよぉ」
「でもミーク、しっかり目の覚めてる彩香さんの守護精と話してなかったか？」
「あの人は霊能力があるから、いつも意識がふらふらとしてるみたいなんですよ。ミークにもよくわかんないけど」
「それで、彼女の……雪江さんの守護精、なんだって？」
「はい、それが……」
ミークが雪江の守護精から聞いた話をまとめると、こうだ。

雪江は処女を、野外で失ったのだという。雪江にとって、その時の印象はかなり強かったらしく、彼女の頭の中には『セックス＝野外』という図式ができあがってしまった。だから彼女はつき合った男に対して、いつでも野外セックスを求める。男からして見れば、確かに野外でのエッチは刺激的ではあるが、そう毎回したいわけではない。けれど彼女は、室内でのセックスを拒み、なんとか外でしようとするようだ。

しかも、一度のセックスで何度も何度も求め、なかなか男を離さない。

「すごいな、そりゃあ。たいていの男は、音をあげるわな」

「ミーク、よくわかんないんですぅ。どうしてですかぁ？　男の人って、セックス好きなんじゃないんですかぁ？」

「まあ、そりゃあそうだけどさ、考えてもみてよ。慣れない野外でただでさえ緊張してるのに、そうそう何発も発射できないぜ。男には体力の限界ってもんがあるんだしさ」

「ふうーん」

興味深そうに、顔を覗きこんでくるミークを見ながら、拓也はふと考えた。

（守護精にも、処女膜ってあるのかなぁ？）

目の前のミークは、本人の言葉を借りるなら、『すっかり一人前の大人』だという。でもどう見ても傍目には、中学生か高校生くらいにしか見えない。

（ミーク、処女なのかなぁ？　だいいち、精霊ってセックスして繁殖するもんなのか？）
彩香が貸して着せたと思われるトレーナーの上からでも、ミークの胸の隆起は見てとれる。ミニスカートからのびた華奢な脚のつけ根には、人間の女と同じように男を迎え入れるための穴が開いているのだろうか——。
（あー、俺ったら、こんな時にナニ考えてんだよ、くそっ！）
「で、解決方法みたいのはあるわけ？」
拓也は気を取り直して、ミークに聞いた。
「はい。なんでもね、彼女が何度も男を求めるのは、イッたことがないからなんだそうです。だからぁ、イカせてやれば満足するんじゃないかって、守護精さん、言ってました。それからね、室内でのエッチもいいものなんだよって教えてあげるのもいいんじゃないかってぇ」
「ちょっと待て」
イヤな予感がした。
「それ、俺がやるの？」
「はい！」
予感的中。

そりゃあ、雪江みたいな可愛い女の子を抱けるのがうれしくないわけはない。けれど拓也には杏子がいる。
思えばミークが出てきてしまったのも、彩香との過ちが原因だ。さらに別の女と肌を重ねようものなら、なにが起こるかわからない。
「あの、それ、俺がやらなくっちゃ、ダメなの？　他に方法ないの？」
「でも……ほら、俺確か、射精できないんでしょ？」
「拓也さんが、やるんです。他に方法はありません」
「不幸な女の子に対しては、おチンチンのほくろが反応して、射精可能です」
「そんな都合のいい話、ありか⁉」
「世の中、そんなもんですぅ」
ミークは無邪気に微笑んだ。

☆

「あの……どこへいくんですか？　私の悪霊を取り除くんじゃないんですか？」
「ああ、まあ……これも悪霊退散の手はじめなわけで」
しどろもどろの、苦しい言いわけ。
（まいった。マジでまいった）

拓也は、彩香に言われて雪江を外に連れだしていた。
――いい？　しっかり彼女をイカせてくるのよ。わかったわね？――
彩香はそう言って、拓也にドス黒い丸粒をふたつ渡して飲みこませた。
――ふふふ、これさえ飲めば、精力絶倫まちがいなしよ！　めいっぱいシテおいで――
(そうは言っても……)
不安げな表情で時折拓也を見つめながら、黙って後ろについて歩く雪江を、いったいどうやってエッチに誘いこんでよいものやら、拓也にはまったくもって見当がつかない。
とりあえず、カップルのメッカである森林公園のほうにでも向かってみるかと、拓也は大通りを、公園に向かって歩いていた。
(考えてみれば、俺、まだ童貞なんだよな)
拓也は、緊張で胸がドキドキした。不思議なもので、エッチをするという意識はなかった。それよりも、なんとかしなければならないという、責任感のほうが大きかった。拓也は目を雪江に向けた。
雪江はうつむき、拓也の足もとを見ながら黙って歩いている。横に並んで上から見降ろすと、乳房のふくらみで押しあげられたブラウスの胸もとから、盛りあがった谷間が丸見えだ。

(デカイよなぁ……)
口の中に唾液がたまったが、ゴクリと喉を鳴らして飲みこむのは下品な気がして、少量ずつにわけて、目だたないように流しこんだ。
大通りを抜けて公園に向かう小道をまわった時、拓也の目に、杏子と待ち合わせの喫茶店が飛びこんだ。
(そうだ。8時までにはなんとかして、杏子ちゃんと会わなくっちゃぁ)
ちらっと腕時計を見た。5時半。どうりであたりが暗くなってきたわけだ。
泊まってもいい——そう言った杏子の甘いささやきが聞こえてくるようだった。
(俺はいったいなにやってるんだろう。杏子ちゃんという人がいるのに、これからこの人と、この人と……)
どきん!
雪江の手が、拓也の腕にそっと添えられた。
「まだ歩くんですか? 私少し疲れちゃったんです」
「あ、すぐ近くに公園があるから、休もう……か?」
「はい」
雪江の頬が、紅く染まっていた。

（な、なんだ。なんだか変な気分になってきたぞ。雪江さんが、なんだかすごく、色っぽいっていうか、なんていうか……）

どきんどきんどきん。

まるで、百メートル走を全力疾走したあとのように、拓也の心臓は激しく高鳴った。

（なんだ、これは？　この感じは）

頭がくらくらし、意識がしだいにぼやけていった。考えをまとめるのが難しくなり、足がふらつく。

（酔っぱらった時みたいな感じだ）

背筋に冷たいものが走り、額から汗が噴きだす。ふと見ると、どうやら雪江も同じらしい。顔をゆがめてハアハアと息を荒げながら、拓也の腕を取った手に、力を入れている。

（なんなんだよ、どうしたんだよ、俺たち）

やっとたどり着いた公園のベンチは満杯。仕方なくふたりは、木陰の草むらに腰を降ろした。

「だいじょうぶ？」

雪江に尋ねる、拓也の声も少し震えていた。

「ええ……ちょっと気分が……」

熱っぽい顔をあげて、雪江は小さな声で答えた。
「なんだか、変な感じ」
潤んだ雪江の大きな瞳に見つめられ、拓也は体の芯が、かぁっと熱くなってゆくのを感じた。頭は相変わらず、霧がかかったようにぼやけていた。けれどなぜか、下っ腹が張ったように痛く、切ない。
(……俺、勃起してる)
今さらながら、拓也はその事実に気づいた。下半身がやけに重たく、じんじんと尻からペニスの先まで鈍い痛みが走る。膨張した睾丸が熱い。かきむしりたいような、じゅくじゅくとした感覚が拓也を襲う。
「彩香さんにいただいた薬飲んだんだけど、そのせいかしら?」
雪江が脚をもじもじさせ、スカートの裾をぎゅっと握りしめながら恥ずかしそうに言う。
(そうだ、薬だ!　あの薬、精力剤とかじゃなくって……)
催淫剤だ!……股間のいななきとは対照的に、拓也の頭の後ろが冷たくなっていった。
「ここ、カップルばっかり……」
雪江に言われてあたりを見渡すと、確かに陽の落ちたあとの公園は、カップルでいっぱいだった。薄暗い中、街頭でぼんやりと映しだされるカップルたちは、皆一様に、熱い抱

擁を交わしている。
今にも泣きだしそうな、切なげな顔で、雪江はじっと拓也を見つめた。
(私……おかしいわ。なんだか、頭の中がもやもやして、あ、あそこが熱い……)
「雪江さん……」
拓也はごくんと、喉を鳴らした。
(雪江さんも、あの薬を飲んでて……ということは俺と同じように……)
疼いているのだ——潤んだ雪江の瞳を見て、拓也は確信した。雪江は今、したくてしたくて、たまらなくなっているのだ。そして拓也も、射精がしたかった。
「あっ……」
座ったまま前のめりに、雪江が身体を倒した。
「雪江さん!」
そっと肩を支えた拓也の顔に、雪江の朱い唇が迫る。
「私……なんだかたまらないんです。心臓がドキドキして……これも、悪霊の仕業なのかしら?」
悪霊って、まさに彩香さんのことだよ——そう、軽口を叩こうとした拓也の唇に、生温かいものが覆いかぶさり、口をこじ開けて中まで侵入した。

（え？　こ、これって……）
雪江に唇を吸われ、拓也は背筋をぞくぞくとしたものが這いあがるのを感じた。
「むふぅ……んんん……」
甘い香りが、拓也の鼻を衝く。
（ええい、どうにでもなればいい！）
そっと唇を離した雪江の柔らかな身体を、拓也は押し倒した。
「ああんっ……拓也……君……」
とろんとした瞳で、雪江は拓也を見つめる。半開きの唇が、まるで性器のようになまめかしい。押し倒した拓也に、抵抗する気はまったくないというように、身体中の力を落とし、髪が汚れるのも気にせず、ごろんと草の中に沈みこんでいた。
「雪江さん!!」
薬のせいだ、薬のせいだと、拓也は何度も頭の中で繰りかえしながら、荒々しく雪江の大きなバストを両手でまさぐった。
「あは……んふぅぅ……」
心地よさそうに、雪江は首を左右に振りながら喘ぐ。
ブラウスの上から、布地がしわくちゃになるほどに、拓也はそこだけ大きく盛りあがっ

た乳房を愛撫しつづけた。指が肉の中に沈みこんでゆくほどにそれは柔らかで、なおかつ、沈んだ指をぽーんと跳ねかえすほどに、弾力に満ちている。
切羽詰まった状態でなかったならば、いつまでも揉んでいたいと思ったことだろう。だけれどもその時、拓也の欲望はかなり限界まできていた。
「い、いいかい⁉」
拓也はそう言うと返事も聞かず、巨乳を包んだブラウスをはだけ、雪江のスカートをたくしあげた。むちむちしたパンティーストッキングの股ぐらの向こうに、白いパンティーが透けて見える。
その奥に、突っこみたい！……
拓也の目は、血走っていた。
その草むらには今、誰もいない。公園の表側からは見えなくなっているとはいえ、時折通りすぎてゆく人の声や、足音が聞こえた。けれど、今の拓也には、そんなものにかまっている余裕はなかった。広い公園の中で今、拓也が関心を持っているのは、パンティーストッキングの向こうにある小さな布地の、さらに奥にある秘裂だけなのだ。
ハアハアと息を弾ませながら、拓也は雪江のパンティーストッキングに手をかけた。
「あん！」

雪江の脚が跳ねあがるほど、思いきりそれを引いたため、一緒に白いレースのパンティーまでもが、巻きこまれて脚からはずれる。
「拓也君たら……」
思いがけず、手順ひとつだけで目的のものがお目見えした。拓也の勃起は苦しいほどに脈打つ。今すぐジーンズとパンツを降ろさなければ、圧迫で破裂してしまいそうだ。
（素敵だわ……お外でこんなに荒々しく、まるでレイプみたいに私を求めてくれたなんて、初めてだわ。今までの男の人たちはみんな、こそこそしちゃって、さっさと終わらせようとしてたけど、この人だけはちがう）
薄明かりの中、たくしあげたスカートから日焼けを知らない白い尻だけを出して、雪江は拓也を見つめつづけた。ジーンズとパンツを膝まで降ろした拓也の起立した若いシンボルは、今にも樹液を噴きだしそうだ。
「雪江さん……俺……」
そこが野外であることを忘れているほどだいたんな拓也に、小さく雪江は、
「きて……」
と答えた。
拓也は雪江の身体にのしかかり、体を曲げて意外なほど黒く茂った雪江の草むらを指で

かきわける。燃えるように赤く、充血してふっくらとふくらんだ花びらを左右に割り、ラブジュースでぬめぬめとした一番奥の穴に向かって、勃起を押し当て思いきり腰を突きたてた。
「ああっ!!」
短く高い声をあげ、雪江が身体をのけぞらせた。
その瞬間、入った時にはゆるやかに思えた雪江の膣内が見るみるうちに肉棒を強く締めつけていった。
「ううっ」
凝った筋肉をほぐすように、熱く湿った膣壁は微妙なウエーブで伸縮しながら、ペニス全体を愛撫してくる。
(これが……女性なのか)
想像よりもはるかに微妙な女体の肉感を味わい、拓也の全身の筋肉は緊張していく。
我慢しなくちゃあ、と思った時にはもう、手遅れだった。水風船が小さな針で弾けるように拓也の欲望も弾け、白濁液を勢いよく飛び散らせていた。
「ああん……そんなああっっ!」
肉壁に激しくぶつかるザーメンが、雪江の身体に激しい官能の炎を燃えたたせる。

「すごいっ、すごく感じるわ……」
雪江は夢中だった。男を迎え入れただけで、これほどまでに甘い感覚があったのは、初めてだった。
(この人なら……私を最高の快楽に導いてくれるかもしれない……)
夢見心地の中で、雪江は考えていた。
(この人なら、この人だったら……)
拓也のほうはといえば、自分の体がまるで自分のものではなくなったような錯覚に、陥っていた。
確かに射精感があった。そして今度はどうやら本当に、中身をぶちまけたらしい。けれども、まったくペニスはおとなしくならないのだ。雪江のヴァギナにおさまった太いペニスは、相変わらず岩石のようにカチンコチンなのだ。
(俺、どうしちゃったんだよ、こんなことって、経験ないぞ。俺、そんなにイケるほうじゃないのに……なんでボッキマックスなんだ)
気づくとあたりはすっかり暗くなっていた。遠くのほうで、犬の鳴き声と、どこかで絡んでいるらしいカップルの悩ましい声が聞こえた。
「ねえ。まだイケるみたいよ、拓也君のオチンチン……」

雪江が甘えた声をあげる。
「ねえ、して……」
半開きになった口の中で、雪江の舌が蠢く。それは拓也に膣壁の柔らかな感触を連想させた。
（く、薬のせいだぁ！）
拓也は雪江の頭のすぐ近くに両手をついて、腰を大きく動かした。ぐちゅうぐちゅうと淫乱な音が響き、ペニスと開口部のわずかな隙間から、愛液と精液が混じり合った透明な液体がしぶきをあげる。
「あはっ！　あああんんんっっフハッ」
肉路がかきむしられる感覚に、雪江は乳房を震わせ身悶えしながら、甘い声をあげた。
「アくくイィ……んあアァァ」
拓也は慌てて、手で雪江の口をふさいだ。とにかく射精したかったさっきまでよりも、いくぶん理性が働いた。
（人が、人がいるんだぞ！）
拓也の思いなどよそに、雪江は摩擦の快感を、身体全体で表現している。
「うあぁぁあ、んふぅぅ……くんんん……あは、あはぁぁぁぁんンン……」

拓也の腰の動きが、少し鈍くなっていた。確かにこすりつければそれだけ大きな刺激が、ペニスから脳へと直結するラインを通って駆けあがってくる。けれどこれ以上雪江に大声を出されると、最悪の事態が起こらないとも限らない。

「頼むから……もう少し声を落としてくれよ」

耳朶にささやきかける拓也の声も、今の雪江には甘い吐息にしか聞こえない。

「んふふふふふ……うふ……」

なにを勘ちがいしたのか、動かない拓也のペニスを迎え入れるように、雪江が下から大きく腰をグラインドさせせはじめる。

「おおう!」

膣の中で幹に絡みついた柔肉が大きく上下にくねり、拓也のものを奥の奥まで導き入れる。

「あはん、もっとぉ、もっとぉぉ」

息を弾ませながら雪江は、激しく身体をそらして、腰を拓也にぶつけた。

パァンパァンと、肉がぶつかり合う淫らな音が、ぐちょぐちょに濡れた粘膜のこすれ合う音と混じり、なんとも猥雑な音楽を醸しだしていた。

「頼むから、頼むから大きな声を出さないでくれよぉ！　大きな声を出したいなら、どっ

か部屋でするべきだよぉ」

理性で感じる不安と心配をよそに、まるでペニスだけが別の生き物のように脈動している。その快感をむさぼる本能にとまどいながら、拓也は身を震わせて二度目の絶頂感を覚えた。

「ああ……ダメだ、ほふぅ……」

「あん！　私まだイッてないっ!!」

そんなこと言われても、拓也の睾丸からサオを駆けあがる欲望の塊は、もうとめられない。

「あっ！」

きつく締めつけられた秘肉の奥に、拓也はぶちまけた。

「あはん」

体を震わせながら汁を絞りだす拓也を見て、雪江は、ひとり取り残されたように感じていた。

（つまんなーい。だって、声出さなきゃあヤッてるって雰囲気、ないのに……）

拓也は、さすがに萎(しお)れたペニスをゆっくり秘裂から抜きだし、上体を起こした。亀頭の先から膣口に、粘っこい透明な糸がのびている。

「ねえ……もっとしよおヨォ」
身体を起こし、拓也の胸に大きく弾む乳房のふくらみを押し当てながら、雪江は誘いかける。
「もっともっと、楽しもうよぉ。私のあそこ、まだじんじんいってるのよ？　ずるいよ、自分だけ満足しちゃって！」
「そうは言っても……」
拓也のとまどった表情に、雪江は欲求不満の声をあげた。
「信じられない！　男ってみんな同じね。自分ばっかり満足して、私のこと置いてけぼりにして。私が気持ちよくなると、声出すなとか、よけいなこと言って気を紛らわせて！それで最後は、ハイサヨナラなのね！」
大きな瞳に涙がたまっていた。こんなところで泣かれては困る。かといっていつまでもフルチンでいるのもやばい。
拓也はまだ粘液の絡みついたペニスをパンツの中に押しこめ、雪江の震える肩に手を置いた。
「わかったよ……しよう。だけれども、ここじゃダメだよ。声、いっぱい出していいからさ、どっかに入ろう？」

「いやよ！」
雪江は拓也の手を払って大声をあげた。
「部屋でセックスするなんて、なんか雰囲気が出ないわ。私は自然の中で、身体を絡み合わせるのが好きなのよ。なにもかも忘れて没頭するのがセックスじゃないの？」
「けれども、男は、こんな状態じゃ没頭できないよ！」
拓也は雪江のスカートに手をかけて、股間を隠した。
「ね？　女はすぐに陰部を隠せるだろう？　けれど男はズボン脱いだら、それをはくまで隠せないんだよ。行為の最中だって、万が一のことを考えちゃうよ」
「それが、なによ」
雪江は乱れたブラウスを手で直しながら、きつい目で拓也をにらみつけた。
「いいかい、雪江さん？　男は……いや、少なくとも俺は、愛する女性の身体の隅々まで自分の目で確かめて、愛したいんだよ。けれどもこんな状態じゃぁ、できないだろ。大好きな女性の、アクメに達する声だって、聞きたいんだよ。忍ばせたくなんかないんだ、本当はね。それに、その声を自分だけのものにしたいんだ。誰が聞いてるかわかりゃしないこんなところで、それができるか？」
雪江のきつい視線が、だんだんに和らいでいった。

「いいわ……じゃあ、どこならいいの？」
拓也は立ちあがってズボンのベルトを締めながら、木々の間から公園の外に目を走らせた。北にけばけばしいネオンが見える。
「下着はいてさ、ついてきてよ」

☆

「あああああっ！　アハン、アハァ……んくぅ……んああああぁぁぁぁっっっ！」
悲鳴に近い激しく高い声が、部屋にこだました。
「アハァハァハァ、んんん……アオォォあああぁぁっ、くぅぅあアァ……ッッ！」
雪江は豊かな乳房を大きく上下に揺らしながら、騎乗位でつながり合った拓也の上で踊っている。
「アア、アアアッ！　さ、さいこーよぉォ！」
ふたりの激しい動きでベッドがきしむ。
川縁に建ったラブホテルの4階にある部屋に足を踏み入れた時は、まだ勃つかと拓也は不安だったが、それはよけいな心配だったらしい。
とてつもなく分厚いカーテンの向こうにあった南向きの大きな窓を開けると、そこには見事な野外の風景がひろがっていた。

河川と公園。それにははるか遠くに新宿の夜景がひろがるその風景は、ガラス1枚へだてただけで、まるで部屋の外にいるような錯覚さえ覚える。
——外にいるみたい……——
うっとりとした表情を浮かべながら、雪江がブラウスのボタンをはずすと、中から勢いよく、布にくるまれたゴム鞠が飛びだした。手を後ろにまわし、ブラジャーまで取り払った雪江の乳房は、拓也が今まで見たこともないくらいに素晴らしかった。
張りのよさはブラジャーでつくられたものではなく、天性のものだ。充分に発達した胸筋が乳房全体を上向きに整えていた。
つんと尖った薄茶色の乳首が、盛りあがった乳輪の上に鎮座している。
外では、ブラウスの上からしかまさぐれなかったその見事な乳房に、今度はじかに触ることができるのだと思うと、拓也の海綿体にはたちまち血液が流れこんだ。
「素敵、素敵ィィッ！　誰も怒らないのね？　思うぞんぶん気持ちいい時に声出していいのね？　ワォッ」
だいたんに、拓也の上にのしかかった雪江は、妖しく腰を振りたてて、自分の一番気持ちよい場所にペニスをこすりつけようと、歓喜の声をあげながら躍起になっていた。
拓也は下から、快感でさらにふくれあがった揺れる乳房をつかみ、ぐいっと上に持ちあ

げるように愛撫する。
「あん、オッパイをモミモミされるのって、気持ちイイッ!」
俺も気持ちいいよぉと、拓也は手とペニスの感覚をぞんぶんに楽しんだ。
「アアアっ!」
ひときわ高い声を出した雪江は興奮のあまり、自分で自分の乳房をつかみ、乳首に舌をのばした。
「ああっ! すごく、すごく素敵な気分なの。わからない、なんだかあそこがふくらんで弾けちゃいそう!」
拓也はそっと雪江のくびれたウエストにしっかり手をまわした。
「イキそうなんだね?」
エッチな雑誌で、確かそんなようなことが書いてあったなと、思いだして拓也が言った。
「わかんない! わかんないけど、なんだか子宮から虫が身体中に這いでてきたみたいな感じなの……ああっ、アハンッ! こ、声を出すと、その虫が口から飛びだしていくようで、身体がだんだん熱くなるみたいで……アアアッ」
拓也は雪江の潤った肉部に負けないほどに熱く燃えたぎったペニスで、彼女の下半身を激しく貫きあげた。

「ハァハァ……」

巨乳の重みで圧迫された心臓が、激しい運動でさらに悲鳴をあげはじめる。けれど拓也は、無我夢中で腰を振りたくる。

肉壁の伸縮はさらにきつくなり、出し入れするたび熱いペニスを捕らえて離さないとでも言うようにきつく締めつける。けれど、充分すぎるほどの潤滑油がペニスの早い動きを支援する。

「ううう……くっ」

ぞくぞくするような快感がこみあげ、拓也の尿道をくすぐり、精管をひろげた。

「アああ、イ、イくぅ……ッ！」

一瞬、熱い女の中でペニスがふわっと宙に浮いた感覚を覚えた。

「アアアアアアアッ」

拓也がどくどくとザーメンを注ぎこんだと同時に、雪江は生まれて初めての深い快楽の狭間へ落ちていった。

「ハアハア……はぁぁ。すっごい気持ちよかった……」

アクメの余韻で顔をピンクに染めながら、上半身をあげて雪江が微笑(ほほえ)んだ。

「そうか、よかったな……」

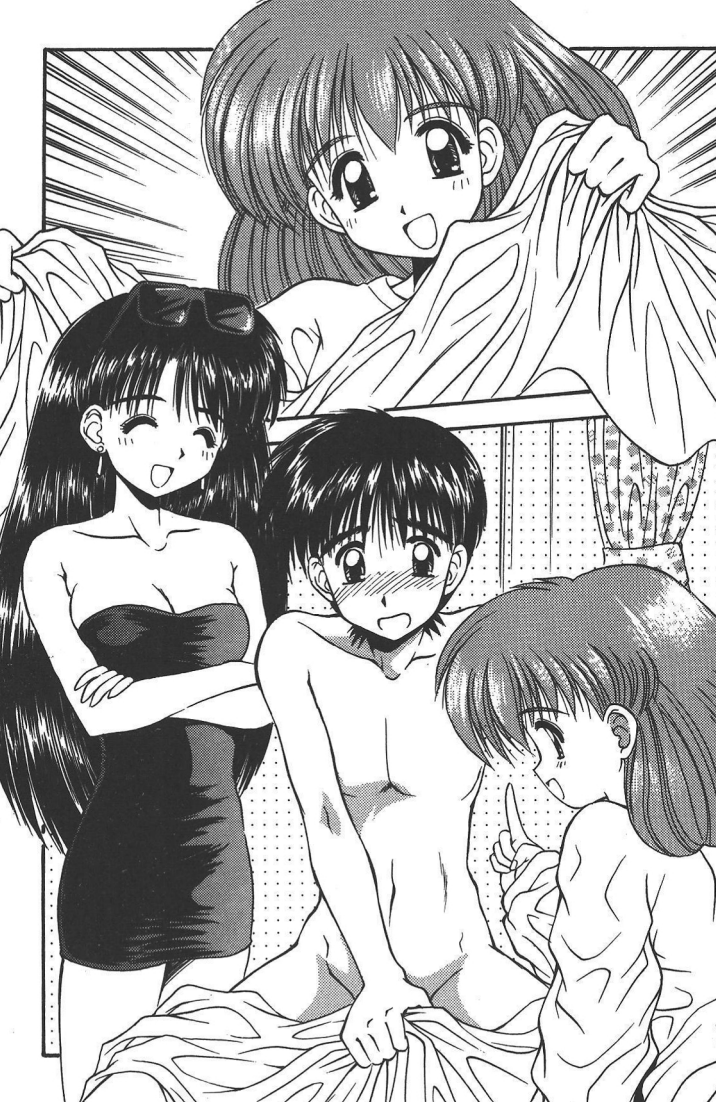
心地よい疲労感に、寝そべったままの拓也も笑って見せた。
「……ねえ？」
排出物を出しきってぶらぶらになっているイチモツをいつの間にか大きな乳房の間に挟みこんだ雪江が、誘うように見あげた。
「もう1回、しよ？」
「えっ？　マジで言ってるの⁉」
もう勃たないよ、と言いかけてやめた。
柔らかなふたつの鞠の間で、拓也の疲れとはまったく無関係に股間は元気を取り戻していく。
（もう、知らん！）
充血した肉棒に、柔らかい中でそこだけ硬い乳首がコロコロと転がり、くすぐる。
「ね？　シヨっ！」
「おっしゃあ、ヤッてやろうじゃないか‼」

☆

「はぁはぁ……もぉ、だめぇぇぇ」
胸を大きく隆起させながら、きゃあきゃあとベッドの上を飛びまわっていた雪江がやっ

とぐったりしたのは、拓也の精力をそれから5回も絞り取ったあとだった。
「こっちもだ、死にそぉ……」
拓也は寝返りを打つ元気もなく、ただ大の字になってベッドに手脚を放りだしていた。
「私……外じゃなくってもこんなに……ううん、外よりもずっと部屋の中でするほうがセックスに集中できるって、知らなかったの。初めての時が外だったんで、なんか勝手に、セックスは外でするほうが男の人もいいんだって、思いこんでたみたい」
まるで他人事のように、雪江がつぶやいた。
拓也は半分眠りながら、雪江の話に耳を傾けた。
「でも、セックスって案外疲れるのね。うふふ、私ね途中で気づいたの。彩香さんがくれたの、精力剤みたいなものだったんじゃないかなって……」
それに、催淫剤まで入ってる。彩香が、押入の奥をかきまわしてさがしだした、巫女の家系に伝わる強力なセックス薬だった。
「普通の男の人は、今日の拓也君みたいに、きっと何度もがんばれないと思うの。拓也君だって、途中からなんだか、ザーメンの量が少なくなってたみたいだし」
(当たり前だ)
ぼんやりした頭の中で、拓也は言いかえした。

「私もすごい疲れちゃったけど……男の人のほうが、疲れるみたい。私、今までつき合ってた人に、お外で何度も求めたから、きっとみんな私から離れていったのね。拓也君のおかげで、わかったような気がするわ」
「そうか……」
少しだけ唇の端をあげて、拓也は笑顔をつくって見せた。
「私、シャワー浴びてくる」
雪江がふらふらと立ちあがり、やがてばたんとドアを閉める音と、シャワーのお湯が肌に当たって弾ける音が聞こえた。
そんな音を聞きながら、拓也は体がベッドの中に沈みこんでいくような感覚を楽しんでいた。
くつろいだ拓也が眠りに落ちるのを妨げるように、どたんとドアの開く大きな音が聞こえた。シャワールームのガラス戸の音ではない。
「なんだよ……」
拓也はうっとうしげに上半身をあげた。
すると……、
「お疲れっ、青年!!」

「拓也さぁぁん、かっこよかったですぅ！」
「ウワァァァァァッツ!!」
拓也は、慌ててベッドシーツを体に巻きつけた。
目の前に彩香とミークが立っている。
「な、な、な、なんで、ここに！」
「エー、拓也さん、ずーっと気がつかなかったんですかぁ？」
ミークが素っ頓狂な声を張りあげた。隣で彩香はにやにやしている。
「私たちぃ、隣の部屋にいたんですよぉ。あのね、どうなるか耳を澄ませてたの！」
「そゆこと、青年わかった？」
——冗談じゃない！——
拓也は手を振りあげた。
「じゃあ、ずーっと尾行してたのか！」
それに答えず、ミークと彩香は素早く拓也の体からベッドシーツを剝ぎ取ると、股間に目を走らせた。
「うわぁ！　バカ、見るなよ！」
急いで手で隠す。ちゃんと服を着た女ふたりの前で、全裸で股間を隠している姿は、男

としてはかなり情けない。
「もう、見ちゃったもんね！　さっきまでのギンギンが、すっかりしょぼくれちゃった拓也のオチンポ」
彩香がけらけらと笑う横で、ミークが表情を輝かせた。
「拓也さん。ほくろ1個、消えてますぅ！　あと、3つです！」
「え？」
拓也はそーっと手で覆ったペニスを盗み見た。しょぼくれていてよくはわからないが、確かに黒い点がひとつなくなっている。
「ということは……」
「拓也さんが、雪江さんに幸せをもたらしたんですよっ！　やりましたね、拓也さん！」
ミークが大はしゃぎで、裸の拓也に抱きついた。
「バ、バカ、やめろよ！」
疲れきったはずのペニスがちょっとだけ顔を持ちあげた。
男の哀しさに顔をゆがめる拓也を見てあきれていた彩香が、思いだしたように言った。
「あれ？　そういえば青年、なんか急いでたんじゃなかったっけ？　待ち合わせがどうのこうのとか言って……」

「あ……」
拓也の背中を、冷たいものが走り抜けた。
(忘れてた……)
杏子との8時の待ち合わせ。なによりも大切だったはずの約束の記憶を、まさかスペルマと一緒に飛ばしてしまっていたとは——。
「あ、彩香さん！　いま何時！」
「え？　もう、11時近いんじゃない？」
ベッドから転げ落ちるように抜けだし、拓也はブリーフもはかずに、ズボンに足を突っこんだ。
「あれぇ、彩香さん。どうしたんですぅ？」
今までの騒ぎをまったく気にしている様子もなく、今や幸せいっぱいになった雪江が、バスルームから白いバスタオルを巻いて現われた。
「あ、そうだ彩香さん。私これからはぁ、おつき合いの相手と、うまくいくかもしれないんですよ！　拓也君の、おかげなんですけど……」
雪江は部屋を見渡したが、もうすでに、拓也の姿はそこにはない。
「あれ？」

きょとんとしている雪江がおかしくてたまらないといったように、彩香は腹を抱えてげらげらと笑い転げた。
ミークはといえば、拓也の忘れていったブリーフを手に、なにがおかしいのかはよくわからなかったが、彩香につられて声をあげていた。

☆

「ハアハアハアハアハア……」
拓也は走った。
今までの人生でこれほどに走ったのは、『かけっこで1等賞になったら、お祝いに千円あげようね』と母親に言われた小学4年生の運動会以来だ。
しだいに、拓也の足がゆっくりになり、やがて完全にとまった。
「ハアハア……ハァハァハァ」
目の前には、無惨にも閉められたガラス戸。ガラスの向こうは真っ暗で、かすかにテーブルに積みあげられたイスが見える。
ガラス戸の取っ手にかけられた、『CLOSE』の5文字が心に痛い。
「ハアァァァ……」
その場にしゃがみこんだ拓也の目に、ガラス戸に挟まれた1枚の紙切れが飛びこんだ。

CLOSE
拓也クンなんか
ダイッキライ!!
バカ拓也なんか
どっか行っちゃえ!

「ハアァぁぁ」

そこに書かれている文句は、拓也をノックアウトした。

『拓也クンなんか、ダイッキライ!! バカ拓也なんか、どっかいっちゃえ!』

拓也は書きなぐったような杏子の字に目を落として、ため息をつかずにいられなかった。

いったい俺自身の幸せは、どうすればいいんだ!

と声を出して叫びたかったが、もはやその元気すら、彼には残っていなかった。

第4章　セーラー服を脱がさないで！

拓也はいらいらしていた。
さらに落ちこんでいて、そのうえやたら怒りっぽくもなっていた。予備校の授業にいく気もなく、ゲームで遊ぶ気にもなれなかった。
要するに、なにをする気にもなれない精神状態なのだ。
「はあぁぁぁぁ」
出てくるのはため息ばかり。ここのところ、ずっとそうだ。
受話器を握りしめ、杏子の自宅の番号を途中までプッシュしては、やめる。つながったところで、杏子はいない。いや、いないふりをしているのは、わかりきっていた。
「ははははあああぁぁぁぁぁ」

ヨリを戻そうとわざわざ連絡をくれた杏子を、ヨリによってすっぽかすことになってしまったとは……拓也は悔やんでも悔やみきれなかった。何度も謝ろうと、事情を説明しようと連絡を試みた。けれども杏子は決して、電話口に出てはくれなかった。

「はあ、はあ、はあぁぁぁ」

それでも拓也はもう一度、すっかり暗記している杏子の電話番号を頭に思い浮かべ、受話器を取りあげようとした。

その時である。電話機から流れるけたたましい電子音が、拓也の部屋に鳴り響いた。

「誰だよ、こんな大事な時に」

拓也は気をそがれたことをひとしきり怒り、それから乱暴に受話器を取った。

「もしもし!」

〝あ、拓也君? あの、私です〟

「きょ、杏子ちゃん!」

杏子の声を聞いたのは何年ぶりかのように、拓也には思えた。それにしても、たったいま連絡を取ろうと思っていたところに電話がかかってくるなんて、やはり杏子と自分とはベストカップルなのかもしれないなぁと、拓也は思わずひとりにやにやしてしまう。

「何度も、電話かけたんだよ」

〝ええ、わかってるわ。ごめんなさいね。それで、あの……〟
杏子は拓也に、東京ドームの野球の券が2枚あるのだと告げた。
〝あのね、お父さんの会社のお得意さんがね、券くれたの。巨人＝中日戦なんだけど、ボックス席で、あのね、今日の6時からなんだけど〟
「いく！　絶対いくよ！」
なにがあったって杏子と一緒にいくんだと、拓也は大声を出した。
「今度こそ本当に、いくよ。この間はゴメン。今日は絶対絶対いくからね！」
〝うん。待ってる〟
杏子は大の巨人ファンだ。拓也は本当は中日が好きなのだが、杏子に合わせるため、巨人ファンだと言ってあった。
(俺は今日から本物の巨人ファンになるぞ！)
拓也は心に決めた。
〝で、券なんだけど、拓也君の分は、昨日郵便受けに入れておいたから〟
「郵便受けに？　直接きて手渡してくれてもよかったのに」
〝なんだか、会いづらくて〟
杏子も、なんとか拓也と仲直りしようとしていた。時々杏子は不安になる。先日、拓也

と待ち合わせた喫茶店で彼女は、閉店までずっと彼を待っていた。待ち合わせ場所をまちがえたのではないかと思い、店で電話帳を借りて、付近の喫茶店すべてに電話もしていた。

もしかしたら自分はもう、拓也にきらわれたのではないかという不安でいっぱいだった。

拓也は優しいから、はっきり別れを告げずに、自分との約束を破ることで自分たちの関係を自然消滅させようとしているのではないかと、杏子は考えもした。

昨日も、本当は拓也の部屋のドアを叩きたかった。けれど、もしそこに拓也だけではなく、他の女性がいたらと思うと、杏子は恐くてとても部屋までは訪ねることができなかったのだ。

今だって杏子は、拓也のアパートが見える電話ボックスにいた。2階の1番はしにある拓也の部屋のドアを見ながら、話していたのだ。

〝待ってるからね……〟

杏子はそう言って、受話器を置いた。公衆電話機から吐きだされたテレホンカードを手に取ると、それをポケットに突っこみ、電話ボックスから出ようとした。

「あら?」

電話ボックスの前をモデルのように美しくスタイルのよい女性が通りすぎ、拓也の住む木造アパートへと入っていった。

（あんなきれいな人、拓也君のアパートに住んでいたっけ？）

その女性は高いハイヒールでカンカン音をたてながらアパートの2階へと登っていき、拓也の部屋の前に立った。

（誰、あの人！）

その女性がドアをノックしているのが、杏子にはよく見えた。

（誰なの？）

杏子はいたたまれず、走ってその場をあとにした。心臓がドクンドクンと速く激しく鼓動を繰りかえしているのは、走っているためだけではない。

（すごくきれいで格好いい人。私なんかあの人にくらべたら、ちんちくりんだわ。もし、拓也君があの人のこと、好きになってたとしたら……）

今夜、拓也は東京ドームにこないかもしれない。こなかったらもうふたりの仲は終わりだと杏子は思い、涙よ出るなと、念じた。

☆

ドンドンドンドンドン！

古い木造アパートの全室が振動するほどの勢いで、ドアがノックされた。

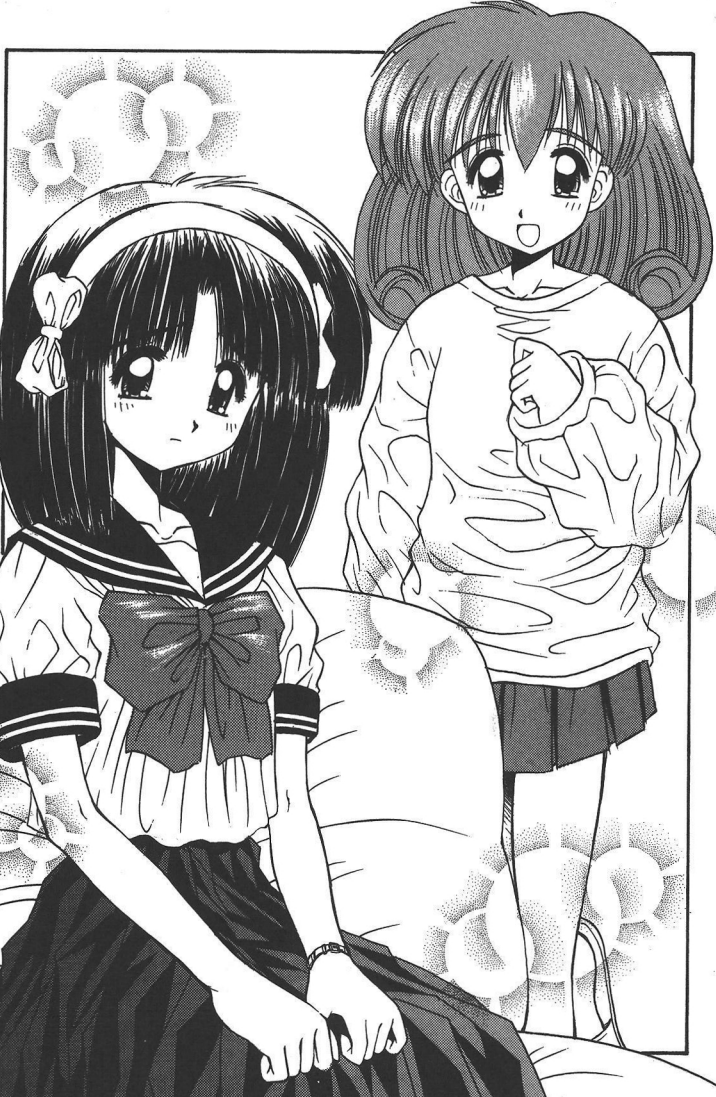
「なんだよ、誰だよ」

杏子とのデートになにを着ていこうかと、押入の中を引っくりかえしていた拓也は、しぶしぶドアを開けた。
「ひっ！」
長い髪、派手派手しい真っ赤なボディコンワンピース、じゃらじゃらとぶらさげた大きな金のピアス。
「彩香さん！　ど、どうしてここが」
「ふーん、わりかしまともなとこに住んでるんじゃん」
彩香はずかずかと拓也の部屋に入りこみ、あたりをきょろきょろと見渡した。
「いやぁさぁ、何度も電話してたんだけど、話し中だったからさ、きちゃった」
「どうしてここがわかったんですか！」
「ミークに聞いたのよ」
台所の流しにたまった洗いものを、彩香は興味津々といった目で見つめた。拓也は急に恥ずかしくなり、彩香を玄関まで押し戻すと、
「なんですか、いきなり！」
と尋ねた。
「あ、そうそう。喜べ青年！　今度はなぁ、セーラー服だぞ、セーラー服！」

にやにやしながら、彩香は言う。
「ぴっちぴちのジョシコーセイ！　しかも超お嬢様だぞ。さらに今なら特典として、不幸までついてる。どうだ？　ん？」
どうだと言われても、拓也にはあまりに突然のことで、返答しようがない。
「なに黙ってるのよ、なんとか言いなさいよね」
ニコニコの目をいきなり尖らせ、返答しだいによってはただじゃすまないという勢いですごむ彩香に、拓也はなんにも言えない。
「まあいいわ。さ、拓也いくわよ」
「い、いくってどこへ」
「私のマンションよぉ。彼女待ってるんだから」
「か、彼女って、あの、俺用事が……」
「さ、いきましょ」
強引な彩香に、拓也は逆らえない。
（まあいい。夕方までには時間もあるし……。いざとなったら途中でバックれちゃえばいいさ）
当然拓也には、セーラー服のお嬢様をひと目見ておきたいという下心もあった。

ハイヒールを突っかけ、ミニスカートを気にもせず、太腿をあらわにして豪快に歩く彩香の後ろを、拓也は小走りに追い駆けていった。

☆

拓也を待っていたのは、美里(みさと)という名のおとなしそうな女子高生だった。
拓也でも知っている有名な某お嬢様女子高校の制服に身を包んだ彼女は、今にも泣きだしそうな顔で、ちょこんとソファに座っていた。
「彼女ね、かわいそーなんだよ。絶対助けてあげてよねっ!」
だぶだぶのTシャツ1枚だけを着た、まるで警戒心のかけらもない格好のミークが、美里のあまりの美しさ、清楚さに、呆然と立ちすくんでいた拓也に抱きついた。
ミークのふくらみかけた乳房を腰のあたりに感じ、拓也はちょっとだけ、慌てた。
目を下に向け、寂しそうな顔でうつむいている美里は、本当に不幸そうに見える。
彼女の着ている制服は基本的にはオーソドックスなセーラーの夏服だが、胸もとに小さく入った校章は、まぎれもなく名門女子校の校章だ。リボンの色がオレンジ色というのも、美里がその学校の生徒であることを物語っている。
美里の整った顔だちの中で、特に長いまつげが憂いを含み、黒目がちの瞳が愛らしい。
眉毛も形よく、唇は小さくふっくらとしている。肌は日焼けを知らないで今まで育ってき

たんじゃないかと思われるほど、白い。肩までのばした黒髪は、日本人形のようにきちんと揃えてはさみを入れられ、つやつやと光って見える。
骨格からして美しいんじゃないかという上品な顔だちだと、拓也は感心して見つめた。
「いつまで突っ立ってるのよ、座んなさいよ」
彩香がそう言って拓也の背中をつつき、自らソファにどっかりと腰を降ろして長い脚を組んだ。
彩香のやや乱暴な調子に驚いたように、美里は身体をぴくりとさせ、唇を噛みしめた。
「あの……」
そろりそろりと美里と向き合う形でソファに腰かけた拓也は、おそるおそる切りだした。
「彼女、彩香さんの知り合い……のわけないですよね？」
上品そうな美里が彩香の知り合いだとは、どうひいき目に見ても思えなかった。
「さっきね、知り合ったのよ」
彩香は得意げに、大きな声で応える。
「美里ちゃんてばさぁ、電車の中でチカンにあっててさぁ、あんまりかわいそーだから、この私が助けてあげたってわけ」
「チカン、ですか」

美里の白い頬が、見るみる桃色に染まっていった。涙をこらえているのか、細い肩が上下に大きく震えている。

こんなにも線の細い、いたいけな美少女にチカン行為を働く男がいるなんてと、拓也は無性に腹が立つ。

おそらく美里は、なにも言えずじっと男の愛撫（チカンというのが、女の子のどこをどんなふうにするのか、拓也にはよくわからなかったが）に耐えていたのだろう。

「お尻撫でまわされて、なんか男の手が美里さんのパンティーの中に入ろうとしたところで、彩香さんがその男の手をつかんで……」

ミークが、拓也の耳もとでささやいた。

「持っていた安全ピンで、めった刺しにしたんです」

「めった刺しーっ！」

拓也は唖然として、彩香を見つめた。

「おーほっほっほっほっ！」

彩香は、得意満面といった笑顔だ。

「もう、男のお手々、血だらけ」

チカンしていたのは悪いが、それにしてもかわいそうだと、拓也は心の隅でチカンに同

情してしまった。
「それでさ、チカンの汚い血が美里ちゃんのスカートにもついちゃったからさ、きれいにしてあげよーと思って、ここに連れてきたわけ。彼女、学校いかなくちゃならないからいいって言ってたんだけどさ」
なるほど、彩香さんが無理やり連れてきたんだなと、拓也は納得した。
「で、彼女に話を聞いてみたらさ、かわいそーなのよ。なんとかしてやんなきゃと思って、あんた呼びにいったの」
彩香につつかれ、美里は大儀そうに口を開けた。
「わたくし、あの……昔からなんですけど、なぜだかチカンに……よくあうんです」
高い澄んだ声で、美里はぽつりぽつりと話しはじめた。
彼女は幼い頃からなぜか、チカンや変質者の被害にあいやすかったのだという。夜道でレイプされかけたこともあったため、心配した両親が彼女に夜間の外出を禁止し、学校への行き帰りも、車を出してくれるのだという。
「今日は、どうしても両親の都合がつかなくて、久しぶりに電車で通学したんです。やっぱりチカンにあって……彩香さまがいてくださらなければ、また、イヤな思いで1日をすごすところでした」

今の今まで泣きだしそうな顔をしていたのに、チカンの被害にあった話を、あまりにも美里が淡々と話すので、拓也は少し驚いていた。
おそらく、もうチカンについては慣れっこになってしまっているのだろうとしか、考えられない。
「それでわたくし、あまり外出できなくなってしまって……外出したらきっとチカンにあいますから。けれども、もういやなんです。普通の人と同じように、わたくしもチカンの心配をしないで、外出したいんです」
「美里さん、かわいそーだよぉ」
ミークは大きな瞳に涙をいっぱいためて、拓也を見つめた。
「拓也さん！　なんとかしてあげてよ」
「なんとかしてって言っても」
まさか、1年中彼女のボディーガードをしているわけにもいかないしと、頭を抱える拓也に、彩香がそっと耳打ちした。
「実はね、ミークがすでに原因を調査ずみなのよ。解決方法もわかってるわ」
「え？」
彩香はミークに目で合図する。ミークは拓也の手を引っぱり別室へいくと、隣の部屋の

美里に聞こえないように、小さな声で話しはじめた。
「ミークね、彩香さんが催眠術にかけた美里さんの、守護精さんとお話ししようと一生懸命努力したの。でも、美里さんの守護精さん、応答しないのよ」
「応答しない？　つまり、どういうことだ」
「美里さん、守護精がついていないってこと」
じゃあ、今の自分と同じような状態なのかと、拓也は息を呑んだ。
「じゃ、じゃあ、彼女もいま不幸のドン底に……」
「そういうわけでもないの」
ミークは説明する。
「アノね、本来守護精の位置には、私たちみたいな職業守護精がつくんだけど、美里さんの場合、フリーの精霊がくっついてるみたいね」
「フリーの？」
「つまり、自営業で守護精やってるって言うか……」
拓也はどうしても、精霊世界が自分たちの世界と同じように会社や企業でもって運営されているという状態が、理解できない。ミークが突然現われて、自分の守護精だと言い張っていることすら理解するのがやっとなのに、そのうえ自営業の守護精だと言われても、

なにがなんのことやら、ちんぷんかんぷんだ。
けれどそこで色々質問すると、話はややこしくなりそうだし、なにより杏子との約束の時間までに美里をなんとかしなくてはならないので、ここは、わかっているふりをして、ミークに話をつづけさせた。
「あのね、美里さんについてるのは、趣味で守護精やってる精霊さんじゃないかと思うの。私の呼びかけに答えないというのは、私とは種族のちがう精霊なのよ」
精霊っていうだけで不可解には充分なのに、さらに種族があるのかと拓也はうんざりだ。
「……それで？」
「うん。たぶん、淫魔族ね」
「インマァ？」
なんだそれはと、拓也は素っ頓狂な声をあげた。
「淫魔っていうのは、つまり、えっちっちい精霊なのよ。サキュバスとかインクブスとか聞いたことない？　淫魔が実体化したものなんだけど。要するにね、淫魔は守護精の代わりに美里さんに憑いて、美里さんからエッチなオーラを放出させてるの。そのオーラを感じた男は誰でも野獣に変身して、彼女を犯して我がものにしようと寄ってくるのよ。淫魔はそんな男の欲望エネルギーを喰ってるわけ」

幼い顔だちのミークが淡々と、よく考えればもの凄いことを言っているのに、拓也は啞然とした。
「するってえと、なに？　淫魔は彼女を餌にして、変質者を釣ってると」
「まあ、そんなところ」
「淫魔に憑かれちゃった美里さんも、エッチになるわけ？」
「普通はそうなんだけど、美里さん処女だから、抑制が働いて、淫乱にはなってないみたいね」
「ちょっと待ってよ。彼女に近づいた男がみんな興奮しちゃうんだったら、どうして俺は平気なわけ？」
「拓也さんは今、守護精がいないでしょ。だから淫魔のオーラを感じ取ることができないの。つまり、美里さんに正常に接することができるのよ！　だから拓也さんじゃないと、美里さんを救えないの」
「救うったって、まさか俺に淫魔と戦えっていうんじゃないだろうな？」
「拓也さんは、淫魔を呼びだすだけでいいです。簡単です。彼女とエッチして、快感に導いてやってください。そうすれば、淫魔は姿を現わすはずです」
なんとなく予想はしていたとはいえ、拓也は気が重い。

「それで、その出てきた淫魔は、どうするんだよ」
「あとは私がやります」
ミークは、その場でくるりと宙に浮いたかと思うと、細かなガラスの破片のようなものが、きらきらと光りながら、ミークの身体からたち昇った。
そして一瞬、ミークの全身が淡い光に包まれたかと思うと、拓也が初めてミークに出会った時のような、白い羽衣姿に変わってしまった。
「ミークに、お任せよ！」
精霊本来の姿に戻ったミークは、気のせいか、緑色をした瞳の輝きまでちがう。
「もう、淫魔でもなんでも出てこいよ！」
目の前で変身なんかされては、拓也にはかなわない。
「やってやろーじゃないか」

☆

拓也はそっと、美里の小さな手に自分の手を重ねた。
並んで彩香のセミダブルベッドにふたりっきりで腰かけた拓也と美里は、ずっと無言のままだ。

拓也は、男たちの欲望で汚されつづけている美里をどうやってエッチに導いてよいものか皆目見当がつかず、ずっともじもじしていたのだが、いい加減なんとかしなくてはと、必死だった。
拓也の手の中で、美里の手がぴくりと震えた。
慌てて拓也は手を離す。温かな美里の手の甲からは、彼女の高鳴る心音まで聞こえてきそうで、拓也にはつらかった。
「あの……わたくし、彩香さまから、聞いてます」
言いづらそうに、美里が言った。うつむいた瞳は心なしか潤み、下に向けた顔は、紅色に染まっている。片手でセーラー服のリボンをぎゅっと握りしめ、美里はゆっくり顔をあげると、拓也の胸のあたりに焦点を当て、震える声をあげた。
「わたくし……この体質をなんとかするためには、拓也さまにい、い、いやらしいコトをしていただかなくては……いけないんですって」
純情なお嬢様の口から飛びでた『いやらしいコト』なんていう言葉は、拓也の下半身をダイレクトに直撃した。
（か、可愛い！）
拓也の心臓が、バクバクと高鳴った。体温が上昇し、呼吸はどんどん速くなっていく。

海綿体も熱くたぎる。
「わたくしを、助けてください。わたくし、拓也さまにだったら、どんなコトされても」
切なげで真剣な眼差し。美里にそんなふうに見つめられ、拓也はつい、美里を助けるためなどという目的を越えて、彼女を抱きしめたくなってしまう。
「美里ちゃん！　ごめんよ」
拓也は美里の肩に両手を添え、そのまま唇をぶつけた。
「ああっ」
美里の柔らかで薄い唇を吸いながら、拓也は身体を倒した。
「拓也さま」
ベッドにあお向けに押し倒された美里は、そっと目を閉じて拓也を待つ。乱れたセーラー服の襟もとから、純白のブラジャーのひもがのぞく。
（もう、我慢できないっ）
拓也はセーラー服のリボンに手をかけ、一気に剝ぎ取った。心地よい衣擦れの音とともにリボンが宙を舞う。そのあとセーラー服の、まず上半身から脱がそうとのばした拓也の手がとまった。
「うっ！」

拓也には、セーラー服の脱がせ方が、わからなかったのだ。いやらしいマンガで見たセーラー服は、いつの間にか脱げていた。18歳未満閲覧禁止のビデオでは、確か前開きになっていた。けれども目の前にある美里のセーラー服の前は1枚布で、チャックもボタンもない。
「うう……」
美里はぎゅっと目を閉じ、手を固く握りしめ、脇を身体に押しつけるようにしている。かなり緊張しているようだ。こんな美里にまさか、セーラー服自分で脱いで、なんて、とてもじゃないけれども、頼むことはできない。
(どうすりゃあいいんだよ。おい、気まずいぞ!)
拓也はおざなりにセーラー服の上から、美里のバストの隆起を、指でなぞった。激しい心臓の鼓動が、指の先から拓也に伝わる。美里の乳房は柔らかく、なめらかだった。美里のブラジャーを着けているはずだが、薄い生地のものを使っているのか、まるで感じられない。セーラー服の上から直接、肌に触れているようだ。
拓也の手が滑り、小さな塊を捕らえた。
(乳首だ!)
感じているのだろうか、それとも緊張のためか、美里の乳首は硬く尖り、セーラー服の

上からでも、はっきりと指で触れ、形を確かめることができた。
(ううっ。そんなに大きくはなさそうだけど、なんて可愛らしいオッパイなんだ。直接、触りたいよぉ)
拓也のいきり勃った男根が、しくしくと痛んだ。すっかりふくれ、ズボンの中で痛いほどに張っている。先走り液で下着が汚れてしまいそうだ。
(セーラー服の脱がし方……)
わからない。気ばかりが焦る。
その時だ。頭の中に澄んだ声が響いた。聞こえたわけではない。拓也はその声を、感じたのだ。
〝脇、脇にチャック！　がんばってね〟
(ミークだ)
声は、誰かを特定させるように聞こえたわけではなかった。でも、拓也にはそれが誰からのメッセージか、なぜか即座に感じ取ることができた。
(ミークが、助けてくれたんだ。よーし！)
拓也はかたくなに閉じられている美里の腕をつかみ、そっと自分の首にまわした。そしてセーラー服の脇を手でさぐる。

（あった！）
柔らかな布の一部に、硬い金属質の筋があった。拓也がセーラー服の脇チャックを開けると、真っ白で無駄な肉のついていないきれいな脇腹がこぼれる。
「恥ずかしいっ」
美里が、顔をそむけた。
「美里ちゃん、きれいだよ」
拓也は興奮した自分自身をもなだめるように、静かに言った。
「本当？」
「ああ、本当さ」
美里は微笑むとゆっくり上半身を起こし、セーラー服の裾に手をかけ、自分からそれを脱ぎ捨てた。
「美里ちゃん……」
「決心がついたんです。心のどこかにあった、こんなコトしなくてもいいんじゃないかって思いが、断ちきれたんです。拓也さま、決して焦って私を裸にしようとはなさらなかったわ。とてもお優しくて」
「そんな……」

本当はものすごく焦っていたのだが、セーラー服が脱がせなかっただけなんて、拓也は口が裂けても言えない。
静かにセーラー服の上着を脱ぎ捨てた美里は、もう恥ずかしそうな表情はしていなかった。女の自信といったものがあふれているような、強い光を瞳に宿している。
ブラジャーの後ろに手をまわし、ホックをはずした美里は、大きくはないが形のよい、つんと上を向いた乳房を拓也の前にさらした。
「拓也さま、今だけ美里は、拓也さまの恋人になります」
そしてそっと立ちあがって、スカートを降ろした。
（美里ちゃん……）
純白の、模様のない綿パンティー1枚をも脱ぎ捨て、靴下だけの姿となった美里は、拓也がセーラー服の上から想像していたよりもずっと発育し、熟した女の身体つきをしていた。腰まわりについた脂肪が、柔らかな女の曲線を描き、なんともいえない色気を醸しだしている。スカートに隠されていた太腿はたっぷりとしていて、女らしい。
「拓也さま、わたくしが、気持ちよくしてさしあげます」
美里はひざまずき、拓也のズボンに手をかけた。
「え？」

ズボンはあっと言う間に脱がされた。拓也はペニスが今にも飛びだしそうなほどふくらんだブリーフ姿のまま、ストンとベッドに腰かけた。
「うふふ。拓也さまのココ、こんなにふくらんでしまっていますわ」
美里はそんな拓也のペニスを、布越しに指で弾いた。
「あううっ」
(どうしたんだよ、美里ちゃん。急にこんなに積極的になって)
慌てる拓也の頭の中で、また声が響いた。
〝淫魔が、姿を現わそうとしているの。だいじょうぶ、そのままつづけて〟
(ミーク……どこかで、俺たちのこと、見てるんだ)
誰かにこの状況を見られているという思いに、拓也はなぜか興奮を覚えた。
「ああっ」
残ったパンティーを脱ぎ捨てた美里が、拓也のパンツをも降ろし、勃起した男根を引っぱりだしてうつ伏せになると、いきなりその先端に可愛い唇を押し当てた。
「み、美里ちゃん！　なにも、そんなことまでしてくれなくったって」
「いいんですの。わたくし、拓也さまに喜んでいただきたいの」
「ううう……」

美里は小さな口を一生懸命に開けて、熱くたぎった肉棒を頬ばる。口全体を使って亀頭に吸いつき、唇をゆるめ、また強く吸う。美里の頬がぺこぺこと動いた。
「気持ちいいよ、美里ちゃん」
口の中におさまりきれないサオの部分には、美里の小さな手が添えられる。美里はゆっくりとペニスを咥えた唇を上下させながら、その動きに合わせて手のひらでサオをしごく。
「おおおおお……」
「ひたくふぁ、なひですくぁ？」
勃起にしゃぶりついたまま、美里が言う。
「痛くないかだって？　全然！　気持ちいいよ」
気をよくした美里は、さらに激しく喉を鳴らした。
チュウパ、ジュウルルル、ちゅぷぅぅ……。
（ああ、本当に美里ちゃんは処女なのか？　こんなに一生懸命やってくれて。き、気持ちよくって、射精ちゃいそうだ）
〝お口で射精なんかしちゃ、ダメよ！　出すんなら、膣内よ、膣内！　だいたい美里さん、処女膜破るのが怖くて、長引かせてるのよ。これ以上長引かせたら、本当に彼女、やる気なくなっちゃうわよ！〟

また、ミークの言葉が拓也の頭の中で響く。
(そうだった。危うくのめりこむところだったよ)
拓也は我に返り、必死にペニスを咥えこむ美里の肩に両手を添えると、美里の気に障らないよう柔らかい力で口をはずさせた。
「もういいの？　気持ちよくはなかったのですか？」
「とてもよかったよ。だから、今度は……ね？」
美里は耳まで顔を紅色に染め、唇をぎゅっと噛みしめて、決意した瞳でうなずいた。

☆

拓也は美里をベッドにあお向けに倒し、シャツを脱ぎ捨て、じっと彼女の脚の間を眺めた。
「ああ、ハズカシイッ」
美里は股間を隠すように太腿をぴったりと閉じ、手で顔を覆う。
拓也はそんな美里の緊張を解きほぐそうと、柔らかな太腿に手を這わせる。
〝淫魔が支配している間は、破瓜(はか)の痛みはないはずよ。拓也さん……、早く突っこんじゃって！　チンポも勃たせてるだけじゃあ役に立たないんだからね〟
(わかってるよ。うるさいなぁ)

〝なんですってぇ!〟

拓也は大きく深呼吸し、何度も何度も美里の太腿をさすった。柔らかくてすべすべで、染みひとつないきれいな太腿。おそらく何度もチカンの手で、なぶられたのだろうと、拓也は思う。

(美里ちゃんは、いっぱいいっぱいいっぱいイヤな目にあってるんだ。けれども、それをなんとかしようと俺の前に身体をさらしているんだ。精いっぱい誠意をこめてやらなくちゃあ、バチが当たる)

拓也は、ギンギンに勃起したチンポがいい加減爆発したくってうずうずとしているのを、脂汗をたらしながら我慢し、根気強く美里の太腿をさすりつづけた。時には強く揉むように、そして時には触れるか触れないかといった微妙なタッチで。

「あは、んん」

最初はかたくなだった美里の太腿が、徐々に柔らかく砕けてくる。

「うん……んあああ」

接着剤でつけたかのようにびくとも動かなかった両太腿が、拓也の愛撫にほぐれ、ゆっくりと開いた。やがて薄い恥毛に覆われた陰部が、姿を現わす。

(もう少しだ)

拓也は開いた内腿にも手を寄せ、さらに開くように愛撫を重ねた。
「ああはん」
美里の息が荒くなってゆく。体温も上昇しているのだろう、身体全体が火照ったように上気しはじめる。
(もう少し！)
「ああん！」
ついに美里は緊張し通しだった身体の力を抜き、だらんと四肢をベッドに投げだすようになった。
(よし)
拓也は美里の頬に軽く唇を寄せた。それから両手を美里の足首にかけると、そっと膝を立てた格好で脚を開かせた。
「あ……」
美里が小さな嗚咽をあげる。
美里の女陰はふっくらとしていた。恥毛が薄いためか、ワレメがやけにはっきりと見える。拓也がそっと指をかけて大陰唇をめくると、甘い香りとともに女肉がぱっくりと開き、薄くてきれいなピンク色をした小陰唇が現われる。

「きれいだ」
拓也は思わずつぶやく。
「そんな……。いろんな男のかたにいじられてしまって、わたくしのそこ、汚れているわ」
「汚れてなんかいないよ。とてもきれいだ」
拓也は小陰唇をめくった。一番奥に隠されたまだ開かれていない女の部分はひくひくと蠢(うごめ)き、とろりとした甘い蜜をこぼしている。
(美里ちゃん、感じてくれていたんだ)
いい加減重たくて仕方のなくなった睾丸をぶらさげた肉棒の先を、拓也は的をはずさないように注意しながらワレメの中に押し入れた。
「よ、っと」
ややおびえたような瞳で自分を見つめる美里としっかり目を合わせたまま、拓也は亀頭の先にある女穴の中に入るべく、ぐっと腰に力を入れた。
「あんっ！」
スルル。
濡れそぼった蜜壺からしたたり落ちる女の潤滑油でつるりと滑り、ペニスはワレメを飛

びだしてしまった。
（そうか、処女だから簡単には入んないんだな。よし、もう一度）
注意深くワレメの中心に的を据え、拓也は再トライだ。
「よっ！」
スルルルル。
小さな穴に大きな亀頭は入りきらず、滑ってずれてしまう。
（ちくしょぉ！　くそ、くそぉっ）
美里のほぐれた緊張が再び固まりはじめ、太腿がまた閉じてゆく。
（やばいよ。緊張されちゃったら、ますます入らなくなる！）
それどころか、焦りのため、デリケートな男根はフンヤリと頭をもたげはじめる。固く閉じられた膜を、こんなに柔らかな棒じゃあ突き通せない。
（落ち着くんだ。落ち着いてゆっくりやるんだ。そうすれば、失敗しない！）
〝そうよ、落ち着いて！〟
ミークにみっともないところを覗かれたなと、拓也は心の中で舌打ちをした。その間にもチンポは硬さを失い、ますます頭をさげてゆく。
（くそぉ）

〝ミークに、オマカセ！〟

突然、ミークの声が頭に響いた。そのとたん、血液が逆流したような感覚が拓也の下半身を襲った。

（な、なんだ！　血の気が……）

拓也の全身の血液が、海綿体に集合したようだ。ペニスは熱く燃え、天を貫くほどに硬く大きく起立する。

「おおおおおおっ」

血の気がたぎるとはこういう感覚なのかと、拓也は思う。体がエッチのためだけに存在しているような感じだ。

「た、拓也さま」

「美里ちゃぁんっっ！」

拓也は真っ赤に充血した目を美里に向けた。

「ひぃっ」

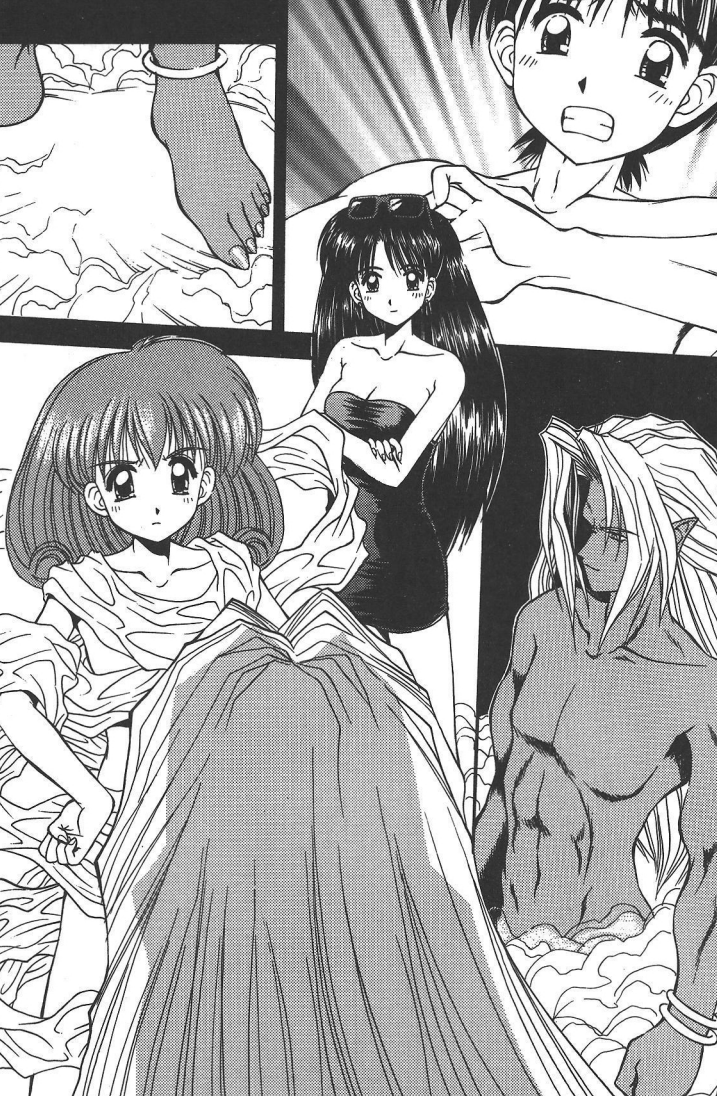
「美里ちゃん、好きだよぉぉ！」

やや乱暴に美里の太腿を割り、拓也は手を細い腰に添えた。

「あ、熱い……」

花弁に熱い塊を感じ、美里はうめいた。愛液が蒸発して湯気が出てしまうんじゃないかと思うくらい、拓也の肉棒は熱化している。
「そうさ、美里ちゃんが大好きだから、熱くなったんだよぉ」
拓也はワレメに差し入れたペニスに力を入れ、ぐっと一気に貫き通した。
「あああああっ！」
「うおおぉぉぉぉぉっ」
亀頭の先が固い膜を割り、柔らかな肉壁に包まれた。温かな血液がサオから睾丸へと流れるのを、拓也は感じる。
（やった！　処女膜を突破した！）
「あは、あは、あはああああんんん」
美里は顔をゆがめ、大きく身体をのけぞらせた。
「あん、くうううんん、あはあああぁぁぁ」
痛がっている様子はない。それどころか……美里は感じ入っているのだ。初めての膣の感覚に、快感に、浸りきっている様子だ。
（そうか！　確か淫魔に支配されているうちは痛みはないって言ってたっけ）
そういうことならと、拓也は思いっきり強く激しく腰を動かし、ギンギンに灼熱したペ

ニスで美里の膣をほじる。
「あん、あああんん、き、気持ちぃ……イイッ」
ペニスが秘唇に出入りするたびに、美里の内壁からかきだされるように愛液と純血が外へ飛び散る。
「はあ、はっはっはっ」
「いいぞ、いいぞぉぉ！」
拓也の快感も最高だ。美里の内部はリズミカルに蠢きくねり、柔襞がペニスを微妙に刺激していく。
「うおおおぉぉっ」
「あはん、はぁはぁ」
美里と拓也の呼吸がしだいに速く、激しくなってゆく。体温の上昇とともに快感が高まり、今まさにふたりは絶頂を迎えようとしていた。
その時だ――。
「あふうっっっ！」
美里の身体が一瞬浮いたように軽くなったかと思うと、白い煙が全身の汗腺からたち昇り美里を包みこんだ。

「出たわね、淫魔！」
扉が開き、ベッドの上でつながったままの拓也と美里のもとにミークと彩香が現われた。
「淫魔だってぇ！」
「拓也さんは、つづけて。淫魔が消えちゃうとイケナイからっ」
（つ、つづけろだってぇ！）
意識を失ったらしく、ぐったりとして、まるで無反応になってしまった美里を相手に、拓也は腰を振りつづけた。
美里の身体からたち昇った白い煙はある形になって、美里の頭上に浮かびあがる。
「私はミーク、守護精よ！　淫魔、美里さんから立ち去りなさい」
煙はやがてひとりの男の姿を浮かびあがらせ、そして完全に実体化した。
「あーら！」
怖い顔をしているミークの横で、彩香が黄色い声をあげた。
「イイ男じゃなぁい！　こんな小娘なんかじゃなく、私みたいな熟した女にとり憑いてくれればイイのにぃ」
確かに、実体化した淫魔はイイ男だ。引きしまった体に彫りの深い甘いマスク。耳は尖り、尻にはふさふさした狼のしっぽのようなものがついている。そしてその股間からは、

ビール瓶ほどもありそうな立派な黒いイチモツが、天井を向いてそそり立っていた。睾丸は固く締まり、ペニスの先はてらてらと濡れていた。
「私の仕事を邪魔しやがって。この女を守護精霊なんかに譲る気はない！」
腹の底から響くような野太い声だ。
拓也は背筋に寒いものが走り、チンポが縮んでゆくのを感じた。
「拓也さんダメ！　淫魔が消えちゃう」
ミークに言われ、慌てて拓也は行為を再開した。どうやら、拓也はいつまでも人形のような美里を相手に、腰を振りつづけなければイケナイはめに陥ったらしい。
（ひーっ！　射精もしちゃあダメなのかよ！）
美里の身体は動かないが、なぜだか膣内だけは活発に活動していて、拓也のペニスを刺激しつづけている。快感が駆けあがり、いったいいつまで射精を我慢できるか、拓也には自信がもてない。
（ええとぉ、にいちがに、ににんがし……）
頭の中に、大きらいな数字を並べ、なんとか拓也は、快感を引きのばそうと努力した。
「淫魔、美里さんはあなたにとり憑かれたことで、困っているの。あなたはもともと、守護の仕事なんかをする種族ではないはずよ。さっさと専門家に彼女を明け渡しなさい」

「やなこった!」
淫魔は体を倒したかと思うと、一瞬姿を消した。
「どこ!」
「ここさ」
声とともに現われた淫魔は、いきなりミークの身体を後ろから抱きしめた。
「きゃあああぁっっ」
ミークは身体を前屈させ、なんとか淫魔の手から逃れようと抵抗を重ねた。しかし小さな身体のミークの抵抗は、淫魔の可虐心をあおるだけだ。
「生意気なお嬢さんに、お仕置きしてやろう」
淫魔はミークの身体に巻きついた布をずらし、華奢な少女のような白い裸体をさらした。
「精霊をなぶるのも、楽しそうだな」
淫魔は長い指を、彼女のつるつるとした股間の奥に滑りこませる。
「いやあぁぁっ!」
「ミーク!」
拓也はミークを助けようと動きをとめ、美里から離れようとした。ところが、美里の膣が固くペニスを締めつけ、抜くことができない。

「くそお」
体を離そうとすればするほど膣圧は高まり、拓也のペニスを根元から食いちぎろうとでもするかのように締めつけてくる。
「ふふふ……拓也とやらは、しばらくそのままでいてもらおう」
淫魔は勝ち誇ったように言って、次はおろおろとして後ずさる彩香のほうを一瞥した。
「さてと、そこの威勢のいいお嬢さんにはどうしてもらおうかな……」
「い、いやあぁ！」
彩香は真っ青な顔のままドアへ駆け寄り、叫び声を残して逃げだしてしまった。
「彩香さん、ウソだろっ！　待てよ」
そうそうに逃げだした彩香に向かってなにか言ってやりたかったが、今はそれどころではない。拓也は痛みを我慢し必死にペニスを抜こうとしたものの、膣の締めつけはますます強まり、逆に拘束されてしまう。
「ミーク！」
「た、拓也さん……」
淫魔の長い指はミークの毛も生え揃っていないワレメをさすり、奥へと侵入する。クリトリスを摘み、花弁を弄ぶ。

「ああ……た、拓也さぁん」

ミークの身体が、ほんのりと紅く染まっている。淫魔のテクニックにはかなわないのか、荒い息づかいの中に、甘いため息さえもれている。

「あは、あああああ」

つんと上を向いた乳房がひとまわり大きくなり、乳輪も盛りあがる。乳首は尖りはじめ、淫魔に抵抗すらできないくらいに、ミークは感じはじめていた。

(くっそぉ！　ミークがあんなコトされてるのに、俺はなんにもできない！)

ミークの脚の間から、きらきらした液体が太腿を伝う。

「そろそろ、いただこうか。ミークとやら、おまえも淫魔の仲間になるのだ」

「あんっ！」

ミークの身体があお向けに転がされ、淫魔は起立したペニスを片手で支えながら、その上にのしかかろうとした。その姿はまるで、ウサギを襲う狼だ。

「ミーク！　逃げるんだ」

「拓也さん……ダメェ、身体が動かな……い……」

(万事休すか！)

拓也は泣きじゃくるミークを見ているのが耐えきれず、顔をそむけた。

と、その時。ばたんと勢いよくドアが開き、真っ白い着物に真っ赤な袴、頭には黄色いはちまきを絞め、手にはなにやら経文のようなものを持ったひとりの女性が部屋に現われ、勢いよく淫魔へと突進してきた。

「淫魔めぇ、消え失せちまえぇぇっ！」

巫女の姿に身を包んだ彩香だ。

突然のことに慌てた淫魔は、逃げることができない。

「くそ！　うおおおぉぉ」

彩香は手にした経文から1枚の札を出し、淫魔の大きな男根にぺたっと張りつけた。

「おお、こ、このアマァ……」

「拓也、今よ！　出しちゃいなさい！　淫魔が彼女の身体を離れている隙に、彼女を果てさせてしまうのよ」

彩香の行動に唖然としていて気づかなかったが、拓也のペニスを締めつけていた美里の膣圧が弱まっている。

「よおし」

なにがなんだかよくわからぬまま、拓也は激しいピストン運動をはじめた。

「あ、あは……ううん……」

ぴくりとも動かず青ざめていた美里の頬に赤みが射し、やがて拓也の腰の動きに合わせて、甘い声をあげはじめた。
「ああん、すごいぃぃ」
がむしゃらに、拓也は腰を突きあげた。
圧迫されていたペニスには多少痛みが走ったが、それでもかまわずに、ただひたすら膣孔を突いて突いて、突きまくった。
締めつけていただけの陰壁が微妙にうねりはじめ、拓也のペニスを柔らかく包みこむ。
「あああ、あん。イ、イッちゃうぅ」
すすり泣くような美里の声が、ひときわ高く響いた。
「お、俺もだ！」
ふくらみきった睾丸がゆるんだ瞬間、拓也は美里の膣内に多量の樹液を吐きだした。
「あああああっ」
美里は足の先をピンと張り身体をのけぞらせて、自分の体内に染み入る蛋白質を感じながら、果てていった。
「く……くそぉ」
すると、よろけた淫魔の体が再び白い煙のようなものに変わってゆき、やがて消えた。

「ふう」
彩香がため息をつきながら、床に落ちた札を拾った。
「昔、私の先祖がこれを使って淫魔を倒したって聞いてたけど、本当にこんなものが効くなんて思わなかったわ」
札に書かれていた文字を、彩香は声をあげて、読んだ。
「『いんぽ』……冗談みたい！」

☆

拓也はパンツの中に、ほくろがまたひとつ消えたチンポをしまいこんだ。
「もう！　ミーク、拓也さんのことも彩香さんのことも、すっごいすっごい見直しちゃいましたっ！」
ミークは大はしゃぎで、拓也にはジュース、彩香には缶ビールを運んできた。
隣のベッドルームでは、気を失ったままの美里が軽い寝息をたてている。
「ミークもさ、がんばったじゃない」
彩香は暑くてやってられないというように袴を太腿まで持ちあげ、ソファにどっかりと腰を降ろして、ミークから受け取った缶ビールをぐびぐびと喉の奥に流しこんだ。
「彩香さん、てっきり逃げだしたんだと思ったんですよ。それなのにまさかあんなにいい

タイミングで助けにきてくれるなんて」
感心したように言う拓也を、彩香は笑い飛ばした。
「かっかっか！　スーパースターはね、土壇場で大活躍すればいーのよ。おっと、土壇場と言えば……」
彩香はいそいそとテレビのリモコンを手にし、テレビに向かってスイッチを入れた。
「おお！　こっちも土壇場じゃーん」
テレビの画面からは、興奮した様子のアナウンサーの声が流れてきた。
『……ツーアウト満塁！　バッターは立浪です。ここで1発出れば、中日は大きく逆転！ピッチャー入来、足をあげて……』
「ああああっ！　東京ドーム！」
拓也はジュースを、落とした。
カーン！
白球は、一直線にバックスクリーンへ向かった。三塁側からは大歓声が巻き起こり、マウンド上の入来は、がっくりと肩を落としている。
観客の大多数に当たる巨人ファンがぞろぞろと席を立つ中、杏子もそっと立ちあがった。ずっと空席だった隣のシートに、食べなかったお弁当を置いて。

第5章　拓也と杏子、運命の糸…

「ちょっとぉ、青年！　開けなさぁい！」
何度かけても話し中の杏子の家への電話連絡をあきらめ、頭をかきむしって重い心を引きずっている拓也の部屋のドアが、激しく叩かれた。
どう聞いても、ドアの外で叫んでいるのは、拓也に心の重荷を載っけたうえで、まだ座りこもうとしている彩香だ。
「おーい。拓也！　開けろってばぁ。いるのはわかってんだぞ！」
拓也は、午後の西陽がカーテンから射しこむその狭い部屋の隅に丸まり、しばらくの間、彩香の声を無視しようとしていた。
考えてみれば、彩香に会ってからの自分の生活はめちゃくちゃだ。彩香に会いさえしな

ければ、ミークは出てこなかったわけだし、自分の不運だって、もしかしたらいつかは解消していたかもしれない（これだけは、ミークのがんばりしだいだったわけだが）。
とにかく、今はなにより、杏子との仲を裂いたのが彩香その人であるような気がしてならなかった。杏子との約束を破り、一緒に巨人軍を応援してあげられなかったことを、拓也は今、のたうちまわるほどに悔やんでいる。
もしかしたら巨人が負けたのだって、彩香のせいかもしれない。
こんな時に、彩香になんて、会いたいはずがなかった。
「拓也ぁ！　拓也ちゃーん。用があるのよぉ、出なさぁい！」
それに彩香の声はかすれ、少々上ずっているようだ。ろれつもおかしいし、なによりやたら大きい。昼間っから、酔っぱらっているのは明白だ。
（出るもんか！　彩香さんの顔なんて見たくない）
拓也は耳をふさぎ、物音をたてないようじっとしていた。居留守を使うつもりだった。
彩香も本当に拓也が出ないとわかれば、帰るだろう。
ところがだ。彩香の声は、だんだんと大きくそして激しくなっていった。
「拓也ぁ！　おい、この女ったらしのスケベ浪人！　出ないつもりなら、てめぇのヤッた女の名前、ご近所の皆さんにご報告するぞぉ！　まずは……」

「うわぁ！」
拓也は慌ててドアを開け、彩香の口をふさいで部屋の中に引きずりこんだ。
「わははは。やっぱ、いたんじゃん」
「いたんじゃん、じゃあないですよ！」
彩香の手に引っかかってしまったと、拓也は大きくため息をついた。
「わははは。いや、悪いねぇ、うん。ちょっとね、うん。ほれ、土産」
ど派手な黄色のボディコンワンピースに身を包み、耳やら首やら腕やらに、じゃらじゃらしたゴールドのアクセサリーをぶらさげた彩香は、真っ赤な顔をしながら、手にしていたコンビニの袋を拓也に渡した。そして、これまた真っ黄色の8センチハイヒールを、ぽーんと玄関に放って、さっさと部屋にあがりこむ。
「なんですかこれ、酒ばっかりじゃないですか！」
拓也はいらいらとしながら、渡されたコンビニの袋を開けた。
「酒ばっかりじゃあないぞ。ちゃんとつまみも買ってきたんだから」
「彩香さん、昼間っからどうしたんですか。もうすでに……できあがってるって感じですけど」
「わははは。ココにくる前にね、缶ビールを5つほど開けてきたんだよ」

「はあ？」

「いや……ね、あははは……ごめん、あははは」

目をとろんとさせ、だらしなく口もとを開いた彩香は、拓也が怒っているのを見て取ると、ばつが悪そうに照れて舌をのぞかせた。

「別に、いいですけど。どうしたんですか」

何事か照れている彩香の様子に、拓也は怒れなくなってしまう。だいいち酔っぱらっている相手になにを言っても無駄だろうと、彩香を部屋に入れた時から、拓也はあきらめてしまっている。

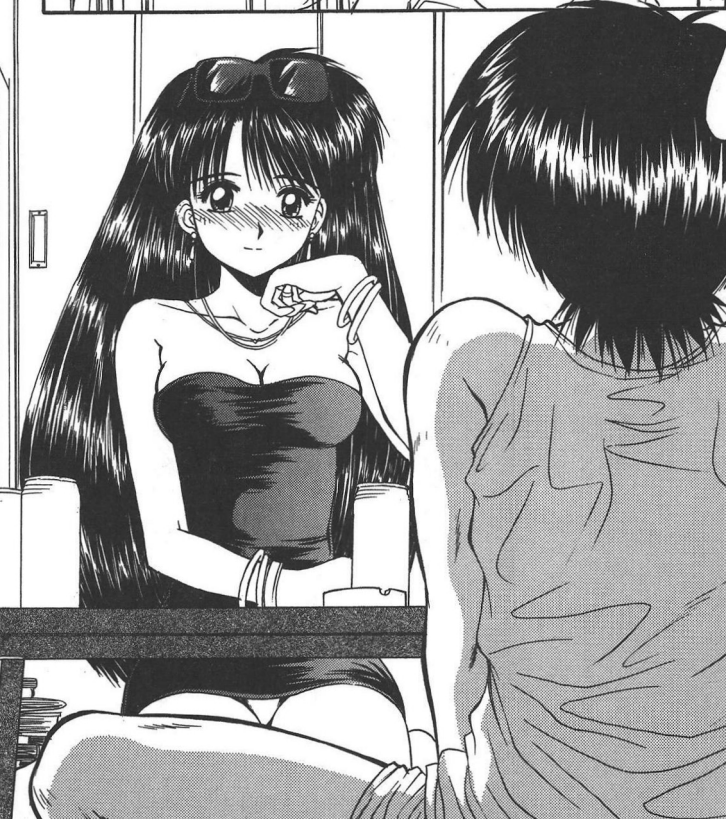
「わははは、ははは。ま、拓也も飲めや。ね？　飲んだことくらいあんでしょ？」

彩香は申しわけなさそうに、拓也に缶ビールを手渡す。買ったばかりなのだろう。まだ冷たい。

拓也はそれを受け取ると、彩香の真っ赤な唇の奥に、琥珀色（こはくいろ）の発泡液が流れこんでいくのを見ながら、自分もほんの少しビールを口に運んだ。

「で、どうしたんですか？　彩香さん」

「ははは、私、振られちゃった」

彩香が、顔を真っ赤にしながら言った。

「振られたぁ？　彩香さんがですか……」
「そおよ、悪い？」
「だからって、なにも僕のところこなくっても……」
拓也のつぶやきは、彩香の耳には入っていない。
「超イイ男だったのよ。青年実業家でね、実家も金持ちなのよ。不動産を4つくらい持ってて、地元の名士でさ。それで彼ね、私よりひとつ年下の23歳。めっちゃくちゃイイ男だったんだからぁ」
親が死んでも涙を流さないんじゃないかと思えるような彩香の瞳が、かすかに潤んでいる。
「彩香さん……」
（やっぱり、彩香さんも女の人なんだな。恋に破れて涙を流すなんて。今まで、単なるアーパー女だと思ってて、悪いことしたな）
恋人に振られたという彩香になんとなく自分を重ね、拓也もしんみりとしてしまった。
「彩香さん、元気出してくださいよ」
「元気なんて、出ないわよぉ」
落ちこんでいる彩香をなんとか励ましてあげようと、拓也は優しく声をかけた。

「別れた男なんて、忘れちゃったほうがいいですよ。ところで、彼とはどこで知り合ったんですか?」
「ナンパで」
「ナンパ、されたんですか?」
「私がしたのよ! 街歩いてたらケータイでなにか話してる彼の声が聞こえて、耳澄ませて盗み聞きしてたら、金持ちそうだったからさ」
「金持ちそうだったから、ナンパ……したんですか」
確かに、彩香ならだいたんな行動で男に迫りそうだ。
「そ、それで、どれくらいおつき合いしてたんですか?」
「2カ月」
「へ?」
「2カ月よぉ! 今度こそしっかり捕まえとこうと思ったのに! あいつ勝手にケータイの番号変えやがったのよぉっ」
彩香はぐびぐびと、軽快に缶ビールを喉の奥に運んでいった。
「2カ月ですか……ああ、そうですか」
拓也はがっくりきてしまった。逆ナンパで2カ月。おそらく向こうは最初っから遊びの

つもりだったし、彩香さんにしても相手のことを「金持ち」としか認識していないのだろう。

ほんの少しでも、今の自分と彩香を重ね合わせて考えてしまったこと、そして彩香を恋に悩む女だと錯覚してしまったことが、たまらなく情けなかった。

「あぁぁぁぁぁっ！　くっそぉ、だんだん腹立ってきたわよっ。私みたいな超イイオンナ振るなんてぇぇ！」

だいぶアルコールがまわってきたのだろう。少し前までしおらしく泣きそうになっていた彩香が、今度はくだを巻きはじめた。

「ちっくしょぉ。私はねぇ、振ったことはあっても、振られたことなんてあんまりなかったのよ。せっかく気に入ってやってたのにぃ。……おい拓也、電卓貸せ！」

なにをはじめるのだろうと疑問に思いながらも、逆らわないほうがいいと判断した拓也は、素直に電卓をさがしだし、彩香に手渡した。

「さんく。よし！　あいつとは3回くらい会って食事しておごらせたからだいたい1回1万円で3万円。買わせた服が4万7千円……寝たのは3回だけど1回につき2回出してやったんだから1回3万でえーと……だあぁぁ！　こっちが損してるんじゃんよぉっ！　あいつ金持ちのくせにぃ」

拓也はただあきれて、怒り狂う彩香をじっと見つめた。世の中にはこういう女性もいるのだと、しっかり胸のうちにおさめておき、自分はそういう女性にだけは近づくまいと、心にとどめた。

「悔しいし、寂しいよぉ！」

彩香はふと自分をあきれ顔で眺める拓也を見て、にやりと口もとをゆるめた。

「たっくっやっくっん〜っ！」

「うわぁ！」

突然しなだれかかってきた彩香に驚き、拓也は思わず身構えた。ミニスカートからのぞく、彩香のむっちりとした太腿が妙になまめかしい。

「拓也クンてば、そんなに固くなんないでよ。硬くするのは、こっち！」

しっかりと真っ赤なマニキュアを塗られた長い指が、スウェット地の短パンの上から拓也の股間をなぞる。

「ちょ、ちょっと彩香さん！　やめてくださいよ」

「やめてくださいよ、じゃあないでしょぉ？　拓也クゥン、私のことも幸せにしてよぉ」

「彩香さん、充分幸せじゃないですか！」

「なに言ってんのよ、私、不幸のどん底よぉ」

彩香は素早く拓也の短パンを降ろし、下着の上からペニスに唇を這わせた。
「うふふふ」
はねのけることもあらがうこともできず、拓也はただうろたえていた。
「ふふふ……パンツも取っちゃおうっと！」
拓也の下着が、宙を舞う。
「うわあぁぁ」
「だーめ、私のことも、幸せにするの！」
「彩香さん、もう充分幸せじゃないですか！」
「一緒に幸せになンのよ」
彩香の唇が、ペニスを呑みこんでゆく。
口の中で微妙に舌を使い、片手で睾丸を愛撫する彩香に、拓也の萎(しぼ)んでいた下半身は、あっと言う間に熱化してゆく。睾丸の毛穴がふくらみ、肉棒に血液が集まってゆくのが、拓也自身痛いほどに感じられた。
「あくぅ……」
「ふふふ、青年のココ、大きくなっちゃったじゃん」
（だめだ！）

彩香の誘惑に負けちゃあイケナイと心で思っても、体は言うことを聞いてくれない。
「ああ」
彩香のたっぷりとした厚い舌がサオに絡みつき、勃起の表面を吸ってゆく。指はリズミカルに裏筋を刺激し、長い髪の先が尻たぶや太腿に触れる。
「ううう……もおだめだ！」
これ以上耐えていたらおかしくなってしまう。
拓也は逆に彩香へとのしかかった。
「彩香さん！　責任取ってくださいっ」
「お、やる気になったな、青年。そうこなくっちゃ」
目の前の欲望に負けた拓也は、上気した様子で彩香の服に手をかけた。

☆

（はっきり聞こう。私がきらいになったの……って）
お気に入りのスカイブルーのワンピースに身を包んだ杏子は、白いファッションサンダルをはいた重たい足を引きずり、拓也のアパートへと歩を進めていた。
（言葉を濁されたら、ごまかさないでって言おう。そしてどんな寂しい答えが返ってきても、受け入れよう）

東京ドームの帰りからずっと、頭の中で繰りかえしてきた言葉を、杏子は今も唱えた。
(私は拓也君が好き。でも、拓也君がもう私のこと好きではないのなら、きっぱりあきらめよう)
張り裂けそうに切ない思いが、涙となって杏子の瞳から溢れだしそうだ。けれども泣くものかと、杏子は心に決めていた。拓也に別れを告げられたら、にっこり微笑(ほほえ)んで「さよなら」と言うのだと。
(心が、こんなにも重たくなるなんて……)
拓也との初めてのデートは、いまだ記憶の中に鮮やかだ。そして初めてのキス、ホテルでのひと時。
(きっとあの時の私がいけなかったんだわ。私がもっと心を広く持っていれば、こんなことにはならなかったのに)
悔やんでも悔やみきれない。思えば、拓也との仲がこじれたのは、あれからだ。
東京ドームに拓也がこなかったらあきらめようと、昨日までは思っていた。そして拓也はこなかった。もうおしまいなのだという想いが、杏子の心を渇かせた。
(はっきり、聞きたい)
女はあやふやに物事が終わるのに我慢ができないものだ。ダメならダメではっきり言っ

てもらわないと、踏んぎりがつかない。中途半端に気持ちを引きずることが、杏子には耐えられなかった。
カンカンカンと自分を励ますような足音を響かせて、杏子は拓也のアパートの階段を勢いをつけて登った。
拓也の部屋は一番奥。

☆

「拓也君！」
「うわぁぁぁっ！」
杏子は目を丸くして、現実をしっかりと見据えようと努力した。脚が震えてこれ以上声が出ない。
「きょ、杏子ちゃん！　ちがうんだよっ」
パニックだった心が、しだいに乾いてゆく。おかしなもので、すべてを悟った杏子は、自分が冷静になってゆくのを感じていた。
「ノックしないで、入ってごめんなさい。わかったわ、もういいの。その人と仲よくね」
「ち、ちがうんだってばぁ！」
拓也は相変わらずパニックを起こしている。当然だ。

彩香の開いた脚を肩に乗せ、ギンギンに勃起したペニスを今まさに、秘唇の粘膜に突っこもうとしていた時に、杏子が現われたのだから。

「あらあら」

この場でのんきなのは、酔っぱらっている彩香ひとりだ。

「さよなら」

ドアを閉めて出ていこうとする杏子を、彩香をほっぽりだした拓也は、慌てて引きとめた。

「杏子ちゃん、話を聞いて！」

「いいわよ、あきらめるから。ごめんね、さよならっ！」

これ以上拓也と顔をつき合わせていると、ずっと我慢していた涙が溢れてしまう。杏子は自分の腕をつかむ拓也の手を、振りほどこうと身体を揺らした。

「お願いだよ、話を聞いて！」

「わかったから、いいってば」

「杏子ちゃん！」

ふたりの様子を、彩香は寝ころんだまましばらく見ていたが、

「んったく、しゃーないなぁ……拓也も、あーあ、ちんちん振りまわして！」

けだるそうに起きあがり、むんずと杏子の肩をつかんだ。
「彩香さん……」
「離してくださいっ！」
「あのさぁ、とりあえず中入んなよ。ね？」
黒々とした陰毛も丸出しにした、つまり下半身すっぽんぽんの彩香にのんびりとした調子で言われ、杏子の身体から急に力が抜けていった。
「私、私……」
頭の先が冷たくなり、頬が熱くなり、そして目から涙がこぼれた。

☆

「……と、いうわけ。ＯＫ？」
やけに落ち着いている彩香と、慌てて支離滅裂な拓也から聞いた話を、杏子はすぐに理解することができなかった。
「そんな……拓也君の守護精とか、不幸な女の子とか、そんなの信じられません！」
杏子の反応はきわめて正常だ。拓也でさえ、自分の身に起こったことが半分夢の中の出来事であるような気がするのだから。
「もお、わかんない子ねえ。現実なのよ」

「そんなこと、信じられるわけないじゃないですか。そのぅ……それで彩香さんでしたっけ？　あなたが幸せになるために拓也君が……なんて」
「本当なんだってばさ」
「だって、あなた、全然不幸そうじゃないじゃないですか！」
彩香にしてみると、痛いところを衝かれた感じだ。
「……っよし！　じゃあ、証拠を見せてあげるわよ」
「なにをするんですか、彩香さん！」
拓也がようやくはいた下着を、彩香は再びむんずと降ろした。
「うわぁ！」
根元をぎゅっと握りしめ、微妙に揉みたてると、すぐに拓也のペニスはふくらみ、角度と硬度を増す。
「見て！　杏子ちゃんとやら。拓也のチンポに今までこんなほくろあった？」
驚いて顔をそむけていた杏子は、彩香の声を調子につられ、そっと勃起の先に目を向けた。
「うっそ！」
黒光りした亀頭の先には、大きな真っ黒いほくろがふたつ並んでいる。杏子は拓也の肉

棒を一度しか見たことはなかったが、そんなものがなかったことは、はっきりと覚えている。

「さらにだ」

彩香は手を高々とあげ、ぴゅーと口笛を吹いた。すると、杏子の目の前になにやら煙のようなものが舞い、一瞬真っ白になったかと思うと、中から白い布きれをまとった真っ赤な髪の女の子が現われた。

「はーい、ミークでーす！　最近テレポートを使えるようになりましたぁ！　あれ？　杏子さんじゃないですかぁ」

彩香に呼ばれてやってきたミークは、状況がわからずきょとんとしている。

「あ、あ……」

突然目の前に現われたミークを見て、口をぱくぱくさせていた杏子は、拓也の胸に顔を埋め、わんわんと声をたてて泣きはじめた。

「なんなのよ、これ！　いったい拓也君どうしちゃったっていうのよぉっ」

狭い拓也の部屋に、女の体温がこもる。取り乱した杏子に声をかけようとしたミークを制し、拓也は杏子の肩に手をかけると自分のほうに引き寄せ、そっと頬に唇を寄せた。

「あ……」

そして、唇をぶつけ合う。
「んん……」
(拓也君て、こんなに積極的だったっけ?)
唇を割り舌を絡めてくる拓也の吐息を感じながら、杏子はそっと目を閉じた。
(今までの俺じゃないぜ!)
不本意とはいえ、ある程度経験を積んだ拓也は、覚えた限りのキッステクニックで、杏子を落とすつもりだった。舌を絡め、歯茎をなぞり、時に強く吸う。腕を肩にまわし、強く抱きしめる。
「あーあ、おっぱじめちゃったよ。どれどれ、見学見学……」
けらけら笑いながら手を叩く彩香を、ミークは強引に引っぱって、外へ連れだした。
「ふたりっきりにさせておいてあげましょうよ」
「じゃあ、ミークが私の酒盛りの相手すんのよ」
「OKーっ」
相変わらず高笑いをつづけている彩香を、ミークは抱きかかえるように帰路を急いだ。

☆

柔らかに隆起した乳房を、拓也は指でなぞる。

全体に上気した杏子の肌が、幼い快感に震えて波打つ。
「杏子ちゃん」
拓也は、白いセミビキニのショーツにガーターストッキングだけという姿で布団に横たわり、すっかり自分に身を任せきっている杏子の細い首筋に、唇を押しつけた。
「あはん」
拓也の首に手をまわし、杏子は甘い声をあげる。
「なんだか……拓也君すごい。前の時とはちがう人みたい」
(少しは、場数踏んだからな)
拓也は杏子の鎖骨に舌を這わせながら、心の中でつぶやいた。今日こそは、杏子と決めてやる。もう火事が起ころうが地震がこようが、彩香に呼びだされようが絶対杏子を離さない。
自分にとって一番大切なのは杏子なのだと心に誓った。
チンポのほくろなんか、くそくらえだ!
拓也は焦らないようにゆっくりと時間をかけて、杏子の上半身を愛撫する。豊満な乳房に円を描くように唇を這わせ、敏感で小さな乳首を軽くはむ。緊張で震える内腿に手を置き軽くさする——美里との経験が役に立ったようだ。

体温の上昇とともに杏子の性感は高まり、緊張はゆるんでゆく。いつの間にか表情もうっとりとしたものに変わっていた。

（キモチイイ……）

普段は固くガードされている肌を、他人の手でなぶられるのがこんなに気持ちがいいなんて思ってもいなかった。杏子はもっともっと、拓也の体を自分の身体で感じたかった。

体温を重ね合わせることができたら、どんなにか気持ちがいいだろう。考えるだけでも、ぞくぞくする。

「拓也君も、全部脱いで」

頬を桃色に染め、杏子は小さな声で言った。恥ずかしさが血液に乗り、身体中を駆けめぐってるみたいだ。胸がドキドキしてしまう。

「いいよ」

緊張しているバージンガールが震えながら口にした願いに、拓也は笑ってうなずくと、上着を脱ぎ捨て肌を密着させる。

「あったかい」

杏子は拓也の背中に手をまわして、身体を彼の肌に押しつけた。

杏子のしっとり湿った肌の隆起が、激しい心音と一緒に拓也の体に直接感じられる。

「杏子ちゃん」
杏子と拓也の心臓の鼓動が激しくなり、ぬるい体温が混じり合う。
「いいかい？」
杏子が小さくうなずく。
拓也は杏子の頰に軽く口づけをしながら、彼女の脇腹に手を添え、撫でるように下へとずらした。
「あああ……」
ウエストをくすぐられ、杏子は声をあげる。くすぐったいというよりは、なんだかぞくぞくするような、杏子にとっては初めての感覚だ。
拓也は杏子の純白のショーツに手をかけ、そっとゴムを引く。
「あはん！」
小さなショーツはするすると杏子の太腿を滑り、足首まで降りると、やがて身体から完全に離れてゆく。杏子は少し膝をあげると、ヴィーナスの丘を隠すように、ぴったりと太腿を締めた。
「恥ずかしいわ」
杏子は上気させた顔を半分、枕に沈める。潤んだ瞳と半開きの薄い唇がなんとも色っぽ

い。

（ああ、杏子……ちゃん）

ずきんと、拓也の股間が歓喜の声をあげた。下腹が突っ張って痛む。血液を一身に集め熱を帯びたペニスが、杏子に向かって今にものびてゆきそうだ。

「拓也くぅん」

杏子の甘い声に、拓也の全身がくすぐられる。

今までの拓也ならば、下半身の疼きに任せてここですぐに杏子の肉体を開こうと、躍起になっていただろう。けれど、わずかながらの経験が、彼を変えていた。

「いいんだよ、杏子ちゃん。俺、どこにもいかないよ。ずっと杏子ちゃんの側にいるから。ずいぶん君を待たせたんだ、今度は僕がいつまでだって待つよ」

血管を浮き立たせるほど勃起したため、じくじくと痛む肉棒の疼きをこらえながら、拓也は根気強く杏子に愛撫を加えた。

杏子が自ら身体を開くまで、いつまでだってさすったり撫でたり、舌を這わせたりするつもりだった。

「ああ、あくぅうう」

身体を愛撫されるたびに、杏子の体温はあがり快感は増してゆく。体温の上昇は身体か

ら力を奪い、四肢をだらけさせてゆく。
「あはん……」
敏感な首筋から乳房、そして太腿をなぶられていくうちに性感は高まっていく。頭の先が痺れるような官能を杏子は覚えていた。
(すごい。宙に浮かんでいるみたい)
高まった甘い快楽の波は身体全体にひろがり、しだいに杏子の肉体はその快感に慣れてゆく。
(もっともっと、気持ちよくなりたい！)
熱い塊が下半身に集中しているのに、杏子はとっくに気づいていた。身体の奥が疼き、杏子の牝芯を揺さぶる。はしたない汁が、杏子の奥から泉のように湧きあがり、固く閉じた太腿を濡らしている。
「あは……」
硬く尖ったピンクの乳首を、拓也が唇で挟み強く吸いあげた瞬間、杏子の膝から力が抜け、白い太腿がだらりとほぐれた。
(うう……)
拓也の股間が、爆発寸前までエレクトする。

ほどけた杏子の太腿のつけ根に、薄い恥毛がのぞく。何人かの女性のクレヴァスはすでに見ているとはいえ、杏子の恥部は、拓也にとっては格別な思い入れがある。
以前の失敗を繰りかえさないよう、拓也は注意深く幼いデルタに手を這わせた。
「ああんっ」
杏子の恥毛は、まるで赤子の髪のように柔らかで細く、手に心地よい。拓也はしばらくその感触を楽しんだ。
「うふ、うううぅぅぅ」
拓也の微妙な手の動きに、杏子の膝頭も震える。
「あああっ!」
次の瞬間、拓也の指が秘裂の中へと滑りこんだ。
「ああんっ」
ずぶずぶといやらしい音をたてながら、拓也の指は膣の奥へと沈みこむ。
(すごい。杏子ちゃんこんなに感じてくれてたんだ。愛液がしたたって、まるでゼリーの中に指を差し入れてるみたいだ)
拓也は注意深く杏子のワレメの奥をさぐった。
「あん、あはあぁぁあぁぁぁ」

クリトリスをこすられた杏子は、身体を弓なりにして震えた。手足の先まで心地よい緊張が走り、今まで知らなかった不思議な感覚が全身を貫く。
「あああん、かはっ、あああうっ」
壁の薄い拓也のアパートで大きな声をあげてはいけないと、理性ではわかっていても、杏子は、身体からあふれる快感を声にして発散しなくては、おかしくなってしまいそうだった。
拓也はたんねんに秘裂をさすった。指先がしだいに熱くなっていく。杏子の肉壁が微妙に震え、拓也の指を包みこむようだ。
(そろそろいいかな?)
拓也は杏子を刺激しないよう、できるだけ静かに、自分の肉棒に手を添えた。
「やんっ!」
感じ入って喘いではいても、杏子はしっかりと目の端で、拓也のエレクトした男根を捕らえた。
以前見た時よりも、ずっと威圧的で巨大に見えるそれに、杏子は圧倒されかかっていた。
亀頭の黒いふたつのほくろが、グロテスクな感をあおる。
(あれを、入れるのね。私の中に?)

感じる恐怖は、前と同じだった。
だけれどもちがったのは、今や杏子の肉体の隅々までもが、拓也の股間に起立した肉棒を欲しているということだ。
杏子の肉体からあふれる官能が柔肉を濡らし、甘く香りたって拓也を誘う。
（今すぐにでも、無理やりにでも杏子ちゃんに突っこみたい！）
心臓がバクバクし、張ったペニスには痛みさえ走る。
にもかかわらず、拓也はまだ落ち着いていた。手をのばしてタンスの中からコンドームを取りだし、亀頭からサオへとつけた。
（拓也君、なんて落ち着いているんだろう。ちゃんと、してくれる）
そして、杏子の両脚に手を添え、そおっと太腿を開いて腰を据えた。
「拓也君……好きよ」
杏子の声が震えている。
「俺もだよ、杏子ちゃん。大好きだ、離さない」
拓也は杏子の処女地に亀頭を添え、そのまま一気に貫いた。
「あああああんんっっ！」
狭い膣内から愛液が飛び散り、ペニスに絡みつく。

「好き、好きよ、大好きよ！　大好きよ、拓也君！」
杏子は必死でシーツをつかみ、涙を流しながらそう叫びつづけた。
「俺もだ、大好きだ」
落ち着いて、痛くしないようにしなくてはならないのに、もう拓也には自制がきかない。ペニスの疼くままに激しくピストン運動を繰りかえした。
杏子の湿り気を帯びた膣内はリズミカルに痙攣し、拓也のペニスを締めあげるように刺激する。
「ああん、ああああっあっあっ」
杏子のゆがんだ顔が、いっそう拓也の官能を奮いたたせ、腰の動きを速める。
杏子の膣内からは、ペニスにかきだされるように愛液と処女血が噴きだす。
（ああっ、痛いけど、痛いけど、幸せ……。私、拓也君とこれでやっとひとつになれたんだ……）
激しい痛みが、そのまま拓也への愛情の証明であるかのように、杏子には思えてならなかった。
（やっと、私やっと拓也君と……）
「ううううっ」

陰壁が肉棒を絞りあげる。拓也の頭が、真っ白になった。
睾丸がふくらみ、サオが震えた。
(出る……)
「杏子ちゃん、俺、イクっ……」
杏子の唇が、拓也の唇にぶつかり、強く吸いあげた。
夢中に唇をむさぼり合うふたりが気づくことはなかったが、ゴムの中に樹液を吐きだした拓也の亀頭からは、ほくろがひとつ消えていた。
「私、本当に幸せ」
杏子は膣内で震える拓也の鼓動を感じながら、小さくつぶやいた。

第6章　守護精霊ミークを救え！

ミークはおろおろしていた。
杏子はドキドキしていた。
彩香はあまりなにも考えていなかった。
そして拓也は、不安を隠すように、から笑いを繰りかえしていた。
「ははは、3人ともそんなに深刻にならないでよ。なんとかなるよ、うん。今までだって俺の人生、なんとかなってきたんだから」
「それは、拓也さんの守護精ががんばっていたからです。いま拓也さんに守護精はいないんですよ」
ミークが、落ちこんだ声で言った。

4人は彩香のマンションのリビングで、誰か不幸な女の子が『ラブリー心霊相談所』のインターホンを鳴らさないかと、半日待ちつづけていた。
今日は、ミークが現われてからちょうど1週間。拓也の試練の最終日だ。
「ねえ?」
杏子が、言いにくそうに声をあげた。
「今までも、こうやってここで不幸な女の子が現われるのを待ってたの? 今日中にもうひとり不幸な女の子を見つけて幸せにしてあげないと、拓也君はその……あの……」
「二度とザーメン噴きあげられないね」
彩香が言った。
「それに、守護精も一生就かなくなっちゃいます」
とミーク。
「でも、今日は動かないほうがいいんです。私の中の精霊としての勘が、そう言っているんです。待てって」
「ねえ、今まではどうしてたの? つまり、私以外の不幸な女の子はどこで見つけてきたのよ」
「あとのふたりは、私が見つけてきたの。ひとりは大学の後輩で、もうひとりは電車の中

でね。そう言えば、杏子ちゃんの幸せのきっかけも、私が酔っぱらったからよね。なーんだ、全部私のおかげじゃない、はっはっは」
　彩香ひとりが、笑い転げた。
「なによなによ、みんな暗くなってたってしょうがないでしょぉ。私たちが不幸背負ってるみたいな顔して、どうすんのよ！」
「彩香さんはいいですよね」
　拓也の声は暗くなる。
「どっちみち、不幸になるのは俺なんですから」
「な、なによ。人があんだけ苦労してやってたのに、その小馬鹿にした態度！」
　彩香は、ソファから立ちあがって拓也をにらみつけた。
「あんたいったいなにをしたのよ。え？　言ってごらん、あんた自分が不幸にならないためになにをした？　待ってただけじゃない、文句言ってただけじゃない、なんにもしてないじゃない！」
「ふざけるな！」
　拓也も、立ちあがった。
「もともと、彩香さんが原因なんじゃないですか？　彩香さんが変なことするから、ミー

クが出てきちゃったんだ。だいいち、彩香さん、俺の不幸をなんとかしようと真剣に考えて不幸な女の子見つけてきたわけじゃないでしょう？　全部偶然じゃないですか。それでなければ、俺のことおもしろがってただけだ！」
「なんですってぇ！」
「ちがうと言うんですか！」
今にも殴り合いをはじめそうに殺気だったふたりの間に、杏子が割って入った。
「ふたりともそんなケンカしている場合じゃないでしょう！　お願いだから、やめてよ」
にらみ合ったふたりとその間で困ったような顔をしている杏子を、ひとり静かに見つめていたミークの瞳が、潤んでいた。
そして、
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっっ」
大きな泣き声とともに大粒の涙を流して、ミークは拓也に抱きついた。
精霊としての白い衣は、サテン生地のようになめらかに拓也の体にまとわりつく。
「ミーク……」
「ミーク、そんなに泣かないでよ」
「だってぇ、だってぇ！　うわあぁん、わあぁぁぁん」

拓也と彩香は、目を合わせてため息をついた。ミークに泣かれてしまっては、ケンカする気にもなれない。

「おい、そんなに泣くなよ、ミーク」

拓也はミークの顔を覗きこんだ。緑の瞳は大洪水だ。

「なあ、ミーク」

「だってぇ、だってぇ、ぜーんぶ私が悪いんだもん。私が拓也さんの守護精なんかにならなければ、ううん……落ちこぼれのくせに守護精になろうと思わなければ、こんなコトには……あーん、あーん」

「そんなことないよ、ミークはがんばったじゃん」

慰めるように、彩香が言う。

「ほら、不幸な女の子の守護精に話を聞いたりさ、淫魔との戦いも、がんばったじゃん」

「あんなの、なにもしてないのと同じコトですぅ！」

泣きじゃくるミークをソファに座らせながら、拓也も腰を降ろし、ふと考えた。

このまま不幸な女の子が現われずに終わってしまったら、自分は一生射精ができず、さらに守護精が就かないというのは聞いていた。

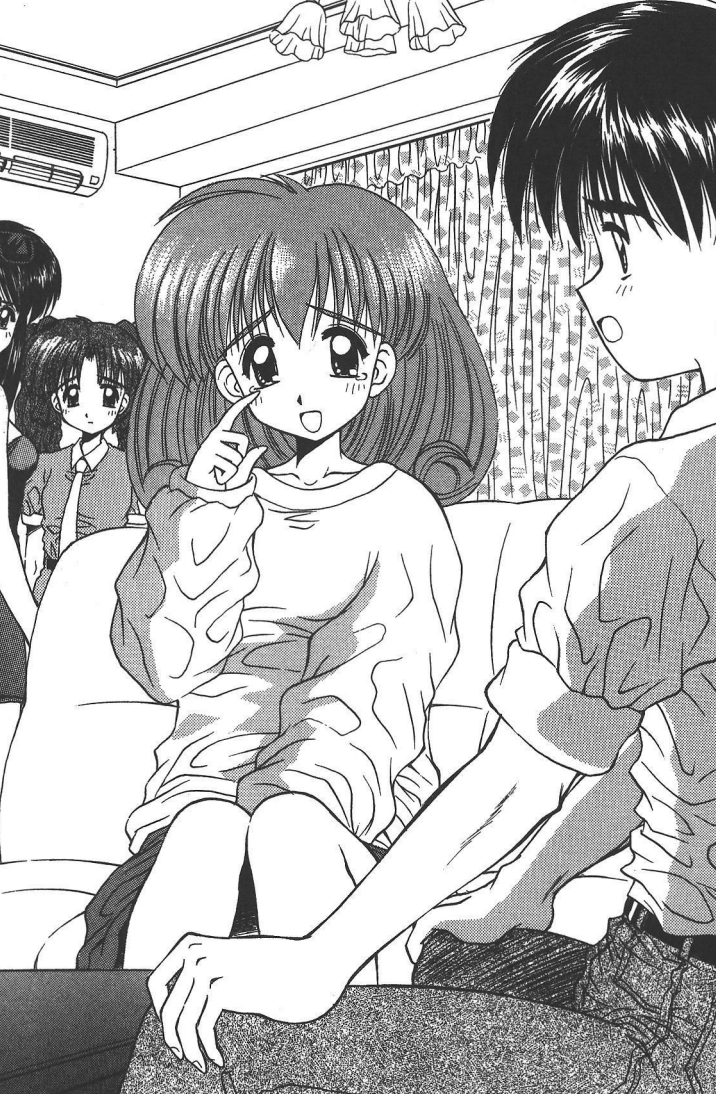
だが、ミークは、ミークはいったいどうなるのだろうか、と。

「なあ、ミーク」
拓也は悪い予感を振り払うように、できるだけ落ち着いた優しい声で聞いた。
「もしもだよ。万が一、不幸な女の子が現われなかったら、俺がその子を幸せにしてやることができなかったら、ミークはどうなるんだ？」
一瞬、その場の全員が息を呑んだ。
（確か、会社組織だって言ってたよなぁ。ということは降格か首か減俸か。まさか、まさか……）
悪い予感ばかりが、拓也の胸をよぎる。
（まさか、いや、そんなことはないよな。まさか）
「拓也さんのほくろが、消えなかったら……」
静かに涙を拭って、ミークが言った。
「私、消えます」
（まさか！）
拓也は、ただミークと瞳を合わせていた。ミークの瞳は、なにかを決意したように、強い光を放っている。
「ちょ、ちょっとぉ、冗談でしょう？　なによ、その消えるってさぁ」

彩香が、いつもの元気はどこへやら、おろおろした声で言う。
「消えるってまさかさぁ、死んじゃう……ってことじゃないよね？」
「精霊は、死ぬという観念がないんです。消えるだけです。いわば、存在の消滅です」
ミークはその場にいる全員の顔を、ゆっくり眺めて言う。
「海の守護精霊……人魚姫として人間界に伝わっている精霊の最後と同じです。もともと私たちは自然界から生まれたんだから、失敗して役目を果たせなくなったら、自然に帰るのが掟なんです」
「人魚姫は、最後は泡になっちゃったのよね」
杏子の声は、震えている。
「確か、王子様に愛されなくて、それで泡になって消えちゃったのよね」
ミークは小さくうなずく。
「ウソだろぉ？　そんな……やばいじゃないか！」
拓也は、青い顔でミークの肩を抱いた。
「俺がインポになるだけならいいよ。ミークが消えるなんて」
「決まりですから」
ミークの緑色の瞳が潤む。

「冗談じゃないわよ、そんなこと！　こーしちゃいられないわ。私、不幸な女の子をナンパしてくる」
喉の奥から絞りだすような声で彩香が言い、大慌てで玄関に出て、高いヒールの靴をはきかけたが、思い直して、靴箱の奥から運動靴を取りだした。
「あなたたちはここで待ってるのよ！　私は不幸の塊みたいな女の子をさがしてくるからね。いいわね、ミーク、それまでの辛抱だからね！」
「彩香さん、私もいくわ」
杏子も立ちあがり、ドアへと向かう。
「拓也君、ミーク。私もがんばって不幸な子連れてくるから」
バタン！
マンションの廊下を走るふたりの足音が、しだいに遠ざかる。
「ミーク、なんだかとってもうれしい気分です」
拓也を見て、ミークは軽く微笑(ほほえ)んだ。

☆

彩香と杏子が出かけてから、すでに2時間あまりがたとうとしていた。窓の外から射しこむ光が西に傾き、学校帰りの小学生たちの無邪気な声があたりに響く。

「あああ、もう！　ふたりともなにやってんだよ」
拓也はいらいらと部屋の中を歩きまわり、落ち着かない。
「陽が沈むまでに不幸な女の子をなんとかしなけりゃあ、俺は……」
ミークは瞳を伏せ、ソファに浅く腰かけたままの格好で、つまらなそうに赤い髪をいじっている。そんなミークに、拓也は詰め寄った。
「ミーク。なんとかならないのかよ。たとえばさ、もう1週間延長するとか」
ミークは小さく頭を振る。
「じゃ、じゃあさ、ほくろを手術で取っちゃうとか」
「意味ないです」
拓也は大きくため息をつくと、カーペットの上にぺたんと尻を降ろし、頭をかきむしった。
「ああ、もうだめだぁ」
「あきらめないでください、拓也さん」
ミークが、強い調子で言う。
「私の精霊としての勘が言ってるんです。ここにいればいいんです」
「おまえみたいな落ちこぼれ精霊の勘なんて、当てになんのかよ」

拓也のいやみにミークは答えず、その代わり大きな瞳を拓也に向けた。
「拓也さん。精霊は消える時に、ひとつだけ願いを出すことが許されているんです。人魚姫は、王子の幸福を祈って消滅しました。私は、拓也さんの幸福を祈るつもりです。もしかしたら、強い力を持った守護精が、拓也さんに就いてくれるかもしれないでしょう？そうすれば、時間はかかるけどもしかしたら……」
「だって、俺にはもう、一生守護精が就かないんじゃないのか？」
「消える時の最後の願いは、聞き入れられる可能性が高いんです。地位の高い……部長クラスの守護精が就けば、拓也さんのことをなんとかしてくれるかもしれない。何カ月かかるか、何年かかるかわからないけれども、射精だって、できるようになるかも」
「そんな！　じゃあさ、最後の願いで、ミークが消えないように祈ればいいんだよ。そうすればさ、またミークががんばってさ」
ミークは、少しだけ微笑んで拓也を見て、それから小さく言った。
「人魚姫は、王子を刺してその血を浴びれば、消えずにすみました。けれども彼女は、自分が消え、王子が幸せになるほうを選んだんです。私が消えないためにはたぶん、拓也さんの残った運すべてを奪うことになります。それだったら、私が消えてしまったほうが、拓也さんのためなんです」

「ミーク……」
　拓也は、ミークの小さな身体を強く抱きしめた。
（ミークは、俺のために消えようとしてるんだ）
　ミークの身体はとても小さく、ともすれば腕の中でつぶれてしまうのではないかと、拓也には感じられた。燃えるような赤い髪からほのかに植物的な香りがたちあがる。
「ミーク……消えるの、怖くないのか？」
「怖いです」
　拓也の腕の中で、ミークはほんの少し震えた。
「怖いですぅ。でも、でもそれが一番いいんだもん。人魚姫は消えてしまったけど、王子様に出会えて幸せだったと思います。だから私だって」
「ミーク」
　涙に濡れた緑の瞳が、拓也の目に飛びこんだ。
（ミーク。そうか、俺のために決意してるんだ。俺のために）
　薄く幼いサクランボのようなミークの唇に、拓也はそっとキスをする。
「うう」
　ミークは驚いたように目を丸くしていたが、すぐに目を閉じ、拓也の唇の感触を楽しん

だ。
　ミークの唇は薄く、絹のようになめらかだ。拓也はそっと唇をこじ開け、舌を差し入れる。ミークの口の中はさらさらとしていて甘い。
（これが精霊の、キスなのか？）
　壊れ物に口をつけるように、拓也は注意深く舌を動かした。
「うふ……んん」
　やがてされるがままだったミークの舌が、拓也の口内に押し入った。薄くざらついたネコのような舌は拓也の歯茎をさぐり、上顎を撫でる。
「ううううぅ」
　ミークの舌先から信じられないような甘い快感が、拓也の全身を貫く。唇を重ねているだけなのに、まるで直接ペニスをなぶられているような感覚だ。
　唇をそっと離した時、拓也の下半身は燃えたぎっていた。
「ゴメン。俺、つい」
　急に恥ずかしくなり、頭をさげる拓也にミークは優しく微笑み、
「いいんです。だって私拓也さんのこと、ずっとずっと見ていたんですよ。人魚姫が王子を愛していたように、私も拓也さんのこと、好きです」

と言ってから、身体に巻きついていた柔らかい布を、肩から滑らせて落とした。
透き通るように白いミークの裸体が、拓也の目にさらされる。淫魔との戦いの時に少しだけ見えたことがあったが、あの時は状況が状況だけに、拓也はなんとも思わなかった。
しかし、改めて見るミークの身体は本当に美しいと、拓也は息を呑んだ。
裸体は幼く、おそらく人間でいえば13～14歳くらいの少女の身体に近いだろうか。全体にふっくらとしているが、どことなく華奢な感がある。
細い腕、細い脚、乳房はようやくふくらみかけたといったふうで、腰も小さい。下腹から股間へのラインは少し骨張っていて、女らしいというよりは、少年のそれを思わせる。
恥毛はほとんどなく、うっすらとピンク色をのぞかせるワレメが、縦にはっきりと入っている。
(俺、ロリコンだったっけ……？)
女らしいつやとはちがう妖しい色香が、ミークの身体から発せられ、拓也の本能を刺激する。つやつやとした肉体はたおやかで、少し触れただけでも傷ついてしまいそうなほど頼りなさげだ。
(なんてきれいなんだろう)
心の中でのつぶやきに、ミークが答える。

「そんな……きれいだなんて」
そうか、ミークは自分の心の中を読めるんだよなと、拓也はにっこり笑った。
「じゃあ、俺が今、どれだけミークのこと、愛おしいと思ってるか、わかるんだろ？」
「はい。拓也さん今、ミークのこと、抱きしめたいと思ってます。ミークも、拓也さんに、抱きしめられたいです」
拓也は、恥ずかしそうにはにかむミークの瞳を見つめたまま、手だけを動かして自分の上着を脱ぎ捨てた。それからミークの小さな手を取り、隣のベッドルームに導いた。

☆

「あんっ」
ベッドの上に座ったミークの裸身が、白いシーツの中に沈む。
「拓也さん、あの……私」
「なにも言わなくていいよ。俺は人間だから心を読むなんてことはできないけど」
ミークに向き合ってベッドに座りこんだ拓也は、彼女の揺れる瞳を見つめる。
「君の仕草や表情で、心を読む努力をするよ」
ミークは拓也の背中に、強く腕をまわした。
「ミーク」

ミークの肌はとろけてしまいそうなほど繊細で柔らかく、とても冷たい。拓也は初め、その冷たさに驚いていたが、肌を重ねているうちに、冷たかった肌が温もりを帯びていく。そしてすぐに、ミークの身体は拓也とまったく同じ温度を持った。

「私たちには、体温なんてないから。同化するんです」

ミークが静かに言う。

拓也は、ミークを固く抱きしめていたが、そこにミークの確かな体温を感じず、まるで自分自身を抱きしめているかのような不思議な感覚を味わっていた。

「ミークが、いないみたいだ」

「確かにいるの。でも、私の心が拓也さんとおんなじになろうとしているの。だから、いないみたいに感じるのかもしれない」

拓也は自分にしがみついているミークの身体を離してベッドに横たえると、存在を確かめるように、ゆっくりと肌の隆起を手でなぞる。

「あん！」

ミークの白い肌は、拓也が這わせた手の動きにしたがって紅みを増し、燃えていく。ピンク色の唇からは甘い吐息がもれ、小さな乳首は硬く尖っていく。

「んんん、あはっ、ああ」

拓也の手はミークの肩から乳房のふくらみを撫で、そして細いウエストをたどる。シルクのようになめらかなミークの肌は、確かに触れているのに存在しないようにしか、拓也には思えない。手が、肌の中に溶けこんでしまうようだ。

(これが、精霊なのか?)

ごく抵抗のない水面を、静かに撫でているような感じだ。それでいて、ぞくぞくする快感が、指先から脳をダイレクトに刺激する。

拓也はそっと、唇を乳首に近づけ、軽く吸った。

「ああっっ!」

身体を弓なりにして、ミークは悶える。拓也はまるで飴玉のように甘く、グミのように柔らかいミークの乳首に舌を這わせつづけた。舌で転がるその可愛らしい小粒は、肌とちがって存在感にあふれている。舌先にひろがる不思議な甘さが官能的だ。

「可愛いよ、ミーク」

「拓也さんも、素敵ですぅ」

喘ぎながら、ミークがつぶやく。

拓也は手を静かにミークの股間へと移動させる。つるつるとしたヴィーナスの丘を渡り、小さなワレメへと指をのばした。

「あはん！」
そっと秘裂を割り、膣の中へと指を滑りこませる。
(熱い！)
ミークのワレメの中は、驚くほど熱くたぎっていた。そこが身体の他の部分とはまるでちがうことに、拓也は驚きを隠せない。
「拓也さんが、好きだから……。優しい拓也さんのこと、ミーク、大好きだから」
息を荒げながら、ミークがささやく。
「こんな俺の、どこが？」
「拓也さん、とっても素敵。優しくて、ひたむきで、一生懸命で。ミーク、拓也さんのこと、ずっとずっと守護していたかった」
大きな瞳に涙が溢れる。
「拓也さん、本当に素敵です。少し優柔不断なところもあるし、ちょっぴり情けないところもあるけど、心が純粋できれいだった」
拓也は、ミークのクレヴァスの奥をさらにさぐった。小さな小さなクリトリスをつまみ、幼い花弁を指の先でそっと刺激する。すると奥の泉から水のようにさらさらとした愛液がしたたり、拓也の指に絡みつく。

ミークの髪の色と同じで、燃えるように赤い花びらが白い肌に映える。
「つくりは、人間の女の子と同じです。人間は精霊のコピーだから……」
潤んだ瞳で、ミークは拓也に微笑みかけた。
拓也が指先をクレヴァスにそって、蜜壺から溢れる蜜を塗りたくるように動かすと、ミークは頬を紅くして身体をよじり、足先をピンとのばす。
苦痛と快感の中間をさ迷うように眉をひそめ、口を半開きにして喘ぐミークを、拓也は心の底から愛おしく思い、唇をヴァギナに近づけ、舌をのばした。
（!!……）
舌先に絡む愛液は、蜂蜜のように甘く、蒸留水のように軽い。拓也は両手でクレヴァスを割り、剝きだしになった女陰を舌で舐めまわした。
「ああん、あはっ、うくうぅぅ」
シーツを固く握りしめたミークは、駆けあがる快感になす術もない。
拓也は、どんどんと溢れてくる甘い蜜を、音をたてて吸いあげた。舌先はクリトリスを舐め、肉ビラを口に含む。スズランの花に似た香りが鼻を衝き、拓也は自分が蝶かミツバチにでもなったように感じてしまう。
蜜は媚薬のように舌に心地よい愛撫を加え、拓也の全身にけだるい快感を与える。

「すごい、すごい気持ちが……いい……」
ミークは髪を振り乱し、頭を枕にこすりつけながら拓也のなすがままになっていた。ミークの喘ぎ声が拓也の耳には、竪琴の響きに聞こえる。それは美しく透明な響きだが、どこか、はかない女のすすり泣きにも似ていた。
「ミーク。俺もミークのこと、好きだよ」
拓也は、はっきり声に出してそう伝えた。
「うれしい！」
ミークはとぎれとぎれの声で何度も叫ぶと、のばした手を拓也のジーパンにかけた。
「自分で、脱ぐよ」
ぐったりとベッドに沈みこむミークの紅潮した身体を見降ろしながら、拓也はジーパンを降ろした。はみ出るほどに股間のふくらんだ下着を、ミークが凝視しているのがわかり、拓也は少しはにかんだ。
「そんなに見られると恥ずかしいよ、ミーク」
ミークも口もとをゆるめた。
拓也は下着を降ろし、興奮にいきり勃ったペニスを取りだした。精霊の身体全体から発せられる妖しい官能に、ペニスは静脈が浮きでるほどに反応している。

美しく壊れやすいものに、本当に自分のグロテスクな肉棒を挿入していいものなのか、拓也は少し不安になる。
たおやかなミークの肢体を、汚してしまうのではないだろうかと。
「拓也さん。きてください」
ミークが微笑みながら、拓也に両手をのばした。
明るく無邪気で、そのうえ誘うような笑顔に引きずりこまれ、拓也はベッドに横たわったままのミークの開いた脚の間に腰を据えた。
「拓也さんと、ひとつになれるんですね」
拓也はうなずいて、ペニスの先をミークの肉の間に差し入れ、一気に貫いた。
「あああはぁっ!」
ひときわ高く、ミークが泣く。
「おおお!」
拓也のペニスを、無数の細かい管が微妙に締めあげる。
(これが、精霊のセックスなのか!)
ミークの膣内は熱く、そして拓也が今まで経験した女性たちとは、まったくちがっていた。広い空間から細くぬめった無数の触手じみたものが次々にペニスに絡みつき、こすり

あげようとしている感じだ。
触手はゼリーのように柔らかで、それでいて弾力に満ちている。たっぷりと水分を含んだスポンジのようにジューシーだ。それが、拓也のペニスを巻きあげては消え、消えるとすぐに次の触手が襲ってくる感じだ。
「うくぅぅ」
拓也が腰をまったく動かさなくても、膣壁のほうがうねりをあげ、ペニスをしごきあげる。睾丸に流れ落ちた愛液までもが、意志を持った生き物のように、拓也に快楽を与える。
(なんてすごいんだ。こんな感覚が、この世にあるのか?)
全身が男根になり、ミークの身体の中に取りこまれてしまったのではないかと思うくらいの一体感が、拓也には心地よかった。
快感がペニスだけではなく全身を支配し、脳味噌がとろけそうだ。
「ああ、拓也さん! ミーク、とっても幸せですぅ」
ミークの身体が、淡い光に包まれていた。
「拓也さんと一緒になれて、本当に幸せ! ミークみたいなダメ精霊を好きって言ってくれて……本当にうれしいっ」
光はどんどん強くなってゆく。それとともに、ペニスを愛撫する膣壁のうねりが強く、

激しくなっていく。
（俺も、ミークが幸せなら、俺もうれしい）
深い官能の中で声を出すこともできない拓也は、心の中でミークに語りかけた。
（ミーク、消えちゃいけない。俺はどうなってもいいから、消えるな！）
拓也は上体を倒し、ミークを強く抱きしめた。
光がまぶしいほどに強さを増した。ミークの姿が見えないほどの光量に、拓也は思わず目を閉じた。
「拓也さん！　人魚姫は王子様とセックスできなかったけど、ミークはできたんだもん！もう思い残すことなんて、ない……」
部屋全体がまばゆいばかりの光に包まれた。
その瞬間、拓也のペニスはめくるめく快感の中で激しく樹液を噴きあげた。
「ミーク！」
拓也の最後の記憶は、頬に感じた温かな唇と不思議なほど柔らかく心地よい抱擁の感触だった。

☆

「拓也君、拓也君てばぁ！」

泣きだしそうな女の声が、拓也の心の底に届く。心地よい響きだ。
「おい青年。起きろぉ！」
次に拓也が感じたのは、別の女の怒ったような声と頭への衝撃だ。
「うわぁ！」
慌てて目覚めた拓也の目に映ったのは、心配そうに自分を覗きこむ杏子と、スリッパを片手に立つ彩香だった。
「拓也君てば、いったいどうしちゃったのよぉ！　ずっと気を失ってたから、心配しちゃったのよ」
杏子がワァワァ泣きながら、拓也の体に腕をまわした。
拓也はぼんやりとした頭で、どうして自分がこうなったのかを必死に思いだそうとした。
「あ！　そうだ」
拓也は杏子の肩を抱き、それから彩香に目を向けて言った。
「ミークは！　ミークはどうした」
「いないのよ、どこにも」
彩香が、静かに応える。
「不幸な女の子、見つからなかったのよ。それでこっちの様子はどうかと思って帰ってき

てみたら、杏子ちゃんが泣きながら素っ裸のあんたにすがってるじゃない。ミークはいないし、いったいなにが起こったのよ！」

「ミーク、不幸な女の子をさがしにいったの？」

杏子がおそるおそる拓也に問いかける。

「いや、ずっと一緒だったけど……」

奇妙な静寂が3人を支配した。冷たい空気が流れる。

「まさか、まさかミークはもう……」

拓也が声を詰まらせる。

「もう……」

その先を言うなというように、杏子は唇を拓也にぶつけた。

杏子の頬を流れる涙が、拓也の唇に染みる。

彩香は大きなため息をついて、その場にしゃがみこんだ。

3人はしばらく無言で、それぞれに思いを馳せていた。

どれくらいの時がたったろうか。

「ウソッ！」

急に彩香が素っ頓狂な声をあげ、拓也の股間に顔を埋めた。

「うわぁ！　ナニするんですか彩香さん、こんな時に！」
「おかしいわ！　まだ外は明るいのに、ミークがこんなに早く消えちゃうなんてあり得ないわ」
彩香は、啞然としている杏子や拓也を無視し、一心に拓也の男根を舐め、口の中で転がした。
「おおおお」
彩香のスーパーテクニックに、拓也のイチモツはあっと言う間にエレクトする。
「ちょ、ちょっと彩香さん！　気でもおかしくなったんですかぁっ」
顔を真っ赤にしている杏子のほうを見て彩香はにやっと笑うと、黙って拓也の亀頭を指差した。
「杏子ちゃん。青年のここ、見てみ？」
「え？」
覗きこんだ杏子が、声をあげて笑いはじめた。彩香もはじめはくすくすと、そのうち大きな声をあげ、腹を抱えて笑った。
「な、なんなんだよ」
気になって覗きこんだ拓也も、泣きながら笑い転げた。

「ちくしょー！　ハハハハ、チクショォッ」
拓也のペニスの先はつるんとしていて、染みひとつない以前の状態に戻っていた。

エピローグ　歴史は繰りかえす!?

杏子のしなやかな肢体を、拓也は抱きしめた。
「ああん、拓也くぅん」
快感に身を任せることを覚えた杏子が、身体をよじって喜びをあらわにする。
そして恥ずかしそうにはにかむと、そっと拓也の耳朶にささやく。
「ねえ……彩香さんからいただいたアレ、使ってみようよ。持ってるんでしょう？」
(女は、変わるよなぁ)
拓也は慌てながらもうなずき、ちょっと待ってと杏子の額に唇を寄せると、押入の奥からファンシーな紙袋を取りだす。
「本当に使うの？」

「うん……使ってみたいの。おかしい？」
「いや。そんなことはないよ、うん」
紙袋の中から拓也が取りだしたのは、ピンク色をしたバイブレーターだ。
——ふたりの幸せのために、プレゼントだよ——
にやにやした彩香に渡された紙袋の中身を見た時は、ふたりとも仰天したものだった。
まさか実際に使う日がくるなんて、その時のふたりには考えられなかったのだが。
「電池は……入ってるな」
そのバイブレーターは、直径2センチ、長さ18センチほどで、ペニスというよりもなにかの動物をかたどってつくられているため、グロテスクさはない。表面はシリコンと合成樹脂を混ぜてできていて、握ると弾力があり、少しべたべたする。
クリトリスを刺激するフリッパーはついていない、ストンとした形のごくシンプルなものだ。コードレスで、スイッチにより強弱を3段階にわけられるようになっている。
——初心者向けよ——
彩香はそう言っていたっけと、拓也は思いだしながら、スイッチをオンに入れた。
バイブレーターは高い音をあげ、軽く振動、さらに首をうねらせる。
「なんか、すごぉい」

杏子は期待に目を輝かせて、拓也の手の中で動く玩具を見つめた。
「よし！」
杏子をあお向けにして脚を開かせると、拓也は濡れそぼった秘裂にスイッチを切ったバイブレーターをゆっくりと挿入する。
「ああああ！」
バイブレーターは思った以上に簡単に、杏子の肉体に呑みこまれていく。
「痛くない？　杏子ちゃん」
「ん……だいじょうぶ。でもなんだか、冷たい」
コントローラー部分だけを露出し、バイブレーターはすっかり杏子の秘裂におさまってしまった。まるで、杏子の股間にピンク色のペニスがついているように見え、拓也を興奮させる。
「動かすよ」
杏子は緊張した面もちで、うなずく。
拓也はつばを飲みこみながら、コントローラーのスイッチをオンに入れた。
「あはっ、あああんんくうぅぅ」
バイブレーターの振動音が、杏子の膣内で低いうねりをあげる。

「あん、あああ！　カハァッ」
杏子は手足をピンと突っぱり、腰を左右にくねらせた。
「ど、どうなの杏子ちゃん。キモチイイの？」
「あは、な、なんかスゴイ！……か、か、……かきまわされてるって、そんな、そんな感じで……ああんっ！」
拓也の握るコントローラー部分にも、かなり強い振動がある。
バイブレーターは杏子の膣内で細かく振動を繰りかえしながら、かきむしるように頭をうねらせる。
愛液が吹きあがり、拓也の手を濡らす。
拓也はバイブレーターの強弱を、もう1段階あげた。
「アアアアッ！　クフウアァァァ」
杏子は高い声をあげ、身体を弓なりに反らして、拓也の腕を強くつかんだ。
「スゴォォイ！　ああん、すごいよぉぉ」
拓也はしっかりと、コントローラー部分を押さえた。しっかり握っていないと、バイブレーターは、それ自身の回転と身をよじる杏子の動きとで、すぐに膣から飛びだしてしまいそうだ。

「イイ！　イイよぉぉ、あん、だ、だめぇぇぇ！」
　全身を紅潮させて顔をゆがませる杏子の痴態に、拓也は息を呑んだ。ビデオなどではおなじみのシーンだが、実際にバイブレーターで乱れる杏子の姿など、想像すらしたことがなかった。
「自分で、してごらん」
　拓也は杏子の手を取って、バイブレーターを握らせた。
「そ、そんなぁぁ、恥ずかしいっ」
「いいから」
　杏子はしっかりとバイブレーターを握りしめ、拓也の目の前でそれを、上下に動かしはじめた。
「あああんん！」
　杏子は、はじめはゆっくりと、しだいに速くバイブレーターを出し入れする。
　出し入れのたびにバイブレーターは膣内から愛液をかきだし、しぶきを飛ばす。シーツは濡れ、広い染みをつくっていく。
「スゴイよ、杏子ちゃん」
「ああん、手が、手がとまらないよぉ、気持ちいいよぉ」

拓也は乱れる杏子を見ながら、自分のイチモツに手をのばした。エレクトした肉棒は、石のように硬く、火のように熱く、ぴくぴくと痙攣している。
「杏子ちゃん、すごくエッチだよ。すごいよ」
「あん、そんなに見ないでぇ」
「杏子ちゃんのそんな姿見てたら俺……たまらないよ」
拓也は、ペニスを握りしめた手をゆっくりと上下に動かす。ひとりでオナニーするのともセックスするのともちがった快感が、背筋を駆けあがる。
「ああ……杏子ちゃん、いやらしいや」
「そんな、そんなこと言わないでぇ」
「すごくいいよ」
「あん、私も」
杏子の視線は、ペニスをしごく拓也の手もとに向けられている。ごくりとつばを飲みこむ音が聞こえた。
「ねえ、やっぱりバイブだけじゃイヤ」
恥ずかしそうに、杏子が言う。
杏子は身体を曲げ、口もとをペニスに近づけた。そして握りしめたままの拓也の手をそ

っと除ける。
「杏子ちゃん」
「うふふ、させて」
杏子が小さな口を目いっぱいにひろげ、拓也のいきり勃った男根を喉の奥に呑みこむ。
「んふ、んんんん、むうぅぅ」
「おおっ！」
どこで覚えたのか、杏子は口の中で舌を使い、サオをぺろぺろと舐めまわす。唇を微妙に動かすさまも、拓也の官能を奮いたたせる。
「きょ、杏子ちゃん」
「んふふふふ、むむんぬううううう」
ちゅぱちゅぱとペニスに唾液の絡む音が響く。杏子は時折上目づかいに拓也のほうを見て、誘いかけるように笑みをつくる。
「すごいよ、杏子ちゃん」
フェラチオだけで拓也の白濁液を噴きだしてしまおうというかのように、杏子は激しく唇を上下にしごく。
「ううう」

たまらず、拓也は上半身を大きく反らせた。

秘裂にバイブレーターを差し入れたままの杏子は、自らも悶えながら、拓也の股間を必死でしゃぶる。ふたりの間に奇妙な連帯感が生まれ、空気の色まで変えていくようだ。

「杏子ちゃん！」

拓也は爆発寸前の肉棒を慌てて杏子の口から抜いた。

「やん、どうしたの？」

「すごい気持ちいいけど、やっぱり俺、杏子ちゃんの中で気持ちよくなりたいよ」

「あん……」

「バイブレーター君には、ちょっと我慢してもらってさ」

拓也は杏子の上気した頬に軽く口をつけ、それから杏子の膣内に呑みこまれたバイブレーターに手をかけた。

「あああんっ」

じゅぼぼぼぼと音をたてながら、バイブレーターが膣内から引き抜かれた。ピンク色のバイブレーターには杏子の愛液が絡みつき、ところどころ白濁している。

「すごいや杏子ちゃん、こんなに濡れて……」

「恥ずかしいわ」

「恥ずかしがることないよ、可愛いよ、すごく。エッチだ」
「エッチなの、きらい？」
「大好きだよ。わかってるくせに」
杏子はにっこりと笑い、そのあと頬を赤らめて言った。
「あのね、彩香さんから教えてもらったことがあるんで、試してみたいの」
バイブレーターをティッシュで拭いながら、拓也は身をくねらす杏子を見つめた。
「なにを教えてもらったんだ？」
「あのね……」
杏子はしばらく言いよどんでいたが、やがて拓也の耳にそっと口もとを当て、小さな声でささやいた。
「なに？　んんん、えええっ！」
杏子の話を聞き、拓也は驚いて思わず叫んだ。
「ちょっと！　彩香さんがそんなこと言ったのか」
「ん……やっぱり、エッチすぎる？」
「いや、そんなことはないけど」
アナルにバイブを挿入してエッチすると気持ちいい——そんなことを純情な杏子に教え

てどうするんだ彩香さんはと、拓也は心の中で声を大にした。
「恥ずかしいの、思いきって言ったのに。拓也君たら、そんなビックリしたような顔しなくってもいいじゃない」
杏子はちょっとすねたような表情で拓也を見つめる。よっぽど恥ずかしかったのだろう、耳まで真っ赤に染まっている。
「ごめん、杏子ちゃん。ちょっと驚いただけだよ」
本当は、かなり驚いていた。
「やってみようか？　その代わり、辛かったら言ってくれよ。すぐにやめるからね」
期待と不安の入り交じった表情で、杏子はゆっくりとうなずいた。

☆

たっぷりとサラダ油を塗りたくったバイブレーターを、拓也は杏子の尻に当てた。
杏子は四つん這いになって拓也に白くて丸い尻を向け、身体中を緊張で固くしている。
「そんなに緊張してたら、入らないよ。ムリしなくていい。横になって」
拓也は、杏子に優しく言った。杏子は恥ずかしそうに笑い、布団に横たわり脚を開く。
少しは見慣れたヴァギナとちがい、杏子のアヌスは拓也にとって未開の地だ。ちょこんとした小さなくぼみが、ひくひくと震えているのを見るのは、思ったよりずっと気分がよ

く、官能的だった。
「いいかい？」
拓也の声に、杏子は黙ってうなずいた。
拓也はまず、注意深く唾液で濡らした人差し指を杏子のアヌスに近づけた。くぼみの中心に触れると、そこはぎゅっと固く閉じてしまう。
「杏子ちゃん！」
「ゴメン、緊張しちゃって」
杏子は肩を揺らしながらゆっくりと息を吐きだした。拓也は再びくぼみの中心に人差し指を押し当て、ゆっくりと差しこんだ。
「ああっ、あああぁ！」
唾液が潤滑油の役割を果たしたのだろう。人差し指の第一関節くらいまでを、杏子のアヌスは簡単に呑みこんだ。
「あああぁ……」
杏子の背筋をなにか冷たいものが駆け抜けていく。
「杏子ちゃん、少し入ったよ」
杏子のアヌスは温かくて柔らかだ。拓也は指をゆっくりと動かし、これ以上の侵入は許

さないと固く締めつけたアヌスをほぐしていく。
「んふぅぅ、くうううぅぅぅ」
「痛いの？　杏子ちゃん？」
「痛くはないの……ただなんだか……」
杏子の裸体に、汗がにじんでいる。
「なんだか、おかしな気分だわ。変な感じ」
いやがっている様子はなかった。拓也は気を取り直してさらに指をぐっと中に差し入れた。
（ああっ！）
拓也は心の中で叫んだ。締めつけの厳しかった入り口をさらに奥に進むと、柔らかな直腸壁があった。直腸壁はうねりをあげ、拓也の指を柔らかく包みこむ。
（気持ちよさそうだな）
拓也は指をくねらせながら、さらに奥へと突き進んだ。若干の抵抗はあったものの、進めば進むほど、締まりはゆるむ。
「ふーふー、んむふぅぅぅぅ」
杏子はシーツを握りしめ、ぎゅっと目を閉じていた。痛みというほどの痛みはなかった

が、その代わりにわけのわからない不可思議な感覚が身体中を巡る。
「杏子ちゃん、かなり奥まで入ったよ。杏子ちゃんのお尻の中、温かくて柔らかいよ。どう、痛くない?」
「痛くない。き、気持ちいいのかな?　わからないけど」
「そうか」
バイブレーターは太すぎて危険だと、拓也はあたりを見まわした。机の上に太さ1センチほどのマーカーペンがある。
「杏子ちゃん、やっぱりあのバイブレーターじゃ太すぎて入らないよ。別なのにしよう」
「だったら……ああっ!」
震えながら、杏子は自分のカバンを指差した。
「私のバッグの中に……紙袋があるから」
「え?」
拓也は注意深く指を杏子から抜いた。淫らに四肢をのばしてぐったりとしている杏子を横目で見ながら、拓也はカバンを開けた。
「これかな?」
薄茶色の紙袋を取りだし、拓也は中を覗いた。

「なんだ、これ!」
中には、直径2センチほどの紫球が6連になった細長い棒状のものが入っている。慌てて取りだして握りしめると、柔らかくて感触がいい。棒の根元からはコードがのびていて、コントローラーにつながっている。紙袋の中にはそれと、乳液のようなものが入った小さなボトルが入っていた。
「アナルバイブとローションだって。彩香さんが、追加でくれたの」
息を荒げながら杏子が言う。
(なんなんだよ、彩香さんて人は!)
彩香の高笑いが、拓也の耳もとで響いた気がした。
「そっちなら、いいんじゃないかって思うの」
「わかった」
このアナルバイブをカバンに詰めてきた時の杏子の気持ちを考えると、下半身が奮いたつ。拓也はアナルバイブに粘りけのあるローションを塗りたくった。
「きて……。もうだいじょうぶ」
杏子は再び脚を開いた。
拓也はアナルバイブの先をアヌスに押し当て、ぐっと力を入れた。

「あああっ！」

バイブレーターのてっぺんの球が、まず杏子の尻に呑みこまれた。つづいてもうひとつ、そしてもうひとつと、おもしろいように球が入っていく。

「んんふふふ、ああくうぅぅ」

ぽこぽこと球が入っていくたび、杏子の身体は小さく痙攣した。痛みはなかった。その代わり、奇妙な快感がアヌスから背筋へと駆けあがる。

「くうぅぅ」

球は6つとも全部杏子の直腸内におさまった。拓也はたれたローションをティッシュで拭うと、ゆっくりコントローラーのスイッチを入れた。

「あああああっっ」

鈍い振動が杏子を震わせる。

「ああ、アアアア、アアアッ」

杏子はシーツをつかんで上半身を浮かせ、そのまま左右に身体を振った。直腸内を犯すバイブレーターの刺激に、いても立ってもいられないのだ。

「ああ、拓也君。拓也君！」

起きあがった杏子は拓也をあお向けに押し倒し、勃起したペニスに腰を沈めた。

「ちょっと、そんな性急に……うわ！」
先ほどまでよりももっと潤いを増した膣内に、拓也の肉棒は沈みこんでいった。
「あはん、んん」
アナルバイブの刺激を散らそうとでもいうように、女性上位になった杏子は激しく腰を使う。
「うわ、うわぁ、杏子ちゃん！」
膣内におさまった拓也のペニスは、皮1枚へだてたアナルバイブの振動をもろに感じ、ぴくぴくと痙攣する。
「すごいよ杏子ちゃん。杏子ちゃんがこんなにエッチだったなんて」
「やめて、そんな……」
身体中を赤く火照らし、激しく身悶えする杏子が可愛らしくて、拓也はつい、いじめたくなってしまう。
「だってエッチじゃないか。お尻にアナルバイブ突っこんで、騎乗位で腰振るなんて」
「ああ、そんなこと」
「本当だよ。すごくエッチだ。それに激しい」
「だってぇ、アアア。お尻が、お尻が」

「お尻？　もっとはっきり言えば」
「ア……アヌスが」
「気持ちいいの？」
「わ、わかんないけど」
「気持ちいいんだろ？　はっきり言わないと抜いちゃうよ」
「ヒイィィ」
拓也は腰を突きあげ、杏子の膣をかきまわした。
「ああ、アアアッアアアッッ」
杏子は髪を振り乱して拓也の上で暴れる。
「アアン、気持ちいいよぉ、気持ちいいよォォ」
「俺もだよ、杏子ちゃん！」
ふたりは肉をぶつけ合いながら、同時にクライマックスへと達していった。

☆

「杏子ちゃん、すごくよかったよ。可愛かった」
「私のこと、スケベだと思った？」
布団にうつ伏せに寝そべった杏子が、上目づかいに拓也を見あげる。

「スケべな杏子ちゃん、大好きだよ」
拓也も横に寝転がり、杏子の髪をくしゃっといじった。
杏子はしばらく頭をいじられるままになっていたが、やがて拓也の背中に腕をまわし、じっとりと汗で湿った豊満な乳房を押しつけて、言った。
「ね、もう1回しよ」
「え?」
「ねえ、いいでしょう?」
「もうパワーないぜ」
「うんもぉ、イジワル言わないでよ」
杏子は拓也の手を取り、自分の股間に導いた。
「ね。スゴイ濡れちゃってるでしょう?」
確かに杏子の蜜壺からは、ねっとりとした液体がしたたっている。
「ねえ?」
杏子の甘いささやきに、拓也のペニスもむくむくと勃ちあがる。
杏子は勃起したペニスを握りしめ、自分から開いた脚の間に導いた。
杏子の導きで濡れそぼったヴァギナにペニスの先を据えた拓也は、おどおどしていた頃

の杏子を回想した。
（こんなに、エッチになるなんて、あの時は思いもしなかったな。抱くたびに杏子ちゃんは柔らかい感じになっていくし、感度もあがったみたいだし。まさかアナルバイブでよがるなんて思わなかったし。これが、開発されたってやつなのかな？）
亀頭のほくろが消えてから、2週間がすぎようとしていた。
結局、最後のほくろはミークの幸せで消えたのだろうと、拓也たちは納得していた。起立したペニスは射精もできるし、拓也の運は最近そう悪くもない。
「してぇ」
杏子の鼻にかかった甘いささやきに、拓也は腰に力を入れた。
と、その時。
「せいねぇぇんっっ！」
部屋のドアが勢いよく開け放たれ、レースのいっぱいくっついた白いスケスケネグリジェに青いカーディガンを羽織った彩香が、わめきながら拓也の部屋に押し入ってきた。
「きゃあぁ！」
杏子は慌ててシーツを身体に巻きつけ、拓也は脱ぎ捨てていたブリーフを足に通した。
「あ、彩香さん！　なんですか、血相変えて」

彩香はだいぶ慌てている。寝入りばなだったのか化粧すらしておらず、髪はかなり乱れている。
「お願いよ、なんとかしてよぉ！」
彩香はぺたんと、その場に尻をついた。
「なんとかって、いったいどうしたんですか」
「どうしたもこうしたもないわよ！」
彩香は、開けっぱなしのドアを力なく指差した。
「ええっ⁉」
拓也と杏子は、声を揃えて叫んだ。
「ミーク！」
おずおずと申しわけなさそうに、赤い髪で緑の目を持つ少女が、照れ笑いを浮かべながら拓也たちの前に姿を現わした。
「てへへへ……」
ミークは、恥ずかしそうに肩をすくめると、彩香の後ろにぴったりと寄り添い、小さな、消え入りそうな声で言った。
「私ぃ、拓也さんの担当を降ろされちゃったんでぇ、どうしようかなぁと思ってたんです

けどもぉ、ある日疲れ果てた先輩から頼まれてつい……まあ、知ってる人だからやれるかなぁと思ってぇ」
彩香が、悲鳴のような声をあげた。
「こいつ、よりによって私の守護精になってそうそう、失敗やらかしたらしいのよぉ！　私、悪運だけは強かったのにすっかりぼろぼろになって、それでなんとかしよーと思ってたら……」
「また、出てきちゃいましたぁ」
ミークが、舌をのばした。
「1週間以内に4人の男を幸せにしないと、私一生結婚できないらしいのよぉ！　拓也、あんた手伝いなさいよ！」
啞然とする拓也と杏子の前でネグリジェをまくりあげ、Tバックのショーツを降ろした彩香のワレメの間には、陰毛の上からでもはっきりわかる4つのほくろがあった。

【おしまい】

あとがき

まずは、手に取ってくださった読者の皆様に感謝します。どうもありがとうございます。
とりあえずはじめに、手に取っただけでまだ購入していない皆様向けに、ストーリーなんぞ紹介させていただきます。
主人公の岡崎拓也は予備校生。最近、なにかとツキのない、かわいそうな男の子です。ギャンブルは全然ダメ、動けば転ぶ、買ったパソコンは初期不良品。さらに、ずっと憧れつづけていた女の子をついにホテルまで連れこんだものの、なんと火事。
あまりのツキのなさに駆けこんだ先は「ラブリー心霊相談所」。でもそこも風俗まがいのインチキ相談所だったうえに、とんでもない事件に巻きこまれて……。
どうでしょうか？　ちょっとは購入してくださる気になりましたか。まだですか。

じゃあ、登場する女の子でも並べてみましょうか。
とってもキュートなツインテールの女の子に、清純なセーラー服のお嬢様。年上好みのあなたには、スタイル抜群のお姉様がおすすめ。野外プレイ大好きの巨乳美少女もご用意いたしました。さらに今回の目玉、ロリータ好み&人類以外がお好きなあなたにおくる、ロリロリな守護精霊のミークちゃん！
どの娘も、挿し絵の鴨川たぬき先生にとっても可愛らしく描いていただきました。鴨川先生、どうもありがとうございました。
さて、次に全員購入して、もうすでに本文を読み終わったと仮定して、ちょっと本文の補足を入れさせてください。
この小説の中でミークは守護精霊として登場しますが、私の裏設定では（本文中にもちょこっとあるけど）人間には最初から守護霊が憑いていて、守護精霊は守護霊に委託されてその人間を守るお仕事に就く（こっちは『憑く』、じゃなく『就く』）、という形になっています。守護霊は守護精を選ぶことしかできず、単体でその人間を守ることはできないという……ちょっとわかりづらいですね。ごめんなさい。要するに、守護霊は憑いている人間のユーザーで、守護精霊はサービスマンだと思ってください。この世界では、守護精霊もサラリーマン（ミークはOL？）なわけだし。以上、補足でした。

ここからは、普通のあとがき。

再度、この本を手にしてくださった皆様に感謝いたします。

今回の小説は、私自身、楽しみながら書くことができました。私は普段、いわゆるマニア雑誌でハードSMや浣腸もの、レイプものなど、その雑誌のテーマに合わせてたとえどんな無茶なものでも書くようなお仕事（それだけじゃないけど）をしているので、今回のように自由に世界をつくることのできる小説は、自分で執筆しながらワクワクしていました。

書いているうちに、主人公やヒロインたちが大好きになり、彼らをもっともっと気持ちよくさせてやりたいと、エッチ描写にも力が入ったような気がします。まるで、自分が彼らとキモチイイコトしているような思いでした。

本当のところ、書きあげてしまうのが惜しいような気さえしたんです。私の中ではすでに、本文ラストの、その後のストーリーができあがっているくらい。

読者の皆様にも、彼らを大好きになってもらえたらうれしいです。

最後になりましたが編集のK様、わがままなうえに時々行方不明になる私に根気よくおつき合いくださり、本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いします。

そして挿し絵を描いてくださった鴨川先生に、再度お礼申しあげます。
そしてそして、もう何度でも、読者の皆様にありがとうを言いたいです。それからちょこっと本音……また本が出たら、買ってね。

以上

フランス書院が総力を結集して贈る
ハイブリッド・コミック雑誌の数々
——Xコミックスでもおなじみの
超人気マンガ家が大集合！

月刊COMIC パピポ

定価330円
毎月29日頃
爆裂発売！

美少女コミック界をリードする月刊誌

コミックパピポ 外伝

定価350円
毎月19日頃
神出鬼没の過激発売!!

過激でエッチでコーフンいっぱい。
読み切り作品中心のコミック誌!!

コミック ZiP

定価330円
毎月9日頃
ドキドキ発売!!

超有望新人大集合！
フレッシュな力でいっぱい！

※価格は全て税込みです

◎A5判／単行本

エッチとコーフンの おもしろコミック単行本！

夢跡のメモリオーラ
果愁麻沙美
猫耳少女に罪なお姫さまフロス……。謎が謎を呼ぶ♡過激でシュールなラブストーリー！

そして目覚めのはじまり
あきふじさとし
女教師玲子、春実、千明、かえで…放課後の保健室で禁断の性に目覚めていく美少女たち。

レミング狂走曲【始まりの狂想曲(カプリチオ)編】
かわらじま晃
無垢な美少女♡礼美の肉体を蝕むH実験。描き下ろし140ページを加えた連作第1弾！

レミング狂走曲【激闘の狂詩曲(ラプソディー)編】
かわらじま晃
礼美を監禁し嬲りつくすレミストルの魔手はさやかの肉体をも標的に…衝撃連作第2弾！

レミング狂走曲【永遠(とこしえ)の協奏曲(コンチェルト)編】
かわらじま晃
レミング三部作、最終巻。単行本描き下ろしのオリジナルエンディングをチェックせよ!!

おねーさんとあそぼうっ！
山文京伝
日常の狭間に忍びこんでくる心の闇の虜となった人妻たち…山文京伝のエロス&禁断遊戯。

フランス書院コミック文庫

ドッキリ☆ドキドキッ!……
おもしろ光線♡直撃コミック

あの娘にラブ光線! YO-KA
看護婦さん&セクシーレディの危険な挑発…大ブレイクする美少女たちの過激なH物語!!

いきなりハーレムナイト 有村しのぶ
セクシーな姉、エレベーターガール…不思議でHなストーリー満載のお買い得コミック!!

家庭教師☆小夜香 飛龍 乱
成績UPのごほうびは、小夜香のセクシーな肉体…。禁断のレッスンは刺激度200%!!

あるばいと大作戦! 豹高ユキ
放課後は秘密のアルバイト…お店が終わったあとは制服を脱いで超エッチな残業タイム!?

ハッスルブラッド! ものぐさうるふ
姉に憧れる猛。その思いに気づかないみのり。微妙にすれちがう義姉弟にラブチャンスが!?

保健室で逢いましょう 美和卯月
パイ×リ、フェ××オ…。グラマー女教師♡岸川先生の愛とHあふれるだいたん挑発授業。

少女水中花 ダーティ・松本
深夜のプールで強制される水中フェラチオ。巨匠が描く、衝撃のSM&レイプコミック!

君の笑顔がまぶしくて 雅亜公
夢にまで見た美少女たちの笑顔は、まぶしく、そしてエロチックに…雅亜公が描く青春物語。

ぴんく☆しゃっふる! 猫島 礼
内気な桃華、アンドロイドのピーチ。美少女達が恋にHに活躍するマジカルストーリー!

学園天国 ゴーストinハイスクール 楠見かずま
幽霊・紫乃達の奇妙な三角関係。いたいけな少年少女も巻きこんで、学園はエッチ天国に。

ボクのママに手を出すな! 千葉治郎
隣に引っ越してきた未亡人は学生時代の恋人。当たり前のように再びはじまった背徳の関係。

楽しく、楽しく、エッチにね♡ 藤村知樹
むちむちブルマーにスクール水着…まぶしすぎるセンセーション。コミック文庫初収録!!

フランス書院コミック文庫

エッチとコーフンの新世界 超おもしろスペクタクル！

カリーナの冒険【野望編】

まいなあぼおい

女にされてしまった王子カリムの肉体に刻まれる奴隷の印！…超官能冒険ロマン第1部！

カリーナの冒険【魔導編】

まいなあぼおい

女親衛隊長と身体を交換し、城外に冒険の旅に出たコロナ姫が監禁・凌辱の大ピンチに！

フランス書院 ナポレオン文庫

FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO

ド迫力イラスト30ページでつづる、
エッチと夢と冒険の近未来ノベルズ!!

魔淫の侵略者
次元特捜EXERON（エグゼロン）
星野ぴあす／十羽織ましゅまろ画

突如、現れた地球外生物と謎の巨人。敵駆隊員☆梨菜子を巡る感動と官能の近未来小説!!

ノヴェレア王国興亡秘話
奴隷少女と魔宝石
深谷美妃／たむらまもる画

奴隷少女に女盗賊を引き連れて、スアルドは王国興亡の鍵を握る魔宝石を探す旅に出た！

電脳★レッスン
美那子先生の個人授業
江沢民男／篠原哲生画

憧れの美那子先生の個人授業は究極の電脳ゲーム。ときめきのエッチ体験はとまらない！

トレジャーガード沙羅
禁断の魔淫玉
中笈木六／百済内創画

揺れるDカップの乳房、うなる拳、素早い足技。無敵の少女、沙羅の体を狙う謎の組織！

ド迫力イラスト30ページでつづる、
エッチと夢と冒険の近未来ノベルズ!!

禁断のトレジャー★サーガ
猫耳少女アリシアの夢冒険
工藤俊彦/八月 薫 画

アリシアの肌を嬲るサイメタルの鞭、静流の体内に入りこむ触手。お宝探しは大ピンチ!

精霊界のお騒がせ娘
ミークにおまかせ!
安童あづ美/鴨川たぬき 画

野外プレイに淫魔退治。ドジな守護精霊ミークのせいで拓也は4人の女とHをすることに。

月夜の睡魔にご用心
紅くりす/果愁麻沙美 画

月夜に突然やってきたおっちょこちょい美少女睡魔★ミチルのエッチ修業がスタートだ!

小説大賞募集！

◆ナポレオン文庫は小説＋コミックの進化形。ボクらによる、ボクらのための文庫です。◆当文庫編集部は、新しい才能を求めています。◆テーマはファンタジー、ＳＦなどなんでもあり。若い世代に向けたポルノ小説であればジャンルはいっさい問いません。◆新しいセンスに満ちた、夢のある作品を期待しています。◆

◆大賞＝30万円◆入選＝15万円◆佳作＝5万円◆奨励賞＝3万円

【応募概要】 **◆募集作品**＝自作未発表のもの。 **◆応募資格**＝プロ、アマ問わず。 **◆原稿枚数**＝400字詰原稿用紙30〜50枚。ワープロ原稿可。原稿には必ず通し番号をつけ、原稿の第1ページの前に必ず800字程度のあらすじと、タイトル、氏名（ペンネーム使用の場合は併記）、住所、年齢、職業、電話番号を明記した別紙を添付すること。

◆応募原稿は返却いたしません。コピーを取っておくこと。

◆応募は郵送にかぎる。 ◆審査結果の電話等での問い合わせには応じられません。 ◆発表はコミック『外伝』誌上にて。

【応募宛先】 〒112 東京都文京区後楽2-23-7 フランス書院
ナポレオン文庫編集部 「ナポレオン文庫大賞」係

◆編集部への原稿持ちこみも随時募集中。まずは電話連絡を。
☎ 03-3818-2681 ナポレオン文庫編集部 持ちこみ担当まで

ISBN4-8296-2099-4

C0193 ¥524E

★定価 本体524円 +税

拓也の周囲に女が集まる。
ボディコン霊能力者・彩香、
ロリロリ守護精霊ミーク、
巨乳女子大生・雪江、
そしてお嬢様女子高生・美里。
でも、本命の恋人★杏子とは、
いつもすれ違うばかり……。